

# 国史の地熱

桑原暁一遺著

— 聖徳太子と楠氏の精神 —

国文研叢書16



法隆寺百済観音像

国文研叢書

No. 16

社団法人 国民文化研究会

国史の地熱

——聖徳太子と楠氏の精神——

桑原 暁一 遺著

## 刊行のことば

一人の高校教師が、昭和四十八年春、都下の病院で手術の効もなく、多くの生徒たちの愛惜の涙の中でこの世を去った。彼は、若かった時に、一高、東大といふ世にいふエリートコースを歩んだ学究であったが、その一生は栄達を求めず、ひたすらなる求道捨身——しかも世俗さながら凡人の姿のままでの——生涯を送られた人であった。

彼の葬式はごくひっそりと行はれたのに、すでに、入院直前に定年退職をしてゐて、その時は、学校に籍さへないのに、彼の冥福を祈るべく大ぜいの在校生、卒業生が、誰いふとなく集つてゐた。

身だしなみをかまはず、瓢々とした挙措動作の中でも、いつも本物と偽物の区別を鋭く見分けてゐたのが彼であり、高校生に対して渾身の愛情をもってその指導に當つてゐた彼でもあったから、恐らく生徒たちは、この先生の眼識と心情とに対して、畏敬と愛惜の念を禁じ得なかつたのではなからうか。

本書は、彼——すなはち、私にとっては往時、私が一高生であったとき以来の、得難い先輩である桑原暁一さん——の遺稿の一部が、同信の友人たちによって編まれたものである。いま、この文章を刊行することは、教育問題を中心として多大の課題をかかへてゐるいまの社会に、裨益する所があるにちがひないと思つたからであり、また、桑原さんのやうな立派な高校教師、そしてすばらしい学者が世を去られたことを、世間にお伝へしたためである。

(亜細亜大学教授・国民文化研究会理事長 小田村寅二郎)

## はしがき

元佐賀大学教授・教育学博士 副島 羊吉郎

「美しい物は美しい精神から生まれる。」これは故桑原暁一（昭和四十八年五月二十九日歿享年六十二）の美学の結論である。しかし、桑原さんはこれをどの論文にも書きとめていないようである。私はこの言葉を昭和四十八年一月二十日の夜、最後に会った時に、直接桑原さんの口から聞いた。それ以来頭にこびりついている。桑原さんがこの結論を引き出すに至った根拠は何か、桑原さんの書かれたものの中からつぎのような点を拾って見た。

(一) 聖徳太子と法隆寺。桑原さんは日頃生徒に、自分が最も尊敬する人物は聖徳太子だと誰はばからず言っていた。四十年の交際から私もその言葉に、みじんの偽りのないことを確信する。法隆寺の美しさ、芸術品として価値については世の定評があるので今さらここで論ずる必要はない。法隆寺は太子の直接建立になるものではないが、太子の薨逝を知って「老いたるは愛児を失へることく」「幼きは慈父母に別れしごとく」悲歎した（日本書紀）全国民の太子鑽仰の心が法隆寺の形となって顕現したことは間違いはない。

してみると、太子の崇高なる精神がそうさせたといえる。その太子の精神は「共にこれ凡夫のみ」とか「群生ぐんじょうと苦楽を共にす」とかの言葉からも伺うかがわれる通り、気高い無私の「和」の精神で、桑原さんは、これを「忍辱（にんにく）」「慈悲」の精神、すなわち「目に角を立てぬこと」「思いやりあること」と解釈している。ことに法隆寺の五重塔の美しさについて、「上求菩提じょうぐぼだい下化衆生げしゆじょうの精神そのものである」と称たたえ、「両の手に広く衆生を抱きつつ、急がず、あせらず、だんだんと衆生を上へ上へと引きあげて行く、といったらよいであろうか、またそれは『和』の形と言ってもよい」と説明を加え、「太子にあって『和』とは、相共により、高きものを志向する、ということであった」と結んでいる。

桑原さんは法隆寺の気貴い美しさは、太子の精神から生まれたものと信じて疑わなかった。

(二) 観心寺と楠なん氏。河内長野から数キロのところ楠氏の菩提所である観心寺がある。

昭和四十三年四月四日私は桑原さんにつれられてここに参拝した。桑原さんは二年前にこの寺を訪れてその美しさに打たれ、その感動止み難く私を誘って、再度訪れたのである。

正行まさつらの造建になるこの寺が、正行の戦死後「神社仏閣に乱れ入りて、戸帳を下ろし、

神宝を奪い合い、狼籍手に余って、制止に拘らず、獅子駒犬を打破って薪とし、仏像経巻を売って魚鳥を買う。前代未聞の悪行なり云々」(太平記)の如き朝敵畠山勢のパーバリズムを逃れて、六百年後の今まで残っているのが奇跡である。国宝の金堂がその核であるが、その美しさを桑原さんはつぎのように述べている。「胸を張って天空を望む、といった堂々たる構えではなくして、伏目がちに何か思いを凝らしているような、沈重な姿である。それは、この地上に存在する最も美しいものの一つである。」(本書八二ページ)また、この本尊の如意輪にょいりん観音は日本三如意輪の一つで、その美しさは随一とたたえられている。このように美しい物が、そのまま六百年も無傷であることは、まことに不思議であるが、それより不思議なのは、日本歴史における楠木正成くすのきまさしげ、正行まさつらのような人物の出現ではないか、と桑原さんは言う。父子、二代にわたって、その一族郎党に至るまで、天朝に対し最後の血の一滴まで捧げつくした。何故か？唯物史観では説明つかない。だから、彼等は不可解とするか、避けて通る。しかし、歴史の出来事は、小林秀雄が言う通りいつでも個性である。いわゆる科学はこの個性の取扱いに手をやく。その個性を活かすには「思い出し」「心の中に甦らせる」以外にはない。桑原さんは「その人

物になりきることだ」と言った。

ところで楠氏の「美しい精神」とは何か。桑原さんの説明をきこう。

楠一族は―北畠、菊池、名和、新田氏と共に、皇統の危機を救うために無償の生と死を捧げた。その純粹性だけでも美しいが、つぎのことも忘れてはならない。本書所載「有情の記」(八九ページ)による。

(1) 赤松円心の如きは、千早城の楠正成の奮闘に刺激されて旗をあげ北条氏討滅に功績があったが足利尊氏がそうであったように、その褒賞の少きを不満として、後では尊氏に属し南朝を苦しめたが、正成の進退は始終かわることがなかった。

(2) 正成が全く利害に無縁であったとは思われないが、それを感じさせない程彼はそれを超えていた。北条氏討滅成った日に正成はこの日を見ずに戦死した菊池武時をもって功臣の第一として推し、自分などは運よくこの日に遭って恩賞にあずかるものだといった。(実証史家はなぜかこの話にふれたがらない。美しいものは信ぜられない。というくせがあるらしい。)

(3) 正行は阿倍野の合戦において敗戦の敵兵を救った。すなわち「安倍野の合戦は霜月

二六日のことなれば渡辺橋よりせき落されて、流るる兵五百余人甲斐なき命を楠に助けられて、河より引上げられたれども、秋の霜肉を破り生くべしとも見えざりけるを、楠情ある者なりければ、小袖を脱ぎかへさせて身を暖め、葉を与へて傷を治さしむ。かくのごとく四五日みな労はつて、馬に乗る者には馬を引き、物具失へる人には物具をさせて色代してぞ送りける。されば敵ながらも、その情を感じる人は今日より後心を通せんことを思ひ、その恩を報ぜんとする人は、やがてかの手に属して後、四条繩手の合戦に討死をぞしける。」(太平記) (ここには敵味方を超える普遍的な人倫意識が見られる。それがありがたい。)

(4)楠と対照するため足利尊氏について記しておく。尊氏は湊川合戦に楠正成を破って大勝して入洛し、光明天皇を押し立てた直後、清水寺につきのような願文を奉った。

「この世は夢のごとくに候、尊氏に道心たばせ給候て後生たすけさせをはしまし候べく候。猶々なほなほとく遁世とんせいしたく候。道心たばせ給候べく候。今生こんじょうの果報にかへて後生たすけさせ給候べく候。今生の果報をば直義ただよしにたばせ給候て、直義安穩にまもらせ給候べく候。建武二年八月十七日尊氏花押。」この願文を吉野秀雄(歌人)までが内容筆蹟共にほめて

いるのに対し、桑原さんは「この願文が心にもない、いや、弟の直義を欺く下心のあるものであることは、やがて直義を毒殺したことによって弁解の余地はない。彼は直義を欺くために仏を利用し、仏を欺いたのである。楠氏の『なさけある者』であるのに対して、『なさけ無き者』と言わねばならぬ。ぼくにはこの願文は、遊女の起請文きしょうもん以下のものと思えぬ。それは云い過ぎであらうか。」と反駁している。

桑原さんは日本史の中で「勤皇ほど美しいものはない。」と言ひ、晩年はもっぱら楠木正成の研究に専念し、その成果の一部を国民同胞誌に発表した。

それを集めたのが本書第二篇「楠氏を慕いて」である。そして前述の聖徳太子鑽仰の文章を集めたのが第一編「聖徳太子を慕いて」である。これに附篇として「青年時代の論考から」を加えた。

著者（桑原曉一）略年譜

明治四十四年八月十六日 山梨県谷村に生る。

昭和四年三月 東京・本郷中学校を卒業。

昭和五年四月 第一高等学校（文科甲類）入学。一高昭信会（国民文化研究会の母胎）の会員となり、聖徳太子・親鸞の信を相続す。

昭和十一年三月 東京帝国大学文学部国文学科を卒業。卒業後、外務省調査局・内閣情報部・精神科学研究所に、戦後は民間企業に籍をおき、研究執筆活動をつづける。

昭和二十八年 東京都立千歳高等学校国語教師となり、歿年の三月に至る。  
昭和四十八年五月十九日 逝去。享年六十一。

主要著書

『日本精神史鈔』（国民文化研究会発行・国文研叢書No.2 昭和四十一年）

『続日本精神史鈔』（国民文化研究会発行・国文研叢書No.11 昭和四十五年）

編著『ヨーロッパにおけるマルクス主義批判論集』（国民文化研究会発行・国文研叢書No.14 昭和四十八年）

編集協力執筆『欧米名著邦訳（明治）集・文献資料集』（小田村寅二郎編、国民文化研究会発行・国文研叢書No.10 昭和四十五年）

同『新輯・日本思想の系譜・文献資料集（上・下）』（小田村寅二郎編、時事通信社発行・昭和四十六年）

## 凡 例

一、本書は故桑原暁一氏の生前に発表した論説を友人数名が協力して整理編集したものである。

「遺著」と言っても一種の遺稿集である。

一、第一篇（聖徳太子を慕いて）第二篇（楠氏を慕いて）の二篇は、「国史の地熱」と題する第二篇中の遺稿一篇をのぞいて、すべて月刊『国民同胞』（国民文化研究会発行）に掲載されたものである。それを二つの篇に分けて発表年月順に並べたのである。昭和三十七年三月から逝去の直前昭和四十八年四月までの文章である。

一、附篇（青年時代の論考から）は、昭和八年東国文学科在学中から昭和十八年憲兵隊に逮捕されて執筆活動を禁止されるに至る戦前戦中の文章の中から、第一篇第二篇に関連のあるものを選んだのである。

一、したがって本書は前著『続・日本精神史鈔』にさらに続くものになった。

一、かなづかいは発表時の原稿のままとした。戦前戦中の文章が歴史的かなづかいに拠っているのはいうまでもないが、戦後のものは第一篇第二篇の大半が現代かなづかいとなっていて、最後の文章が歴史的かなづかいとなっている。本書全体としてみると不統一のそしりをまぬがれない。

しかし、著者の文章に改変を加えることはできないと考えて、右のようにしたのである。著者は、最後に歴史的かなづかいで書いているので、そこに遺志のあったことがわかるが、その心をおさえて、若い人に読みやすくということ念じて、戦後はずっと現代かなづかいで書いたのだと思う。

一、漢字は当用漢字に統一した。

一、著者は生前文章にふりがなをつけるのを好まなかったが、人名・地名など読みやすくするために、編集者の方で勝手につけさせていただいた。また人物の生歿年についても西暦年数を括弧内に入れた。7ポ二行のものは編者のつけたものである。その他は著者記入のもの。多少文章の美しさをそこなうが、やむを得ない。

一、引用文の中に、漢文の白文があったが、これも読みやすくするために訓読文に改めた。若干誤りがあるかも知れないが、おゆるしを願いたい。

一、本書の書名および篇名は、著者の心をしるんで編編者の考えたものである。著者が生きておられたらもっといい書名や篇名がついたことと思う。ただ、こういう名をつけた由来については「あとがき」に記した。

一、挿入写真は中扉の写真を含めてほとんど全部編者の意図によって入れたものである。著者が選ばれたらもっといいものが出来たろうが、全く図版を入れないのではさびしいと思って十数葉を選定した。著名なものなので一々出典を記さなかった。

一、本書の各文章の末尾に発表誌の発行年月日を入れたが、著者が執筆年月日を記入して発表したものは、そのまま執筆年月日を入れた。

一、その他刊行の次第等多く「あとがき」にゆずる。

一、本書の作成に直接たずさわったのは国民文化研究会の小田村寅二郎、葛西順夫、梶村昇、島田好衛、戸田義雄、夜久正雄その他である。(夜久正雄記)

# 目次

刊行のことば	1
はしがき	3
著者（桑原暁一）略年譜	9
凡例	10
第一篇 聖徳太子を慕いて	1
無信の信(3)・「人間」発見(6)・和について(9)・歴史の底にあるもの(12)・自他を分かつ(15)・日羅のこと(17)・馬子の問題(28)・白鳥の記(32)・葉狼の記(37)・駱駝と葡萄(44)・法王帝説の挽歌(47)・吾妻はや(49)・若き日の聖徳太子―伊予温湯銘文について―(57)・壬生記(61)	
第二篇 楠氏を慕いて	67

小歌うたひて—太平記より—(69)・菊水の記(76)・観心寺の記(81)・信貴山の記(85)・有情の記(89)・磯長・天王寺の記(94)・つつじの記(98)・純一なるものを求めて(103)・楠氏のこ  
と(106)・神魂神社のこと(109)・竹葉記(111)・夢殿観音記(115)・七生滅賊—「看聞御記」から  
—(121)・国史の地熱(127)

附 白鷺の記(135)・友松の記(140)・水仙記—天心・松陰・素行・蕪村—(146)

附篇 青年時代の論考から(『伊都之男建』その他から)

.....153

天地とともに(155)・渡辺崋山『慎機論』を読む(160)・不退転の一路(166)・精神科学研究の出  
発点(172)・歴史哲学に就て(177)・大平記の劇的要素(179)・時事評論家としての日蓮上人(186)  
・『山鹿素行先生日記』から(194)・近松と親鸞(199)・宗教生活の国語の表現(203)・発見の  
生(206)・ひらくる世界(208)・三条実美公の歌(上)(210)・同(下)(218)・法華義疏の研究(232)  
・法華義疏より(239)・藤原藤房論(241)・青蓮院宮(248)・捨身固国—山背大兄王の御生涯(258)  
・一幕吏の人生記録(265)

あとがき.....

(亜細亜大学教授 夜久 正雄).....276



## 第一篇

### 聖徳太子を慕いて

無信の信・「人間」発見・和について・歴史の底にあるもの・自他を分かつたず・日羅のこ  
と・馬子の問題・白鳥の記・葉胤の記・駱駝  
と葡萄・法王帝説の挽歌・吾妻はや・若き日  
の聖徳太子・壬生記



法隆寺・五重塔と金堂

## 無信の信

信仰とか信念とかは、人の精神を異常にする。いわゆる新興宗教の信者にわれわれはこの適例を見るであらう。きのうふきこまれた信念を、今日は人に押しつけるのに熱中する、といったあんばいである。それが異常でなくて何であらう。これは新興宗教の徒にかぎらない、思想の左右を問わず、われわれは、このような信念に出会う。ある国のこととはすべて美であり、他の国のするところはすべて悪である、と強弁する。たまには、あれだけはわが方のあやまりであった、と、その非を認めてくれれば、われわれも救われるのであるが、絶対にそのようなことはしない。事実をくわしくしらべ、学説を公平に検討して、そのような信念に到達したのではない。自分の素質からか、環境のせいか、なにか知らんが、いつの間にかそのような信念のとりこになって、それを固めるのに役立つものしか事実とは認めないし、学問として重んじない。そこでは人間関係は同志か、しからずんば敵か、ということになる。信念とは、このようにして、自在に他

に同感することを妨げる厚い壁である。つねに、自己を他に押しつけるか、他からかたくなに自己を守るか、どちらかである。そこには自他に通うもの、自他を超えるものが疎外されるのである。仏教信仰はソガノウマコにおいて、天皇殺害と両立するものであった。この馬子(六二六)を放置したことをもって聖徳太子(五七四)をダラシガナイと責める議論が昔からあった。しかし、それは太子を馬子と同一の水準までひきおろすことにはかならない。仏教は太子に馬子とは別のものを与えた。太子は馬子とはちがう人間であったがゆえに、仏教から別のものを受けとった。というほうがよいかもされない。それは無信の信といふべきものであった。いわゆる信念とは自他を限定することである。ことばをかえれば、己れを正しとし、他をあやまりとすることであり、己れを賢しとし、他を愚かなりとすることである。この、自他の限定からはなれて、ともにこれ凡夫、として、自他に通うもの、自他を超えるものを求めたのである。そこにはたえざる自己否定がある。おのれの信仰、おのれの信念として立てるなものもない。信念をもつことほど容易なことではなく、また信念ほど容易にくずれるものもない。そこでは生は、いわば閉ざされている。そのなかで信念は一人芝居を演じて、威ばったり、しょげたりして

いるわけである。「国民同胞」ということは、国民が同じ信念でカタマルということではない。それは「人類同胞」感に通うものがなければならぬ。それあってはじめて「国民同胞」ということも生きるのである。そうでなければ、ある「国民同胞」と他の「国民同胞」とは別々のものとなり、時には敵対関係を持つことにもなる。太子の亡くなられたとき、上下ひとしく日月を失ったごとく悲歎した。しかしこの悲歎を共にしたものは、国の外にもいた。かつて太子に親近し、いまは自国にかえっていた高麗（三韓の一國高麗の）

句の惠慈（六三）がそれであった。かれは悲しみのあまり、死期を予感し、太子のあとを追うようにしてなくなった。太子が隋におくった国書に、「日出づる処の天子書を日没する処の天子に致す、つつがなきや」とあった事について自分もその一人であるが一般に誤解してきたようである。太子は威ばってこういったのではない。天日を同じくするものとしての親しみのあいさつにほかならなかつたのである。

『国民同胞』三七年三月

## 「人間」発見

聖徳太子および親鸞(一一七三—一二六二)の信は、あらゆる人間を、ひとしく凡夫として捉らえることであつた。すべての人間は人間であることにおいてかわりがない。貴賤貧富賢愚長幼などの皮相の差別にかかわらぬ人間そのものを発見したのであつた。人間としてみれば、みなひとしく共に煩惱具足の凡夫にはかならない。すべての外的差別は実は虚仮なるものであつて、人間の価値はそれらによって規定されるものではない。万人に普遍する真実なるものによつてのみ、人間の価値が与えられるのである。このことを太子は、「世に生れながらに知るもの少なし。剋(よ)く念(おも)うて、聖と作(な)る」と言いあらわされた。この「剋念」は親鸞のことばで言えば「念仏」ということになるであらう。仏すなわち真実なるものを感知せしめられることによつて、はじめて人間は価値ある存在となるのであつて、生れながらにして価値的に差別があるのではない。この「人間」発見によつて日本の文化は開かれたのであつた。このことは多く説明を加えるまでもあ

るまい。推古紀(『日本書紀』)の伝えるところでは、百濟くだらから来たものに面身めんしん斑白はんぱくのものがあって、人々はこれを忌みきらい、海島に遺棄しようとしたが、造園築庭に巧みなるを惜んで、そのものを留め、その技術を生かさせた、という。この記事は推古紀では、太子とのかかわりにおいて伝えられてはいないが、太子の「人間」主義に支えられた事件のように自分には受けとれる。親鸞は京をはなれて、越後えちごや関東に止住し、田舎の人々に親しく接することによって、かれの「人間」発見は、よりたしかなものとなったであろう。かれは京の、いわゆる文化人たちよりもすぐれた多くの魂をそこに見出したのであった。この親鸞において特に顕著にみとめられる「人間」発見によって、鎌倉期以降、日本の文化が新たな展開を遂げたこと、これについても説明をさしはさむことはあるまい。近世において、「人間」発見もしくは「人間」回復をこころみたものとして、本居宣長もとせりのりなが(一七三〇—一八〇〇)を忘れることはできない。宣長については、かつて本誌に小柳陽太郎氏のすぐれた論稿があったので、それにゆずるが、かれを頂点とする国学が、すでに「人間」を見失っていた儒教仏教をはねのけて、地方民衆に生気を吹きこみ明治維新の素地をつちかったことだけを附言しておく。

以上を書きつけて、編輯部あて送ったところ、折り返し、もう少し書き足して、一頁分にしてほしい、という宝辺学兄の依頼をうけた。これは、このように、ごく短いものであるが、何度も書きなおして、やっとまとめたもので、これを破棄して全面的に書きあらためる気になれないので、木に竹を接いだようなことになるおそれはあるが、とりにそぎ、思いついたことを書き加える。——アフリカの黒人のうちに「人間」を見い出したシュヴァイツァー博士のゲーテ論を読んでいると、そこに引かれているゲーテの「無限の中へ歩を進めようと思うなら、有限の中であらゆる方向を尋ねるがよい。」ということばが目を惹いた。前にも目にした記憶のあるものだが、鈍感な自分の胆に銘ずることはなかったが、ここしばらく、聖徳太子のこのみ考えつづけていた自分には、ふと、これは、太子の「もし自他の二境を存して修行せば、その修するところ広からずして、物（衆生）とその苦楽を同じうすること能はず。」というおことばの注解であろう、と思われた。自他の二境をわかたず、物と苦楽を同じくする修行が、いわゆる「剋念」であろう。そして「剋念して聖となる」という、その「聖」とは、万人をほかにして、ひとり、無限の高きに進まんとするものではなくして、万人をおのれの中に生き、万人の中にお

のれを見い出すものにほかならぬのではないか。シュヴァイツァーはゲーテ論の中で、ゲーテの「人は気高くあれ、慈悲深く、善良なれ」ということばを、くりかえし引いている。そして、「高貴になること。ゲーテが、自分の歩むべき道として認識したのは、異質的なことを自分に強いるのではなく、自己を高めて高貴になることであった。かれの作品には、すでにできあがった英雄が、燃え上がる理想を抱いて出てくるのではなく、いつも、かれ自身があれこれと姿をかえて現われ、身をもって、自己の迷いと過ちとをきりぬけ、向上の一路を辿るのである。」ともいつている。ここにわれわれは「剋念して聖となる」ものの姿を見るのである。この「向上の一路」は、また「歎異抄」(親鸞の語録 唯円著という)の「念仏者は無礙むげの(さわり無き)一道なり。」の語におきかえることも許されるであろう。もし、向下即向上ということを見失わぬならば。

〔国民同胞三七年一〇月〕

## 和について

聖徳太子の維摩経義疏をあちこち拾い読みしていたら、経文の「心きよ淨く歆喜きシテ賢聖



聖徳太子と二王子像

「近ヅク」を積して、「人を  
 して心浄く和悦わえつして、愚に近  
 づけば即ち憂苦を生ず」とあ  
 るのにぶつかって、わが目を  
 疑った。「賢聖ニ近ヅク」と  
 あるのを、「愚に近づけば即ち  
 憂苦す」としてあるからであ  
 る。しばらく思案をつづけて、  
 この一見不可解な解釈の意味  
 あるところに、いくぶん触れ

えた気がした。——賢聖に近づく、ということとは、愚なるものに面をそむけて賢聖の仲  
 間入りをすることではない。愚と賢聖とは別々のものではなくして、愚を愚として憂苦  
 するほかに賢聖はない。愚はおのれの外にあるものではなく、おのれの内なる愚を愚と  
 すること、そのことが実は賢聖に近づくことにほかならない。ここにぼくは経文注釈の

筆を取りながらも、たえずおのれの内面に向けられる太子の目なごしを感ずる。他を愚とし、おのれを賢とするところには和悦はありえない。おのれの内に愚を見るもののみ、和悦して他の愚に近づき憂苦を共にすることができるのである。親鸞が「真実の教」と仰いだ大無量寿経に、法蔵菩薩ぼさつの修行しゆぎやうを述べている中に「和顔愛語わげんあいごにして意を先きにして承問す」とある。「意を先きにして」というのがちょっとわかりかねるが、「乗り気になつて」ということでもあろうか。それはとにかく、顔色を和らげ、優しい言葉で、だれかれに問いかける、ということであろう。和顔愛語は巧言令色こうげんれいしよくとはちがう。内に求めてやまぬものあつて、すべてのものに問いかける、その謙虚な心が自然和顔愛語となつて外にあらわれる。大無量寿経は義疏ぎしよ（聖徳太子著）にも引かれているから、太子の手にされた經典であつたことは疑いない。してみればこの「和顔愛語して……」の文も太子の心に刻みつけられたことと察せられる。ところで金光明経には「その土の人民自然に樂を受け、上下和睦してなほ水乳の如し。情（こころ）に相愛重して歡喜遊戯す」とある。太子憲法の眼目である上下和諧の思想は直接にはここから出ていると思われるが、これに限らず「和」は仏教そのものに流通する理念のように思われる。太子はそこから汲み上

げたと考えるほうがよさそうである。顔をこわばらせ、とげとげしい言葉、いな怒号をもって相手を威嚇しておのれのみ通そうとするのは人間のすることではない。人間の真実それはつねに和と共にあることを忘れないようにしたい。

(『国民同胞』三八年一月号)

## 歴史の底にあるもの

編集部から「歴史をつらぬくもの」と云う題を与えられたが、健康の思わしくない今のぼくには荷が重く、あれこれ考えあぐねているうちにメ切日が過ぎてしまった。今さらことわるわけにも行かず、とりとめもないことを書き流して責を塞ぐほかはない。

数年前、親鸞真蹟展と云うのがあってぼくも馳けつけて一覧したが、国宝とか重要文化財とかに指定されている彼の数多くの真蹟を目の前にしたぼくの感激は大きかった。

これが五十余年前には史家によってその実在の疑がわれた人物のものである。このことは彼の存在の仕方が世間並のものでなかったことを証明する。いわゆる史家の目にふれるようなところに存在しないで、その目の届かないところにかくれひそんでいたのだ。

った。

彼が門弟——と云うと彼に叱られるであろうが——に与えた書簡だけでも四十通ほど現存しているという。その門弟の多くは、彼のいわゆる「田舎の人々」である。その書簡は「信」について語るほか、世事に及ぶことがほとんどない。それだけに通俗の興味からは遠いが、信を深めあった師弟の純粹な魂のふれあいがある。親鸞の問題としたのは人間そのものであった。人間そのものを問題とするとき、そこに見出されるのはいわゆる「悪人」のほか人間はない、との自覚であった。しかしそれは自覚と云うのは適当ではあるまい。ただ、さんげの涙と共にある痛感である。逆に云えば、この「悪人」の痛感あつてはじめて人間は人間となる。ことばをかえていえば、眞実なるもの——仏——によつて見出されてはじめて人間は人間となる。世間虚仮・唯仏是真とは聖徳太子の遺言——留魂の語である。虚仮なる世間と眞実なる仏とは別々のものではない。虚仮を虚仮と感ぜしめるほかに眞実があるのではなく、眞実を求むること深ければ深いほど世間の——人間の虚仮なることを知らされるほかはないのである。

人間が人間を見出したとき、——と云うよりも人間が仏によつて見出されたとき、人

間は人間どうしとしてほんとうにむすばれる。親鸞と門弟とのむすびつきはそのようなものであった。だから彼は、「親鸞は弟子一人も持たず候」と云ったのだ。世俗にならって門弟とは云ったが、実は仏によって見出された人間どうしの結合なのであった。それは世俗の差別は必ずしも否定しないが、それを超えた人間どうしの結合である。

ぼくはかつては、本願寺の教線大いに張った蓮如（二四一九）によって、親鸞が開山上人としてそしてその存在をたしかなものにした、と考えたこともあったが、実はそうではなく、親鸞の心を心とするほかに「蓮如」は存在しなかった。親鸞の信は長く歴史の表面にはあらわれなかった。それだけ歴史の大地に深くしみ込んだ。蓮如の活動はこの地盤に立って効果を収めたのであった。「蓮如上人御一代聞書（まきがき）」は日本人の手に成った名著の一つである。その中で心ひかれる一節を引く――

仰せ（蓮如の）に、身をすてて、平座（へいざ）にてみなと同座するは、聖人（親鸞）の仰せに四海の信心の人はみな兄弟なり、と仰せられたれば、われもその御ことばのごとくなり。又、同座をもしてあらば、不審なる事をも問へかし、信をよく取れかしとのねがひなり、と仰せ候ひき。

ヒューマニズムといつても、「四海の信心の人はみな兄弟なり」と云うことと別のことではあるまい。しかしいわゆるヒューマニズムは「信心を共にする」、という契機を見失つてはいはしないであらうか。親鸞蓮如の四海兄弟主義は、いわば高められたヒューマニズムである。——蓮如が亡くなつたとき、その遺骸を拜するもの数万人に及ぶといふ。(聞書) このことは必ずしも蓮如のよろこぶことではなかつたであらう。彼は口ぐせのように、一人でも二人でも、ほんとうの「信心の人」の出ることをねがつた。しかし一人か二人のほんとうの信心の人あればその信は万人に通うことも否定できぬことであらう。

(『国民同胞』三九年二月)

## 自他を分かつたず

顯あき 維ゆい摩ま經ぎやう (菩薩品) の經文に、「心淨ク歡喜シテ賢聖ニ近ヅクコトヲ起コス。惡人ヲ憎マズシテ調伏ノ心ヲ起コス。」とあるについて、聖徳太子は、「心淨ク歡喜シテ賢聖ニ近ヅクコトヲ起コス、とは、即ち人をして心淨く和悦せしめ愚に近づけば即ち憂苦を生ず。

悪人ヲ憎マズシテ調伏ノ心ヲ起コス、とは、苦し能く自ら調伏すれば即ち三毒起こらざるが故に、悪人をも憎まざるなり。」と注疏ちゆうそせられている。一見、經文を逸れた、無理な訓み方のようにあるが、よくよく考えてみると、なるほどとうなづくほかはない深い訓みである。体読とでも云うべきか。——賢聖に近づく、と云うと、愚者とは手を切って、自分だけ別の途を往く、と云うことになりかねない。それでは自他を分かつことになる。そのことは太子のもっとも戒められたことである。賢聖と愚者とは別々のものではない。おのれの愚を自覚せるものがすなわち賢聖である。われこそ賢聖なりと自任するほど愚かなことはない。したがって愚に近づく<sup>と</sup>心がいたむ、と云うのは、その愚は他人事とは思われぬ、と云うことであり、彼我共に愚者である、との自覚に促されて、共に賢聖に近づく、と云うことでなければならぬ。經文の「歡喜シテ」を「和悦せしめ」と云いかえてあるのも、このような理解に基くものであろう。「歡喜シテ」は、自分ひとり<sup>の</sup>よろこびを表わすものであり、「和悦せしめ」は相手に向かう親しみの表情である。次に、經文の「悪人ヲ憎マズシテ調伏ノ心ヲ起コス」とあるのは、自分は悪人ではなくして、他の悪人を調伏する、というように受けとられることをおそれて「自ら心を調伏

すれば云々」と訓まれるのである。自分とてもと悪人であることにはかわりない。ただ自分はそのことを自覚せるものにすぎない。飢えて盗みをはたらいた、少くともはたらこうとした覚えのあるものならば、そのような盗みをしたものを憎むわけにはいくまい。またそのような覚えのあるものにしてはじめて、彼我手を取りあつて悪の調伏に向かうことができる。―このようにして太子はどこまでも「自他を分かつた」と云う立場を離れない。

ぼくは義疏の熱心な研究家ではない。ただ折にふれて、あちこち拾い読みして、その間に心にふれるものを見出してよろこんでいるにすぎない。さきごろぼくの目をとらえたものの一つをここに書きしるしたのである。

(四一・三・二〇記)

## 日羅のこと

推古紀に新羅征討に關して不思議な記事がある。すなわち――

十年春二月己酉朔、来目皇子を撃新羅將軍と爲し、諸の神部及び国造、伴造

等併せて軍衆二万五千を授く。夏四月戊申朔、將軍來目皇子築紫に到る。乃ち進みて島郡に屯み、船舶を聚めて、軍糧を運ぶ。六月丁未朔己酉、大伴連嚙、坂本臣糠手、共に百濟より至る。是の時、來目皇子臥病みて、征討を果さず。

とあるものである。來目皇子は聖德太子の同母弟である。「大伴連嚙、坂本臣糠手、共に百濟より至る」とあるのは、「九年三月甲申朔戊子、大伴連嚙を高麗に遣し、坂本臣糠手を百濟に遣して、詔して曰く、急に任那を救へ」とあるのを受けているのである。十一年春二月癸酉朔丙子、來目皇子薨す。仍りて馭使して奏上す。爰に天皇聞しめして大に驚きたまひ、則ち皇太子と蘇我大臣とを召して詔して曰く、征新羅大將軍來目皇子薨す。其れ大事に臨みて遂げず、甚だ悲しきかな、仍て周防の娑婆に殯す。∴後に河内の埴生山の岡の上に葬る。とある。そこで

(十一年)夏四月壬申朔、更に來目皇子の兄當麻皇子を以て征新羅將軍と為す。秋七月辛丑朔癸卯、當麻皇子難波より発船す。丙午、當麻皇子播磨に到る。秋

時に従へる妻舍人姫王、明石に薨す。仍りて赤石の檜笠岡の上に葬りぬ。乃ち当麻皇子返りて征討ず。

と云うことになつたという。このあと聖徳太子の生存中は新羅征討のことはない。さて、妻が亡くなつたからとて征討を中止する、というのもわからないが、不慮の事態が一度ならず重ねて出来しているのは不思議というほかはない。それは、大伴連嚙と坂本臣糠手が共に百済から帰国したこととかかわりのあることかと察せられる。この二人が任地に赴いて何をしたのか、それは全然記されていない。為すべきことはしないで、為すべからざることをしたのかもしれない。それはともあれ、来目皇子の死といい、当麻皇子の妻の死といい、偶然のことではなさそうである。何人かの手によって一服盛られたのではないか。

これよりおよそ二十年さかのぼる。敏達天皇は任那復興を策し、その相談相手に火草北国造阿利斯登の子達率日羅というのが百済にあるのを呼び寄せようとせられた。それで十二年秋、紀国造押勝と吉備海部直羽島を遣わしたが、百済国王は日羅を惜しんで聴許しない。そこでその歳のうちに、また羽島を遣わした。羽島はいきなり日羅の家の門



橋寺・日羅上人像

を訪ねた。しばらくあって、家のうちから韓婦からのめが出て来て、韓語で「汝が根を用もて：我が根の内に入れよ」と云って家のなかに引込込んだ。羽島はその意を覚しって（魚心あれば水心といふことか）女のあとについて内に入った。すると日羅が出迎え、手を把とって座につかしま、ひそかに

言うのには「百済国王は、一旦自分を日本に帰したら再び戻してはくれまいと思つて自分を引き止めているのである。だから天朝の勅を伝える時には血相を変えて迫り有無を言わさず自分呼び出すようにせよ」と云うのだった。この手を使って日羅を連れもどすことに成功した。日羅に従つて来たのは、恩率おんそつ、徳爾とくに、余怒よの、哥奴知かぬち、参官さんくわん、柁師かちし、徳率次干徳とくそちしかんとく、水手等若干の人であつた。さて日羅一行は吉備児島屯倉こじまのみやけに到着した。朝廷では大伴糠手おなて子連このむらじを遣わしてその労をねぎらつた。また大夫等を難波の館にやつて日羅

を訪わしめた。この時日羅は甲を着、馬に乗って門みかどのもとに到り、庁前に進み、悲痛な声で「檜隈宮御寓天皇（宣化天皇）の世に、我が君、大伴金村の大連おほむらじ、みかどのおほんために海表わたのほかに使はし、火葦北国造鞆部阿利斯登の子、臣達率日羅、天皇の召したまふとうけたまはり、かしこみてまひけり」と。そこでその甲を解いて天皇に奉った。そこで阿斗桑市あとのくはいちに館を営んで日羅を居らしめ、何不自由ないように待遇した。そして阿部目臣めのおみ、物部贄子連たへこ、大伴糠手子連を遣わして、国政の要を問わしめた。彼の対えて云うには、「まず第一に人民を護養すること、むやみに兵を興すのはかえって滅亡のもと。上は臣連二造より下は百姓に及ぶまで、皆富み榮えて乏しきことなからしめよ。かくすること三年にして、食足り兵（武器）足り、悦びを以て民を使うならば、水火をも憚らず、たれしも同じように国のわざわいをうれえるであります。然る後に多く船船を造って津ごとに列ね異邦の客人に觀せしめ、恐懼の念を生ぜしめよ。しかしてよき使を以て百済に使せしめ、その国主を召されよ。もし彼が来ないならば、その太佐平王子等を召されよ。来たならば自然に心つゝしみ帰伏の心を生ずるであります。その後を罪を問いたまえ」と。また奏して云うには、百済人が謀って「我に船三百有り、筑紫を

貰もらいうけたい」と云うかもしれぬ。実際に申し出てきたら、いつわって与たまえたまえ。すると彼はあらたに国を造ろうとして、必ずまず女子小子をわが国に送りつけるであらう。その時に、老岐・対馬に多く伏兵を置いて、その至るをうかゞって殺したまえ。かえってあざむかれませぬように。要害の所に堅く壘塞を築いて防備したまえ」と。さて日羅について来た恩率、参官が帰国する時に臨んでひそかに徳爾等に云うには「自分らが筑紫を通過する時分を計って、汝等ひそかに日羅を殺せ。さすれば王に申して取立ててやろうし、一身及び妻子、末永く栄えしめよう」と。徳爾、余怒はこれを引きうけた。参官等は血鹿ちかを船出する。日羅は桑市村から難波の館に還る。徳爾等は日夜手ぐすねひいて日羅を殺そうとするが、日羅の身がほのほのごとく光るので、これに恐れて殺すことができない。しかし遂に十二月つごもりに光の失せたのを見すまして殺してしまった。ところが日羅はさらに蘇生して、「自分を殺したのは自分の召使いどものしわざである、新羅人ではない」と言いおわって息がたえた。そのころ新羅の使が来合わせていたので、斯く云ったのだという。徳爾等をとらえて究明すると、恩率、参官の指金によるもので、部下として従わざるをえなかつた旨白むね状した。彼等の身柄は弥売み島葦北君等が貰もらい受け

て皆殺してしまった。日羅のなきがらは葦北に移して葬った。

日羅の進言は、要するによく内を固め戦わずして相手を屈服せしめる方途を提示し、みだりに兵を動かすことの無意味をさとしたもので、まことに時宜に合ったものであった。彼の父は宣化天皇の世に百済に渡った、とあるから、幼少の日羅が父につれられて彼地に往つたとすれば、百済に在ること四十余年である。

とすれば、百済の内情も、また彼我の折衝の経緯も知悉していたであろう。その彼の進言は千金の重みがある筈であるがその後それがいかに生かされたかは明らかではない。また、彼の身体から光を放った、ということとは理解しかねるが、眼光炯々、英気あたりをはらうものあって心やましきものは、まともに目を向けられなかった、ということはあつたであろう。その殺されたのが十二月つごもり、というのは心にしみる。天地暗く、歳まさに逝かんとする日、彼は凶刃に仆れたのであつた。

このあと推古朝までの間の朝鮮征討の記事は次のとおりである。

(敏達)十三年春二月、難波吉士木蓮子を遣して新羅に使せしむ。遂に任那に之く。

同十四年三月：天皇、任那を建てむことを思ひて、坂田耳子王を差して使と為す。

この時に属りて、天皇と大連（物部弓削守屋）と、にはかに瘡患む。故れ遣すを果さず。橘豊日皇子（用明天皇）に詔して曰く、考天皇（欽明天皇）の勅に背くべからず。任那の政を勤め修むべし。

（崇峻）四年秋八月、天皇群臣に詔して曰く、朕れ任那を建てむと思欲ふ。卿等如何と。群臣奏して言く、任那の官家を建つべきこと、皆陛下の詔したまふ所に同じ。冬十一月己卯朔壬午、紀男麻呂宿称、巨勢臣比良夫、狭臣、大友嚙連、葛城烏奈良臣を差して大將軍と為し、氏々の臣連を領めて、裨將部隊と為し、二万余の軍を領めて、出でて筑紫に居らしめ、吉士磐金を新羅に遣し、吉士木蓮子を任那に遣して任那の事を問はしむ。

（推古）八年二月、新羅と任那と相攻む、天皇任那を救はむと欲して境部臣に命じて大將軍と為し、穗積臣を以て副將軍と為す。則ち万余の衆を將めて、任那の為めに新羅を撃つ。——新羅はたちまち降伏した。しかし將軍等が還ると、すぐまた任那を侵すのであった。

推古期における新羅征討の企てについてはすでに述べた。ところで聖徳太子の薨去し

たあと、再び新羅征討の議がもちあがつた。すなわち推古三十一年秋、新羅、任那を伐ち任那、新羅に付く。こゝに於て、天皇は大臣馬子をはじめ群臣に新羅征討のことを謀つた。これについて田中臣と中臣連国との間で議論が分かれた。田中臣は即時征討に反対で、まず使を遣して先方の実情をたしかめてからでも遅くはない、と云う。中臣連は、すみやかに新羅を征伐して任那を取り、百済に付けるならば、むしろ新羅を手中に収めるに役立つであろう、と主張する。これを反駁して田中臣は云う、いやそうではない。百済は反覆多い国で、道路の間も尚詐る。(わかりかねるが、使が来てそのまだ帰りつかぬうちにすでに違約する、ということか。)凡そ彼の請う所皆非である。百済に附けるべきではない、と。衆議まぢまぢであったため、征討は中止して、吉士磬金を新羅に遣し、吉士倉下を任那に遣して、任那のことを問わしめた。新羅国主は、八太夫を遣わして新羅国の事を磬国に告げ、且つ任那国の事を倉下に告げた。そして約束して云うのには、任那は小国なれども天皇の附庸である。どうして新羅が勝手に領有してよいものか、従前通り内宮家を定めたならば、煩いはないであろう。これがわが願うところである、と。そして奈未智洗遲を遣して磬金に副え、また任那人達率奈未遲を倉下に副え、

両国の調を貢進した。ところが磐金等がまだ還らないうちに、数万の軍衆が新羅征討に向かった。磐金等は船発しようとして天候をうかゞっていたところであった。そこに船師海に満ちて押寄せて来たのである。両国の使人はこれをみて胆をつぶし、引きかえしてしまった。そして堪遅大舎を代理として任那の調使とした。磐金等語り合つて云うには「この軍を起すことは話が違ふ。これでは任那の事は成功すまい」と。冬十一月磐金、倉下等が帰国した。馬子は先方の様子を問うた。彼等は事の次第を対えた。それをきいて、大臣曰く、「悔しきかな早く師を遣しつることを」と。これについて時の人は、「この軍の事、境部臣、阿曇連、先に多に新羅のまいないを得たので、その味が忘れられず大臣に勧めて、使の旨を待たないで急いで押しかけたのだ」とうわさした。境部臣雄麻呂は中臣連国と共にこの征討軍の大將軍であつたのである。「先に多に新羅のまいないを得た」とあるのは、推古八年二月の征討のことを云うのである。

話をはじめに戻す。推古朝において皇子を新羅征討の將軍にしたのは、ほかのものには任せられぬ事情に促されたにちがいない。戦うも和するも、はつきり筋を通したものでなければならぬ。国の大事を私の利害で左右することはもはや許されぬ。これはおそ

らく聖徳太子の意図に出たものであろう。太子はわが身代りとして弟皇子を立てた。しかしそれは空しく終わった。自分たちの闇取引きがあばかれるのを惧れたものの手が廻ったものと察せられる。敵は外にあるよりも内にある。太子は、朝鮮出兵のことはきっぱり断念して、意を内政に、とくに国民教化に向けられた。それは日羅の遺言を生かしたものといわねばならない。日羅はもっぱら百済対策について進言した。ところが今まで見てきたところでは百済のことは表面には出ていない。彼は日新を戦わしめて漁夫の利を占めることをもくろんでいたのかもしれない。裏には裏があり、仕掛けは複雑である。新羅だけが相手ではない。歴朝さんさん手を焼いた朝鮮をさしおいて、太子は一転して隋唐との国交を開らいて、その文物を取り入れ、国力の質的充実に資せしめたのであった。

崇峻天皇の四年夏四月、おきだ詔語田天皇（敏達）を磯長しながの陵にをさめまつる。これ其の妣いろうはの皇后（欽明天皇皇后・石姫）の葬られたまひし陵なり。とある。太子の父帝用明天皇の御陵は磐余池いはれ上陵とあるが、推古元年秋九月、河内の磯長陵に改めをさめまつる、とある。太子の陵は磯長にあることはいうまでもない。用明天皇は敏達天皇の異母弟であ

り、敏達天皇の皇后（推古天皇）は同母妹であられる。用明天皇の御陵を磯長に移したのは、推古天皇及び聖徳太子のはからいであろうか。それは敏達天皇への敬慕の念のしからしめたものかもしれない。とすれば敏達天皇がとくに重んじられた日羅のことが太子の念頭につよく刻銘されていなかったとは思われぬ。——推古天皇が太子のためにお建てになったと言われる橋寺に日羅像というのがある。弘仁期の製作にかかる名作であって、実は地藏菩薩像である、ということである。しかし、それが日羅像であると伝承されて、太子にゆかりの深い橋寺に伝えられたことは、意味あることに思われる。

（『国民同胞』四一年五月）

## 馬子の問題

聖徳太子に対する不信の最大の理由は崇峻天皇弑逆（しぎやく）の元兇・蘇我馬子（そがのうまこ）（六二六）を太子が見遁しただけでなく、重く用いてかわらなかつた、と云うことにある。そしてこの不信の理由をくつがえすに足る正当の弁明を、今日までぼくはきいていない。しかしこの弁

明はきわめて簡単であると云うことに、ちかごろぼくは気づいた。

それは、天皇暗殺の元兇が馬子であることをすっぱぬいたのは「日本書紀」であつて、太子のよく御存知ないことだったのではないか、と云うことである。暗殺の下手人東漢直やのあたひのこま駒を己が手にかけて殺したのは、彼を手先に使つた馬子自身である。むろん書紀は、馬子が天皇弑逆の罪を責めて駒を殺した、とは云っていない。しかし「真相」を知らなければ死人に口なしで、犯人をわが手で断罪した、と云う錦のみ旗は馬子のものになるわけである。これが「事実」として通用していたのではないか。書紀の記事はこの「事実」を「真相」の形に引き直して、書いたものにはかなるまい。書紀は云う――

是の日、東漢直駒、蘇我そがのみめ嬪かほかみの河上いづつめ娘を偷ぬすみ隠して妻と為す。(河上嬪は蘇我宿弥すくねの女なり)馬子宿弥、爰こゝに河上娘が駒の為に偷ぬすまれたるを知らずして、死にきと謂おもへり。駒の嬪むすめを奸むかせる事頭はれて、大臣の為に殺されぬ。

嬪むすめというのは妃とか夫人とかいうのとかわりはあるまい。河上娘は崇峻天皇の嬪であつたと思われる。だから「奸むかす」と云われているのであろう。「死にきと謂おもへり」とはどういうことか。わが女むすめが行方知れずになつたので、入水したかどうしたか、とにかく

天皇の御後を追うて死んだものと思つていた、と云うことであらうか。ところが、実は駒がこっそりかこつていた。すなわちこれを奸したことがばれて馬子に殺された、と云う。腑に落ちぬことである。もしも河上娘を駒がわがものにしたと云うならば、それは盗んだのではなくして、馬子が取引きの具に供したのにほかなるまい。こゝで大事なことは馬子がわが手で駒を殺した、ということだけで、殺す口実は何であつてもよいのである。これによつて、彼は、おのれの罪を隠しおおせると云う以上に犯人処断の美名をわが上に冠らせることができた、と考えられる。

後年、中大兄皇子のグループのために蘇我入鹿いづかがやられたとき、その父エミシを援けて抗戦を企てたのは漢直等であつた。これで見ると、漢直一族は依然として蘇我氏に忠勤をはげんでいたらしい。もし、馬子が駒を使って自己の野望を遂げておきながら、口実を設けてその駒をわが手にかけた、と云うことがわかつていたならば、これはちよつと受けとりにくいことである。大罪を犯せるものゆえ、泣いてこれを斬つた。しかし一族に累は及ぼさぬ、とか云うことで、かえつて恩を売つたのかもしれない。これはほくの言い過ぎ、考え不足であらうか。

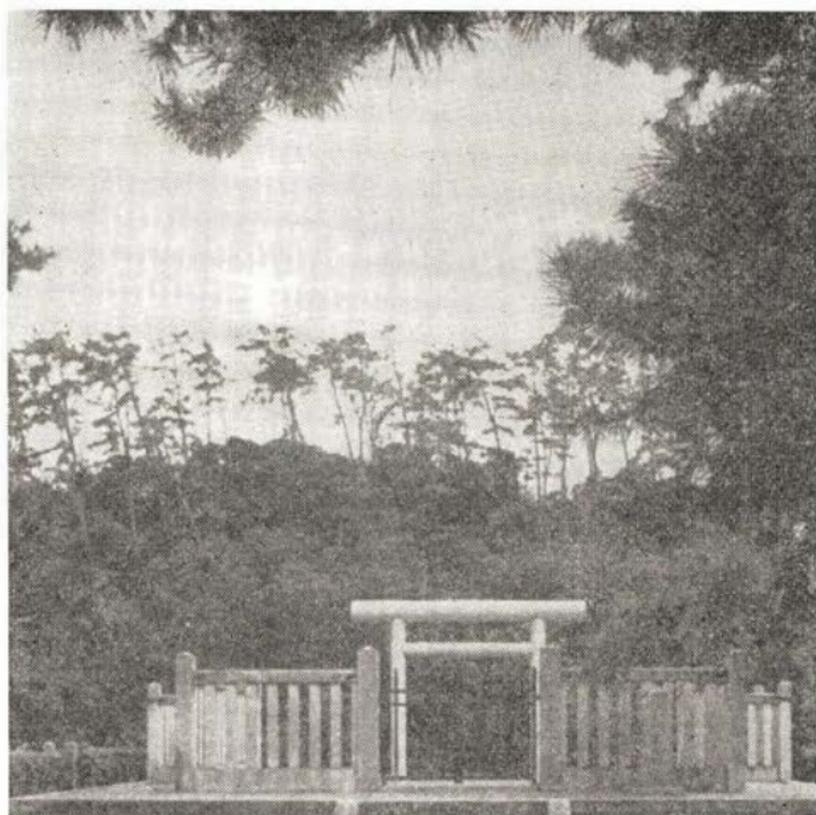
一方において——馬子はわが罪の重大性をさして意識していなかったのではないか、また馬子にかぎらず一般に、いわゆる「大逆」の觀念は乏しかったのではないか。この点を考慮しないで太子を責めるのは見当ちがいであろう。——このような考えもあるかもしれない。しかしこれはまちがいである。そうであるならば帰化人の駒を使って暗殺せしめるという手段は執らなかつたであろうし、その駒を殺すこともなかつたであろう。そんなまねはしないで、あからさまに天皇に立ち向かつたにちがいない。この事件のすぐ前に、彼は、物部守屋ものべのもりやと好かつた穴穗部皇子あなほべのみこを攻め殺している。その時には「炊屋姫尊かしきやひめのみことを奉めて」、その名の下に兵を起こして皇子を攻めさせた。用明天皇崩御のあとは皇后の炊屋姫尊が最高權威であつた。その權威の下に事を成したのである。しかしいまの場合には天皇以上の權威は存在しないのであるから天皇弑逆の正当性を保障するものはどこにも求められない。そのことをよく知っていたればこそ、彼は隱密の手段を用いて事を成し、しかもその秘密の洩れるのを惧れて駒の口を永久にとざしたのであつた。また事件の直後、駅使を筑紫の將軍に遣して、「内乱に依りて、外事を怠るなかれ」と戒められているのも、この事件の重大性を裏書きするものである。

以上、馬子のことで太子に不信を向けることのいわれなき旨をあきらかにした、しかし少くとも太子もまた他の人々とともに馬子にあざむかれた、ということはまぬがれないか。いや、太子はあざむかれなかったかも知れない。しかし馬子のなせるわざ、というたしかな証拠は何もない。してみればあざむかれなかったとしても、知らぬ顔をしてゐるよりほかないわけである。馬子は太子の在世中は借りてきた猫のようにおとなしかった。あるいは、猫をかぶっていたと云ってもよい。その様子が書紀に見てとれる。それは太子の馬子をごらんになる目が、また馬子が太子を見る目がどのようなものであったかを暗示している。

(四一、九月八日記)

## 白鳥の記

ぼくはこれまでヤマトタケルノミコトを日本の英雄、例えは源義経<sup>みなものよしつね</sup>、楠正成、西郷隆盛などのプロトタイプとだけ考えていた。ところが最近ヤマトタケル伝は聖徳太子伝のいわば種根(いい言葉が出て来ない)ではないか、と思いついた。そのきっかけは書紀



白鳥陵(河内・古市)

の次の記事である。

(日本武尊) 既にして能褒野のぼのに崩かくれます。時に年卅。……よりて伊勢国の能褒野陵かに葬かしまつる。時に日本武尊、白鳥なに化なりて陵より出でて、倭やまとの国を指して飛ぶ。群臣等因りて以てそのひつぎを開きて視れば、明衣みそ空しく留まりて屍骨みかばねなし。ここに使者を遣して白鳥を追ひ尋ぬれば、すなはち倭ことひきの琴弾原ことひきに停まれり。

よりてその処に陵を造る。白鳥また飛びて河内かはちに至りて旧市邑ふるいちのむらに留まる。またその処に陵を作る。かれ時の人、この三陵を名づけて白鳥陵といふ。しかれども遂に高く翔かりて天に上りき。いたづらに衣冠を葬しまつる。因りて功名みなを録つたへむと欲してすなはち武部たけもべを定む。――

とある。ここに「明衣空しく留まりて屍骨なし」とあるのは、太子にかかわる片岡山の飢人の記事を思いあわせせる。こちらには――

使者還り来て曰く、墓所に到りて視れば、封埋動かず。すなはち開けて屍骨を見れば、既に空しくなりたり。ただ衣物畳みてひつぎの上に置けり。

とあるのである。この二つの記事は酷似してはいないか。むろんヤマトタケル伝と聖徳太子伝とは異質の世界である。にもかかわらずそこに自然呼応するものがある。

ちょうどハニワと推古仏とは異質でありながら、ハニワの高貴と清醇とが推古仏に生かされているのに似ている。「わがこゝろ、恒は虚まより翔かり行かむと思ひつるに、いま吾が足え歩まず」（古事記）という痛恨は白鳥となって虚空を翔かけざるをえなかった。この虚空飛翔の精神は、低俗の現実を超える空観となって片岡山伝説にもいきづいている

かと思われる。

それだけではない。オトタチバナヒメのヤマトタケルノミコトへの献身は、ホキキミノイラツメの太子への献身となつて、真実なるもの實在のしるしとなつた。イラツメは、み病の床に臥した太子を看とりつつ、心労のあまり、太子に先立って亡くなつたのである。思いつめた愛恋の典型がここにある。それは、わが民族のいのちである。ミコトの薨逝こうせいを知らされた后たちきさき、み子たちは馳けつけた。そして今は白鳥と化したミコトのあとを、よろめきながら追いつづけた。それは太子の場合に国中の人々をとらえた深い悲しみを、后たち、み子たちにしぼってあらわしていると思われる。

太子の陵は河内の磯長しながにある。ちょうどヤマトタケルノミコトの白鳥陵の所在地である。書紀は旧市邑と云っているが、古事記には志幾しきとある。広く云えば志幾、狭く云えば旧市で、別々のところではないであろう、と宣長は云っている。太子の父帝用明天皇の陵もここにあるし、天皇の異母兄敏達天皇の、またその母后の陵もここにある。欽明天皇の崩ぜられたあと、なぜか旧市でモガリモガリされている。(モガリとは葬儀のことであろうか。)そして任那みまなを亡ぼして天皇を痛憤させた新羅しらぎは弔問使をこの地に差遣して

る。安閑天皇の陵もこの旧市にある。一々は記さないが、記さぬわけにはいかないのは、ミコトのみ子である仲哀天皇の陵が、河内の惠賀めぐがの長江にあることであり、さらに天皇のみ子応神天皇の陵が、河内の惠賀めぐがの裳伏ももふしにあることである。いうまでもなく仲哀天皇のあと歴代はヤマトタケルノミコトの血脈であり、太子もまたそれから外れるものではない。してみれば太子とミコトとの間は遠いようで実は近いのである。ミコトはおそらく太子のお心のなかに力づくよく生きていたのではなからうか。

「聖徳太子」の呼称は推古紀にはない、太子の薨去こうきょを異国に在ってきいて悲しんで云ったことばの中に「日本の国に聖人まします。上宮豊聰皇子とよとみみと曰す。まことに天にゆるされたり。玄聖の徳を以て、日本の国に生あれませり。」とある。この「玄聖の徳」とあるのが「聖徳太子」という呼称のもとになっているのであろうか。いずれにせよ、この呼称は、ひとりの人間の私的呼称を超えた、普遍的人格の呼称にほかならない。それは、イエスキリストとかシヤカムニとかいうのと同じである。ヤマトタケルの呼称がそれである。それはクマソタケルが猷ゆったみ名である。そのことの意味するところを、太子の呼称とあわせて注意しなければならぬ。

薬 獵 の 記

推古紀（日本書紀）に見える薬獵の記事を摘記する。――

十九年夏五月五日、兎田野うだのに薬獵くすりがりす。鶏鳴時あかつきを取りて、藤原池のほとりに集り、会明あけぼのをもつて乃ち往く。栗田細目臣あはたのほめのおみを前部領さきのことりと為し、額田部比羅夫連ぬかたべのひらぶのむすじを後部領しりのと為す。この日、諸臣の服色、皆冠の色のままなり、各々髻華うすを著させり。すなはち大徳・小徳は並びに金を用ゐ、大仁・小仁は豹なかつかみの尾を用ゐ、大礼より以下は鳥の尾を用う。

廿年夏五月五日、薬獵す。羽田はたに集りて、相連つぎて朝に参趣まゐる。その装束、兎田の獵の如し。

廿二年夏五月五日、薬獵す。

薬獵が五月五日に行われたわけは、この日に菖蒲しょうぶ（あるいは蓬）を軒ふに葺ふいて厄病除よけにする風習を考え合わせれば、いくぶんは首肯せられよう。この記事で目を惹くのは、

これに参加した諸臣がウズをさすことである。推古紀でウズを著用する記事は、このほかに二つある。一つは、十一年十二月に冠位十二階が施行せられ、それに伴って服飾が制定せられたが、元日にはウズをさす、ときめられたことである。もう一つは、十六年秋八月に唐の使客を迎えた日に、皇子・諸臣、悉く金のウズをもって著頭かさしにした、とあることである。ウズをつけることがきわめて重大な意義を担っていたことが察せられる。ヤマトタケルノミコトのお歌として伝えられる歌に

いのちの全またけむ人はたたみこも平群へぐりの山のくまかしが葉を　うぶずにさせ　その子

とある。「うぶずにさせ」とは、「うぶずとしてさせ」と云うことである。それは、いのちの全きこと、すなわち、まめで、すこやかであることを祝福するしるしであらう。正月元日あるいは薬獵の日にウズをさすことの意義はそれでわかるような気がする。遠来の使客を迎える日にウズをつけるのも、その長途の平安を祝福するためのものではないか。クマカシの葉が、それとは異質の、金その他にかわっても、そのあらわす意義にかわりはあるまい。

さて、この薬獵というのは、薬草を採集することだとも、薬用の、鹿の袋角を取るた

めだとも云われる。そのいずれにせよ、それは、多少の実益を兼ねた、野遊・遊山の類であるとは思われない。それは、聖徳太子の創建にかかる四天王寺に、施薬・療病・悲田・敬田の四院が設置されたことと切りはなせない、重大な意義をもった行事であると考えられる。有名な鑑真和尚(六八八七六三)は、「経の文を正さしむれば、口に誦して多く直す。薬の名を問へば、鼻にかぎてみな弁わきまふ」(三宝絵詞さんぼうゑじ)による。)と云われている。聖徳太子が師とせる高麗の惠慈えじ、また惠慈と前後してやってきた百済の慧聰えそうについて、推古紀は、「この兩僧は仏教を弘演ひろひらめて並びに三宝の棟梁とうりやうたり」と云っているだけだが、やはり医薬の心得もあつたのではなからうか。

慧聰えそうの名は、法華經寿量品に「譬へば良医の智慧聰達ちやうたつにして、明らかに方薬に練し衆病を治す云々」とあるのを思わしめる。惠慈の弟子と思われるものの中には唐に往つて医学を勉強したものがあつた。太子の薨去した翌年の三十一年七月に來朝した新羅の使節といつしよに大唐留學生の惠齊ゑし・惠光ゑくわう及び藥惠日やくゑにち・福因等が帰国した。太子の薨逝を伝え聞いて、いそぎ帰国したと思われる。ところでこの四人のうち三人に惠の字が付いている。それで彼等は惠慈の弟子であらう、と、ぼくはかんぐるのである。この四人の

中の、葉福因は、十六年九月に唐に遣わされた留学生八人の中に見出される。してみると、彼は、まる十五年間在唐したことになる。また、その八人の中に、恵の字の付く、恵明・恵隱というのがある。これらも恵慈の弟子であろう。いずれも太子の配慮によって、えらばれて遠く唐に留学したにちがいない。

葉胤という語は推古紀以外に日本書記に見出されない。しかし、それはひきつづき行なわれたらしい。天智紀の七年五月五日の条に、「天皇、蒲生野に縦胤したまふ。云々」とある。このときは万葉集に出ていく知られている。

天皇の蒲生野に遊胤したまへる時額田王の作れる歌

あかねさす紫野行き標野行き野守は見ずや君が袖振る

皇太子（大海人皇子、後の天武天皇）、答へませる御歌

むらさきのはへる妹を憎くあらば人妻ゆゑにわれ恋ひめやも

とあって、そのあとに「紀に曰く」として、前記の天智紀の記事が附記されている。

縦胤と云い、遊胤と云っても、それは葉胤とかわりのないことかもしれない。しかし、そこには本来の意義よりも遊楽気分のほうが、よけいに感じられる。それは葉胤だけの

ことではない。一般的に、自他の身の「くすり」になるものを求める意気込みが薄れつつあったのではないか。法隆寺が炎上したのは天智天皇の九年四月のことであった。

(四三・三・二〇春分の日に)

### 追記

去る四月三日、佐賀のS大兄のお供をして、聖徳太子の御廟(河内・磯長)に詣でた。紙面の都合を慮って、くわしいことは云わないが、その途々、「黒上先生の、磯長参拝の長詩をよんだ覚えがある。それが、いつ、どこであったかは忘れたが、その一部はそらんじている。」とぼくが云ったら、S大兄は、「その長詩をぼくは持っている。ぼくのところで見たのではないか。」と云われた。帰宅して間もなく、S大兄から、黒上先生の「磯長参籠」の詩を書き送ってきた。そして、それが、大正九年、先生廿一才のときのものであることを知っておどろいたのである。

(四十三年四月十八日記)

### 磯長参籠

黒上正一郎

一

御墓山の茂木がもと



磯長陵正面

御廟のまへに虫なきしきる

しづかなる夜半なりき

おほまへの砂地にぬかづきまつり

念ひまつる太子のみ言こと

恋慕渴仰つきざる思ひの

わが胸ぬちにみちわたりしか

二

陵みはかのおほまへに燈ひをともし

憲章を誦しまつり夜は更よけぬ

久遠劫くおんごうよりこの世まで

あはれみましますおほみめぐみよ

念ひまつる我等がこころは

和国の教主聖徳王と

その一語にきはめしめらるるか



石界結廟御

三

海の彼の本に非らずとのたまひし  
祖国憶念と

共に是れ凡夫とおほせられし

内的平等感と

それを統<sup>す</sup>べしむる帰命三宝の原理を

示したまひし十七憲章の和の

また片岡山のみうたの

悲痛なることばのリズムよ

いま胸のうちに生きしめらるる

四

その夜ひろげし憲章のすりぶみは

君がたまひしそれなりしか

そのみこころにつらなりまつる

そはまた通ふ、古への名もなき民の

「日月は輝きを失ひて天地既に崩れぬべし、今より以後誰を待まんや」とふ

悲痛なる言霊よ

ああ、その不思議の開展よ

(大正九年九月作)

## 駱駝らくだと葡萄

「シルクロードの終着点・正倉院」と云った学者がある。そう云うのは、正倉院御物の中に、西域せいいき(主としてササン朝ペルシヤ)の直接間接の影響下にできたと思われる遺品がかなり多く見出されるからである。しかし、その前に「シルクロードの終着点・聖徳太子」と云えないであろうか。推古紀(聖徳太子摂政)の七年夏四月の記事に、百済が、駱駝一匹、羊二頭などをたてまつつたとある。また同二十六年秋八月の条に、高麗が、駱駝一匹その他をたてまつつたとある。これらの駱駝はシルクロードを跋涉してきたものにちがいない。聖徳太子摂政時代は、シナは、云うまでもなく、隋王朝である。

H・G・ウエルズは「漢王朝はその国境を北方に拡大したが、隋・唐王朝は、その文明を南に拡げ、中央アジアのはるかかなたにまで達し、ついには、従属したトルコ諸部族を通じて、ベルシャ・カスピ海にまで及んだ。」と云っている。そして一方、ササン朝ペルシャが六四二年にサラセンのために大敗して滅亡したことは別稿に記したが、聖徳太子の時代にはその勢威大いに振り、最盛期のダリウス一世（紀元前四八五年歿）の旧領にほど復した、と云われる。それだけに、その文化的影響力は——ダリウス一世に代表される古代ペルシャの栄光の記憶とともに——強大であった。そのことが、我国にまでその光をとどめさせたのである。

いま、「わが国にまで」と云ったが、それは水が低きに就く、という如き自然現象ではないのであるから、実はわが国の文化的吸引力によってひきよせられた、というべきであろう。云いかえれば駱駝は、聖徳太子の切なる招きに応じてはるばるやって来たこと云ってよい。太子に代表せられる日本の文化的吸引力が西域からひき寄せたのは駱駝だけではない。

法隆寺五重塔心礎の中に舍利容器と共に発見された（大正十五年）海獣葡萄鏡という

のがある。同種のもは正倉院その他にも伝えられている。葡萄はカスピ海沿岸・ベルシヤあたりが原産地でありこの葡萄唐草文様のオリジンはペルシヤにある。西域はここにも引きよせられていたのである。

古事記に——イザナギノミコトは追跡してくるヨモツシコメに、黒御鬘カヅラを取って投げつけると、すなわち蒲子を生じたとある。この「蒲子」はエビカヅラと訓よまれている。子は種子ということである。中国で、葡萄は、古くは、蒲桃・蒲陶と書かれた、という古事記々者はそれを知っていたのである。さもなければ、蒲はガマであつて、蒲子をエビカヅラとはよめない。

駱駝は聖徳太子がごらんになって以来、明治に至るまでの間、日本人はだれも見たものはない。また葡萄唐草文様を、太子もしくは太子に程遠からぬころの日本人は知っていた。近世になって西本願寺の、伏見城の遺構と云われる建物などの欄間に彫刻されている葡萄唐草文様や、キリシタンのもたらしした葡萄酒などが、エキゾチシズムとしてよろこばれたことを思えば聖徳太子の時代の文化的吸引力の偉大さは、ぼくの想像を絶するのである。

## 法王帝説の挽歌

上宮聖徳法王帝説に、聖徳太子の薨去せられたとき、巨勢三杖の詠んだ挽歌三首が伝えられてゐる。万葉仮名をひらがなにかへて左記する。――

いかるがの とみのをがはの たえばこそ わがおほきみの みなわすらえめ  
 みかみをす たばさみやまの あぢかけに ひとのまをしし わがおほきみはも  
 いかるがの このかきやまの さかる木の そらなることを きみにまをさな

第一首はよくわかるので問題はないが、あと二首は難解である。ぼくは今まで、この歌を前にして首をひねったこと、何回あるか知れないが、たしかな手がかりのないまま何も云へないのがいかにもくやしかった。それで、いま、ぼくの理解するだけのことを書きとめて、自他の再考の資としたいのである。

第二首は「あぢかけ」（阿遲加氣）が問題である。万葉集には「あぢ」は鴨の一種あ

ち鴨としてのみ出てくる。それでは「あぢかけ」といふのはわからない。万葉集（巻十二）に「山川の水陰みづかげに生ふる山草やまぐさの云々」とあって、水辺の片陰といふことを水陰みづかげと云つてゐる。それで「あぢかけ」を、あぢ鴨のすだく山陰、と考へてもみたのだが、それでは落ちつかぬ。ところで、大安寺資財帳（天平十九年）は、太子薨逝のところを「飽波なみの芦垣宮あしがき」としてゐる。それは斑鳩宮いかるがのすぐそばにあった別宮であらう。「あしがぎ」と「あぢかけ」とはよく似てゐるから、そのどちらが正しいかは別にして、このことを同一のものとして解することもできるであらう。いづれにしても、ぼくはこの歌を、太子の殯あらしの宮の時の歌で、「人の申しし」は、「人々が誅（しのびごと）を申しした」と取りたいのである。

第三首は第二首よりもわかりよい。問題は「さかる木」であるが、それは「離さかる木」であらう。親木が倒れて、それに寄生してゐた木が、寄るべを失って宙ぶらりんになつてゐる状態を、たのみきつてゐた太子を失ひたてまつつて心空こころなることを云ひあらはすための序としてゐるのである。万葉集（巻十一）の

この山の嶺たかねに近しとわが見つる月の空そらなる恋こひもするかも

の歌が参考になる。

自信はないが、このたいせつな歌に、ぼくなり解釈を加へえたことは、ぼくのささやかなよろこびである。

(四七・一二・二四)

## 吾妻はや

東国における倭建命伝説やまとたけるのみことと命を祀る社祠みことは実にたくさん存在してゐるらしい。ぼくが直接知つてゐるだけでもかなりの数にのぼる。伝説のほうは別にして、社祠は、明治の王政復古の日になってはじめてつくられたのではないか、とも思つてゐたのだが、実はさうではなかった。ぼくは昨年中、後藤積兄にみちびかれて浦賀うらがの走水神社はしりみづ、木更津きさらづの吾妻神社にのみや、二宮の吾妻神社ふたのみや、厚木の吾妻神社あつぎに参つたが、そこで、それらのみ社がすべて明治以前に存在してゐたといふたしかな証拠を見た。その中で一番古いものは、二宮の吾妻神社の一对の石燈籠で、正徳四甲午年（一七一四）と刻まれてあつた。そこには吾妻大権現御宝前ごほうぜんともあつて、神仏混交の名ごりをとどめてゐた。そのことは、それら

のみ社が遠い往昔このかた存在してきたことを示すものである。倭建命は東国の人々の間に、久しく生きつづけてきたのである。

さて古事記を引用する。――

それより入幸いりいでまして、走水の海を渡ります時に、その渡りの神、浪を興たてて、み船廻たゆたひて得進えみ渡りまさず。ここにその後きさき、み名は弟橘比売命おとひめのみことをしたまはく、「妾御子あれに易かはりて海中うみに入りなむ。御子は遣まけの政遂まつりごとげて覆奏かへりこたましたまふべし」とまをして、海に入りまさむとする時に、菅豊八重、皮豊八重、純豊八重を波の上に敷きて、その上に下り坐ましき。ここにその暴浪あら自ら伏なぎて、御船得進みみき。かれ、その後の歌はせるみうた

さねさし さがむのをのに もゆるひの ほなかにたちて とひしきみはも

かれ、七日ありて、その後の御櫛海辺に依よりたりき。すなはちその御櫛ほかを取りて御陵ほかを作り治をさめ置きき。――

ここで古事記の表記のこまかな配慮に気がつく。その見易い例を一つだけ取り出すと、「波」と「浪」とを使ひわけてゐることである。ナミそのものは「波」で、アラナミは「浪」であらわしてゐる。ところで訓み方で一つ気になるのは「御櫛を取りて御陵を作

り治め置きき」といふところである。倭建命が無事に対岸（書紀は上総とする）に渡り着いたあと、後の御櫛みきがその海辺に寄ったといふのであるから、「御櫛を取りて御陵を作り治め置」いたのは倭建命以外にはありえない。してみればこは「治め置きたまひき」と訓むべきである。ところが宣長のりながをはじめとして、そのやうによんでゐる例をぼくは知らない。

万葉集（卷十九）に大伴家持おほとものかもち（七八五）が処女塚をとめを詠んだ長歌がある。二人の男に言ひ寄られて途方にくれた処女が海に身を投じて死んだあと、「奥墓おくづかを、ここと定めて、後の代の、聞き継ぐ人も、いや遠に、しのびにせよと、黄楊小櫛つげせぐし、しか指しけらし、生おひて靡なびけり」といふのである。死んだ処女の形身の黄楊小櫛を奥墓に刺しておいたところ、それが木となって、いま枝を張つてゐるといふのである。この長歌は、しかしながら、「七日ありて後の御櫛海辺に依りたりき」の一句の哀れ深かさには比すべきもない。源氏物語（賢木）の「別れの櫛」といへどもこれほど印象的ではない。「七日ありて」といふのは、後のなきがらの搜索に手を尽くしたがその甲斐なく、七日になつてやうやく、といふことであらう。「七日」といふ日数は、何事かを約束する日限のマキシマムをあ

らはすものらしい。万葉集卷十三の長歌に、「久ひさならば今七日ななばかり、早はやからば今一日いちばかり」とあり、同卷十七にも同様の文句があり、同卷十一には

近江みの海沖みつ白波しろなみ知らずとも妹いもがりといはば七日なな越えなむ

とある。この「御櫛」のことは書紀にはない。また「さねさし」の歌も書紀にはない。書紀は、倭建命が賊のために火でかこまれたのを駿河すまがでのこととしてあり、その縁由でその地を焼津といふ、と云つてゐる。古事記のほうは、この「さねさし」の歌にあるやうに、それを相模でのことにしてゐる。駿河の焼津が一般に知られてゐるので、書紀の伝へのほうに重きが置かれさうだが、相模にも、丹沢山麓に同じ地名がある。

前記したやうに、古事記は倭建命の后を弟橘比売命としてあるが、書紀には弟橘媛ひめとあつて「命みこと」はついてゐない。そして「穂積ほつみのみ臣おみ忍山しのやま宿弥すくねの女むすめなり」とことわつてゐる。

それを信ずれば弟橘は皇族ではない。それなのに記が命みことをつけてゐるのはどういふわけか。皇族でなくても后妃になつた方に命をつけて敬称する例はめづらしくない。一例を出せば、「この天皇てんかう（履中）、葛城かつらぎ之曾都そつひ毘古ひこの子葦田あしだのすくね宿弥すくねの女、名は黒比売命くろひめにあみ娶あひまして云々」とある。今日、民間からえらばれて宮妃になつた方を何々妃殿下と敬称す

るならば今は今に始まったことではないのである。ここにも記のこまかな配慮が見てとれる。この穂積氏といふのは饒速日命の後裔といふことになってゐる。記には「これここに邇芸速日命まゐきて、天つ御子（神武天皇）に白さく、天つ神の御子天降りましぬと聞きつる故に、追ひてまゐくだり来つ、とまをして、すなはち天つ端を献りて仕へまつりき。かれ邇芸速日命、登美毘古（長髓彦）が妹登美毘古にみ娶ひまして生める御子宇麻志麻遲命（こは物部連、穂積臣、采女臣の祖なり）」とある。（紀には「これ物部氏の遠祖なり」とだけある。）穂積は大和の地名であらう。万葉集卷十三の長歌に、「みてぐらを、奈良より出でて、水蓼穂積にいたり云々」とある。紀が弟橘媛を穂積氏忍山宿弥の女とする説は、記の暗示するところでもある。記に、「若帶日子天皇（成務）、近淡海の志賀高穴穂宮に坐して天の下治しめしき。この天皇、穂積氏等の祖建忍山垂根の女名は弟財郎女を娶して生みませる御子和調奴気王」とある。成務天皇は倭建命の異母弟であり、近江の志賀に都せられたことをあはせ考へると、天皇には亡き弟橘比売への配慮があつたかと察せられるのである。なぜか。——倭建命と弟橘比売との間に御子若建王がある。（紀では稚武彦王）若建王の御子須売伊呂大中日子王は近江の柴野入杵の女

柴野比売しばのひめを妃として迦具漏比売命かぐろひめのみことが生まれてゐる。この迦具漏比売を、大帯日子天皇おほたらしひこ（景行）が娶めして、大江王おほえ（大枝王）が生まれてゐる。つまり倭建命の父みかど景行天皇は命の曾孫を妃のひとりにしたわけである。紀によると、天皇は近江に出向いて二年あまり止まり、志賀の穴穂宮で崩ぜられた。近江は迦具漏比売の生国である。成務天皇がこの穴穂宮をそのまま都とせられたことは父みかど景行天皇の遺志をついで、弟橘比売の子孫への配慮のあることを示すものと思はれるし、その妃である建忍山宿祢垂根たからの女財郎女たからと弟橘比売とがきはめて近縁であることを暗示してゐる。

さて、倭建命の御子帶中日子天皇（仲哀）は前記・大江王の女大中津比売命（紀は叔父彦人大兄王ひこびとのおほえの女とする。）を妃として香坂王かこさかのみこ、忍熊王をしまが生まれてゐる。大中津比売は神功皇后に先立って妃になつたのである。香坂王と忍熊王は神功皇后と武内宿弥のためにはろぼされた。香坂王は怒猪いかりあに喰ひ殺されたといふが、裏のあることかもしれぬ。忍熊王は追ひつめられて淡江の海に身を投じたのであつた。景行・成務・仲哀三代の、弟橘比売の子孫への恩顧が神功皇后の猜疑をひきおこしたのであらう。

弟橘比売は倭建命の妃たちの中からえらばれて命みことと征旅をともししたが、走水遭難の

日に、はじめてその姿をあらはしてゐるのである。そのことは、比売は倭建命のためにいのちをささげることによつてのみ、その存在理由を示すことが予定せられてゐたかに思はせる。崇神紀に穂積氏の遠祖大水口宿弥ほか二人が同じ夢をみた、すなはち、一貴人現はれて、大田々根子命を以て大物主大神を祭る主と為し、また市磯長尾市を以て倭の大国魂神を祭る主と為さば、必ず太平ならむ、と誨へた、とある。また、倭大神（倭大国魂神）が、穂積氏の遠祖大水口宿弥に著つて、天皇（崇神）の、おのれを祭るべきことを告げた。そこで、大倭直の祖長尾市に命じて大神を祭らしめたまふた、ともある。これで見ると穂積氏は倭大国魂神の神意を示現するものやうである。さらに大毘古命にかかはる物語がある。御真木入日印恵天皇（崇神）の御時に大毘古命は高志国につかはされた。その途中、「腰裳服せる少女」が、山代の幣羅坂にあらはれて

是はや 御真木入日子はや 己が緒をぬすみ殺せむと、後つ戸よ 行ききたがひ  
 前つ戸よ 行ききたがひ 窺はく知らにと 御真木入日子はや

と歌つて姿を消した。それは天皇の御身の危険を暗示するものであった。大毘古命は大倭根子日子国玖琉命（孝元天皇）の御子であり、母は穂積氏等が祖・内色許男命の妹・

内色許比売命である。幣羅山の少女には大国魂神が乗り移ったのであらう。弟橘比売、またこの神のみ意こころによって倭建命に付き添ったと思はれる。命みことは、み姨倭比売命を介して伊勢大神の加護をかかぶるとともに、弟橘比売の献身に倭大国魂神のみ意を感得したと云はねばならぬ。

征旅を終へられた倭建命は帰還の途次足柄あしがらの坂に登り立ち、三ねもころに歎かして、「吾妻あづまはや」と詔のたまりたまふた。紀は碓氷嶺うすひねにしてあるが、足柄のほうがよい。命みことが亡き比売をししのんで歎かれたのは、比売が入水した走水の海が眼前に望まれ、また比売が「さねさしさがむのをのに」と詠んだ相模の平野が眼下ひらに展ひらけてゐる足柄の坂でなければならぬ。吾妻はや！この一言にまさって哀切な鎮魂のことばはあるまい。

(昭和四八年一月三日・伊豆神津島にて)

### 追記

一月十五日、例によって後藤兄の先達せんだつで、上総鹿野山のうの白鳥神社に参ることができた。鹿野山神野寺



鹿野山・白鳥神社

(成田山の別院とか)へは参ったことがあるのだが、そのすぐ近くにある白鳥神社のことは最近まで知らなかった。降り出した雨はやがて雪になった。社殿は簡素ではあるが、丹誠こめられてゐて、すがすがしかった。拜殿の縁には、だれが供へたのか、白紙の上に丸餅が一つ載せられてゐた。奥院といふのは石を畳み上げた上に石造の草薙くさなぎのつるぎ劍が立てられ、ささやかなしめ縄が張られてあつた。社前の苔むした石燈籠には文政(一八一八—一八三〇)の文字がよまれた。

白鳥の羽毛かみ山に雪乱る

## 若き日の聖徳太子

——伊予温湯銘文について——

ぼくは新聞の購読を止めて時折街頭で買ふだけにしてゐるのだが、さきごろ買った某新聞に、「私の聖徳太子」(下)といふ標題を見つけて、ハッとした。例の、尊貴なるものを傷つけるのを得意とする、学問の仮面をかぶった悪魔ののろひではなからうかと、不安な目をその紙面に走らせると、意外にもそれは、聖徳太子の「世間虚仮・唯仏是

真」の御遺告に信順する、真摯な求道の告白であった。筆者の小山一行氏がまだ大学院の学生であるといふことが、よけいにあるがたかった。老骨のぼくではあるが感奮した。それに触発されたのか、我知らずこの論稿が成った。

伊予温湯銘文は、前記「世間虚仮・唯仏是真」の太子御遺告を伝へる、かの天寿国曼茶羅などと共に聖徳太子の根本資料である。碑そのものは伝へられてゐないが、碑文は、これまた散逸せる伊予風土記からの引用が、しやくにほんぎ 積日本紀に載せられてゐる。碑文は推古四年、御歳廿三（数へ年）の太子が、高麗僧惠慈や葛城臣（小檜）こならを従へて伊予道後温泉に出遊せられたときのことを記せるものである。かな交じり文にしてその前半を書き出す。――

法興六年十月、歳丙辰へいしんに在り。我が法王大王（聖徳王）、惠慈法師及び葛城臣と、夷与村に逍遙し、正に神井を覩て、世の妙験を歎ず。意を斂のべんと欲して、聊いささか碑文一首を作す。惟おもふに、夫れ日月上に照りて私せず、神井、下に出でて給せざる無し。万機所以本に妙応し、百姓所以に潜扇す（注）。若乃すなはち、照給、偏私ひんしなきは、何ぞ寿国に異ならむ。華台に随つて開合し、神井に沐もくして疹やまひを瘳いやすは、詎なんぞ花池に落ちて溺れるを化たがするに舛

はむ。(下略)

釈日本記の本文そのものに誤脱があるらしく、文の前後整はぬところや意の通じにくいところなどはあるが、大体のことはわかる。最初の法興六年といふのは、前記せるごとく、推古四年のことだが、書紀には見えぬ年号である。崇峻天皇の四年を元年とする。書紀が取上げない理由については学説のあることだと思ふが、それを知らぬぼくの思ひつきを云へば、蘇我馬子が法興寺(のちの元興寺)建立を思ひ立って、それを記念するためにたてられた年号なので「法王帝説」、書紀はそれをきらったのではなからうか。

さてこの銘文をみて多くのまさに感銘するのは、「私せず」とか「偏私なし」とか云ふことばである。それは太子の十七条憲法を貫く精神であってみれば、憲法の精神がすでにここにあらわれてゐると云はざるをえない。銘文の作者が太子のみ心を心として作った、といふよりも若き太子が、貴賤上下さては貧富のへだてなく、浴みを享受してゐるありさまをまのあたりご覧になって、「わが政もかくありたきもの」と、ふと側近(惠慈など)にお洩らしになったことばが、ここに生かされてゐるのではないか。

太子は、単に物見遊山に伊予の出湯いでゆに出遊せられたのではあるまい。とかく病気が

ちで側近の勧めで湯治とうじのために出向かれたのであらう。太子にとって、病気とは、本質的には、「衆生病めるが故に我病む」といふ、いはゆる菩薩の疾にはかならない。しかし、ふつうの意味でも、伊予出遊のころの太子はとりわけ病気がちであったのではないか。この十年間、太子は、み心の休まる日はなかった。十四歳にして父帝（用明天皇）のにはかな崩御。物部氏の滅亡、その時期はわからぬが、母后の、太子庶兄多米王との再婚（「法王帝説」）、蘇我馬子の叔父崇峻天皇弑逆しぎやく、そして摂政に任ぜられてすでに四年。表面にあらはれた、これだけの事実からしても、聡明多感な若き太子の心労のほどは察するにあまりがある。この間、太子は、人生の無明むみょうの深淵を凝視しつつ、「世間虚飯」の歎きに、幾度ねむられぬ夜を明かしたことであらうか。それなればこそ、高麗僧惠慈の来日は、太子にとってこの上なきなぐさめであったと思はれる。師にめぐりあって太子は蘇生の思ひをせられたであらう。はじめて「唯仏是真」を実感せられたのではないか。「唯仏是真」は、実は「世間虚飯」と別のものではなかった。「世間虚飯」に苦悩すること、そのことが、「唯仏是真」のあかしあかしにほかならない。

また惠慈は、太子にめぐりあって、はじめて、ほんとうに「世間虚飯」に苦悩するも

のを見た。そしてそこに「唯仏是真」のあかしを信知したのではないか。惠慈は太子の薨逝を自国に在って伝へ聞き、太子の一周忌の日をわが死期とすると予告し、果してその日に病歿した。その胸には太子の御製疏を抱いてゐたのであらう。惠慈が帰国したのは推古廿三年十一月で、二十年間、太子に近侍したわけである。「法王帝説」に「惠慈法師、上宮御製疏をたまはり本国に還歸す」とある。御製疏の完成を俟って帰国したのであらう。

〔注〕 銘文中の「百姓潜扇」については、岩波古典文学大系「風土記」は、「ひそかに、とびらす」と訓み「国民はそつと扉を立てて安らかに生活する」と頭注してゐるが、それでは上の「神井、下に出でて給せざる無し」の文に照応しない。「温泉にどっぷりつかつて、ほてつた体に風を当てる」と解してはどうであらうか。

(四八・二・二)

## 壬 生 記

推古紀に――

十五年春二月庚辰朔、壬生部みぶべを定めたまふ、とある。壬生部とは何か、まづ広辞苑の  
にぶべ（壬生部）の項には「皇子誕生などに産殿うぶどのに奉仕する諸部」とある。折口信夫先  
生の説によるものであらう。この説に、ぼくは半信半疑である。壬生部がそのやうなも  
のとして出てゐる事例を知らないからである。岩波文庫本日本書紀の編者注には「乳部  
と同じく通常御名代みなしろの部と解せらるゝも、また異説なきにあらざ」とある。この、御名  
代の部とする解のほうが適当なやうに思はれる。といふのは、古事記仁徳天皇の条に—  
この天皇の御世に大后石おほきさいの比売ひめの命みことの御名代として葛城部かつらぎべを定めたまひ、また太子伊  
那本いなほん和氣わきの御名代として壬生部を定めたまひ、また水齒みづは別わけの御名代として蝮部たぢひを定めた  
まひ、また大日下おほくさかの王の御名代として大日下部を定めたまひ、若日下部の王の御名代と  
して若日下部を定めたまひき。——

とあるからである。これで見ると、皇太子の御名代をばとくに壬生部と云ふやうであ  
る。推古紀の壬生部は皇太子である聖徳太子の御名代の部といふことになる。（ニフ・  
ミブがウブヤ・ウブユなどのウブと同じ語であることはたしかかもしれない。）

ところで壬生部を定められたこの年は法隆寺の成った年でもある。そのことは偶然の

一致ではあるまい。法隆寺成るについて、推古天皇の、太子への感謝のしるしであるとともに、亡き用明天皇への孝養であらう。この年に法隆寺の成ったことは、なぜか書紀には見えない。それは、法隆寺金堂薬師如来光背銘に銘記せられてゐることである。すなはち丙午の歳（用明天皇元年）に、天皇、大御身おほみみやくさ勞ませたまひ…太子とともに誓願せられて大御病たひの平らぎまさむがために、寺を造り薬師像を作りたてまつらむとせられたが、にはかに崩御せられ、太子、その御遺志をうけたまうて、丁卯の歳（推古十五年）その事成つた。誓願の日から廿一年経つたわけである。

太子薨逝後二十年、皇極天皇元年に、蘇我蝦夷えみし・入鹿いるか父子は人民を動員して自分ら二人の墓を造つた。さらに上宮の乳部みぶを召集してその塋ほかど所ところの勞役に服させた。塋ほかど所ところといふのは墓域の中で、直接遺骸を収める所であらう。聖なる部民に忌まはしき賤役を分担させたのである。そこで上宮かみつみやのおほいらつめのみこ大郎姫王は激怒して云はれた——

蘇我臣専ら国政を擅はしにして多く無礼なを行す。天に二日無く、国に二王なし。何に由りてか意の任まに悉に封民を役せむ。

と。そして「これより恨みを結びて遂に俱に亡なばされぬ」とある。このことで蘇我氏

の恨みを買って上宮王家一族亡ぼされることになった、といふことであらう。法王帝説によると上宮王家の姫王ひめみこといふのは片岡女王のほかには見当らぬ。この翌年十一月、つひに入鹿は山背大兄王やましろのおほえのみこたちを斑鳩宮いからがのみやに包囲し、火を放った。王たちは辛くも脱出して、胆駒山いこまに潜伏した。しかし数日にして山を出て斑鳩寺いからがのてら（法隆寺）に入られた。入鹿は斑鳩寺を包囲した。王は三輪文屋君みのふみやのみきみをして、包囲軍に告げしめた――

吾兵を起して入鹿を伐たば其の勝たむこと定しうづな。然るに一身の故に由りて百姓を傷りやぶ残はむことを欲せず。是を以て吾が一身をば入鹿に賜ふ。

と。そして「子弟妃妾一時に自経わなきて俱にみうせまし」たのであった。法王帝説には「山代大兄及其昆弟等合はせて十五王子等」とある。胆駒山中にあったとき三輪文屋君は王に説いた――

請ふ、深草屯倉みやけにゆきて茲これより馬に乗りて東国あづまに詣りて乳部ちちぶを以て本と為し、師いくさを興して還り戦はむ、其の勝たむこと必しかならず。

王は対へて云ふ――

卿が云ふ如くば其の勝たむこと必ず然らむ。たゞ吾が情こころに冀ねがふは、十年百姓を役つかはず、

一身の故を以て、豈あに万民を煩わづらはしいたはしめむや。又後世に於て、民、吾が故に由りて、己が父母を喪うしなへりと言はむことを欲せず、豈に其れ戦勝ちての後に方まさに丈夫ますらと言はむや。夫れ身を捨て国を固くせむは亦丈夫ならざらんや。

と。王はつひに文屋君の進言をきき入れず、自ら滅亡の途をえらんだのである。

このことあつて廿九年の後、文屋君の進言どほりのことを実行して成功したのは大海人皇子（天武天皇）である。いはゆる壬申じんしんの乱（六七二）である。近江を出て吉野に入つた皇子は、近江朝廷が依然として自分に監視の目を光らせてゐるのを憤つて云ふのは――

朕位われを譲り世を遁ゆるゝ所以ゆゑは、独り病を治め身を全くして、永く百年を終へむとなり。然るに今已むをえずしてまさに禍を承けむとす。何ぞ黙もくして身を亡なさむや。

と。まさに山背大兄王の逆である。皇子は使者を美濃国に遣はして、安八あはつ鷹郡つまの湯沐ゆのう令多がしおほ臣品治のおみほむぢ（古事記撰者太安万侶の父）に戦略を授けしめた――

まづ当郡の兵を発おこせ。よつて国司等に経かれて諸軍を差発さしたて、急に不ふ破の道を塞ふげ、朕われ今発いでたむ。

と。この戦略は実行され成功した。美濃の師三千人を以て不破の道を塞ぐことができたのである。不破の道を塞ぐ、といふのは、近江勢の来襲に備へて、兵力をあつめる時間をかせぐためである。壬申の乱の顛末についてはこれ以上述べない。ところで、美濃の師三千人とあるのは、壬生部の民を主力とするものであり湯沐令ゆのくながしといふのはその管理官であらう。大海人皇子は皇太子として美濃に壬生部を所有してゐたのである。皇子の成功の因はこの壬生の民の決起にあつた。さればこそ天武天皇崩御せらるゝや、その殞おほあまのすくね（もがり）の時に第一番に大海宿弥が壬生を代表して誅（しのびごと）申したのであつた。

天武天皇の成功から逆に考へて、三輪文屋君の進言したことは、単なる希望的観測ではないことがわかる。まして上宮王家の声望をもつてすれば、成功の可能性は天武天皇の場合よりも大きい、と言つてもよい。それを断乎として退け、自滅の途をえらんだ山背大兄王こそは、天武天皇以上に「丈夫」と申さねばならぬ。

（四八・二・四）

## 第二篇 楠氏を慕いて

小歌うたひて・菊水の記・観心寺の記・信貴  
山の記・有情の記・磯長天王寺の記・つつじ  
の記・純一なるものを求めて・楠氏のこと・  
神魂神社のこと・竹葉記・夢殿観音記・七生  
滅賊・国史の地熱

(附) 白鷺の記・友松の記・水仙記



楠氏菩提寺・観心寺・金堂及び建掛塔

## 小歌うたひて

——太平記より——

—

興国元年（暦応三年）（一三四〇）の四月の初めつ方、新田義貞舎弟脇屋刑部卿義助（一三四二）は、四国の宮方を統卒すべく、伊予国へ渡った。しかし五月四日より病をうけ、わずか七日をすぎてはかなくなった。宮方の最後の拠点は大館左馬助氏明のこもるところの世田城であった。寄手の大将細川刑部大輔頼春は一万余騎を七手に分けて城の四辺に陣々を構えた。城中、すでに矢尽き食乏しく、防ぐべきようもないので、九月三日の暁、大館左馬助主従十七騎をはじめ士卒みな、城を出て壮烈な死を遂げた。しかし篠塚伊賀守一人は例外であった。大手の一、二の木戸を広く押し開け、ただ一人突っ立っていた。降人に出るためかと見るに、さにはあらず。紺糸の鎧に龍頭の甲の緒を締め、四尺三寸ある、いかもの造りの太刀に八尺あまりの金さい棒わきにはさみ、「よそにては定めて名をも聞きつらん、今は近づいてわれを知れ。畠山庄司重忠が六代の孫、むさし

の国に生い育ちて、新田左中將殿（義貞）に、一騎当千とたのまれたりし篠塚伊賀守と云ふ者こゝにあり、討つて勲功に預かれ」と大音声挙げて名告るやいなや、百騎ばかり控えていた敵の中へ、少しのためらいもなく走りかゝる。その勢い、骨柄の勇鋭たるのみならず、かねて聞き及ぶ大力なればこれに手向かうもの一人もなく、百騎の勢はさつと東西にひきのいて、途をあけて彼を通す。彼は馬にも乗らず、弓矢も持たないたゞ一人のこと。何ほどのことがあるう、遠矢にて射殺せ、とつて返さば馳け悩まして討て、とて二百余騎、彼の跡を追う。ところが――

篠塚は少しもさわがず、小歌うたひて、しづかにあゆみけるが、敵近づけば、「ああ、御辺たち、いたう近づいて頸に仲たがひすな」と、あざ笑つて立ち止まる。敵矢先をそろへて射れば、「某が鎧には、かたがたのべろくゝ矢は、よも立ち候はじ。すは、射て見給へ」とて、うしろをさしまかせて休み居たり。篠塚、名譽の者なれば、一人なりとも、もしや討ちとどむる、と追っかけたる敵二百騎に六里の道を送られて、その夜の夜半ばかりに今張浦に着きにけり。

その沖には敵の乗りすてし、水手だけ残っている船があった。彼は鎧を着たまま泳ぎ

つき、「われは官方の落人に篠塚と云ふ者ぞ、この船出いて、われをいんの島へおくれ」とて、おどろきさわぐ水手を尻目に、廿余人がかりで繰り上げる碇をやすくと引き上げ、十四五尋ある帆柱をかるくと押し立て、屋形の内にて高枕のいびきをかいて寝てしまった。水手梶取、これにおそれをなして、彼をいんの島に送りつけたのであった。(いんの島は因の島、すなわち瀬戸内海の小島であろう。)

二

それより数年後のことである。――

楠帯刀正行(くすのきただてまさまさとつら) (二二四八)は父正成(まさしげ) (二二九四)が先年湊川へ下りし時、思ふやうあれば、今度のかせんに我は必ず打死すべし。汝は河内へかへりて、君のいかにもならせ給はんずる御様を見はてまゐらせよ、と申し含めしかば、某庭訓を忘れず、この十余年、我身の長ずるをまち、討死せし郎従其の子孫を扶持し立て、いかにもして父の敵を亡ぼし、君の御憤りを休め奉らんと、明けくれ肺腑をくるしめてぞ思ひける。光陰過ぎやすければ、年つもって正行已に廿五。ことしは殊更父が十三年の遠忌にあたりしかば、供物施僧の作善、所存の如くにいたして、今は命惜しとも思はざりければ、其勢五百余騎を率

し、時々住吉・天王寺辺へ打出で、中嶋の在家少々やき払ひて、京勢今やかゝるとぞ待  
つたりける。

高氏はたゞちに細川陸奥守顕氏を大将として、都合三千余騎の討つ手を河内国へ向か  
わせた。彼等は八月十四日（貞和三年か）午の刻に、正行の館から七里を隔てた藤井寺  
に陣した。正行は相手の油断を見てとつてこれを急襲し、散々な敗北を喫せしめた。そ  
こで足利方は十一月廿五日、山名伊豆守時氏・細河陸奥守顕氏を両大将として六千余騎  
を住吉・天王寺へ向かわせた。正行はまず住吉の敵に攻撃を加えた。半時ばかりの合戦  
に彼我の死人戦場に充滿した。敵の大将山名時氏も切疵を受け、その手当をしていた。  
ちようどその時——

楠の勢の中より、年のほど廿ばかりなる若武者和田新発意源秀と名のつて、洗皮の鎧  
に大太刀小太刀二ふりはいて、三尺余の長刀を小脇にはさみ、しづしづと馬を歩ませて、  
小歌うたうて進んだり。其次に一人、これも法師武者の、長七尺余もあらんと覺えたる  
が、阿間の了願と名のつて、からあやおどしの鎧に、小太刀はいて、柄の長さ一丈ばか  
りに見えたるやりを、馬の平頸に引そへて、少しも擬議せず駆け出でたり。

その勢いと云い、事柄と云い、尋常の者ではないとは見えたが、あとに続く勢がないので、「ありや何だ」とだけで、山名方の大勢はおどろくこともなく控えていた。これがいけなかった。この二人のために思う存分ひっかきまわされ、氣勢あがった楠方に抗すべくもなく、ついに山名方は退却を余儀なくされた。この退却の流れに天王寺の勢も合流し、渡辺の橋から塞せき落されて河中に流れるもの多かつたが、その五百余人を救い上げて手厚く介抱した正行の恩讐を越えたなさけに感じ、正行の手に属して、後日四糸しじょう繩手の合戦に正行と死を共にしたのもあったという。

三

住吉・天王寺の敗戦後、すぐさま足利方は、高武藏守師直こうのむさしのかみもろなほ、越後守師泰兄弟を両大将として、四国・中国・東海廿余箇国の軍を催し、都合その勢八万余騎、うんかの如く淀・八幡に着いた。正行・弟正時二人は、十二月廿七日、一族若党三百余騎をひきつれ、吉野皇居に参り、その心中を言上した上、必死の覚悟をきわめて吉野を打出で敵陣へと向かった。この四条合戦の模様については述べることはさしひかえる。結局、「馬にははなれぬ、身は疲れたり、今は是迄とや思ひけん、楠帯刀正行・舎弟七郎正時・和田新

發意三人、立ちながら刺しちがへて、同じ枕に伏したりけり。吉野の御廟にて過去帳に入りたりし兵（百四十三人）、これまでなを六十三人打ちのこされてありけるが、今はこれまで、いざや面々同道申さんとて、同時に腹かききって同じ枕にふしにけり」ということであつた。ところが――

和田新兵衛行忠ゆまたたはいかと思ひけん。只一人一縮いっしゆく（鎧、甲に身を固め）しながら徒立かちだちになつて、太刀を右の脇にひっそばめ、敵の首一つとつて左の手に提げつゝ、小歌うたひて、東条の方へぞ落ち行きける。

これを見て安肥あび肥前ひぜん守忠かみただぢね実、只一騎馳せ寄つて、「和田・楠の人々皆自害せられたのを見捨てて一人落ちるとはなさけない、返えしなされ、見参せん」とことばをかける。すると新兵衛につこと笑つて、「返えすに難いことか」とて、四尺四寸の太刀の貝しのにぎに血の余っているのを打ち振つて走りかかる。忠実は一騎討ちではかなわじと思つたものか、馬の首を返えす。忠実が止まれば行忠また落ちてゆく。落ちてゆけば忠実また追っかけ留めんとする。追えば返えし、返えせば留まり、路一里ばかりを過ぎるまで、互に討たず討たれずして、日すでに夕陽に及ぼんとした。かくては討ちもらしてしまふ

と思つてゐるところに、忠実方の二騎駆せ来つて射かける矢に、七すじまで射立てられて、新兵衛はついに忠実に首を取られたのである。(以上神田本・太平記による。)

あとがき

少し調べたいことがあつて、久しぶりに太平記を取り出し、あちこち拾いよみしてゐるうちに、「小歌うたひて」というのに心ひかれて、そのことばの出てくる右の三箇所を取り出してみた。それは、わざと平静を装う、ということではむろんあるまい。さりとて相手を呑んでかかつてゐる、ということだけのことでもなさそうである。心中何のわだかまりもなく、自然に口に出たもののように思われる。死はもとより辞せず、さりとて生を恥ずることもない。死も生も、何も彼も、すべてを通りぬけた、いわば透明な虚無の声である。しかし、云うまでもなく、これはぼくなどの実感をはるかに超えたもので、ただおぼろげの感触である。

(四一・一・六記)

## 菊水の記

菊水きくすいは家紋のうちで最も有名であり、また最も美しいものである。それは楠氏の生きた精神をそのままあらわしている。それは何に由来するのか、ほくは後醍醐天皇の賜うたものと信じている。名和長年ながとし（一三三六）の家紋は、水に帆掛船かかげぶねである。それが後醍醐天皇の賜うたものであることは伯耆卷はろきまきの伝えるところである。そこには、「まろは船、汝は水、されば今より汝が紋を改めて、水に船を仕るべし。」とある。船上山せんじょうせんでのことである。菊水にもそれと同じ事情があるのではないか。さて、菊花が、いつの日に皇室の御紋章となったか、ほくは知らない。しかし、後鳥羽院御作と云われる刀剣きくいちもんじは菊一文字と称せられ、そのハバキには菊花が刻まれている。菊花はすでに皇室のしるしとなっていたことがうかゞえる。してみれば、それを正成がみだりにおのれの家紋に取り込むはずはない。菊水は正成の挙兵のはじめから用いられている。すなわち太平記卷三赤坂城軍事の条に――

楠七郎、和田五郎、遙かの川より見下して、時刻よしと思ひければ、三百余騎を二手に分け、東西の山の木陰より、菊水の旗二旒なごれ、松の嵐に吹き靡かせ、しづかに馬を歩ませ、煙嵐えんらんを捲いて押し寄せたり、東国の勢是こゝれを見て、敵か味方かとためらひ怪しむところ、三百余騎の勢ども、両方よりときをどつと作って――

とある。ついでに云っておく。文中「しづかに」とあるが、この「しづかに」とか、あるいは「しづしづと」とかいう形容語は太平記のきまり文句の一つだが、しかしこれは楠木勢にかぎって使われている。いわゆる雲霞のごとき敵の大軍には使われておらぬ。松風になびく菊水の旗、それは古今屈指の美しい光景である。それを心に思い描くと感

大楠公自筆旗(湊川神社蔵)





大楠公銅像(高村光雲作・皇居前)

動に堪えられぬものがある。

後醍醐天皇は楠正成の存在を  
かさぎ笠置での夢告によってお知りになつた、と太平記は云っている。それは、正成の出現が世間一般には意外と云うほかはないものであつたことを示すものであつて、実は正成の存在は、はじめからあてにされていたのであつた。増鏡は云う――

笠置殿には、大和・河内・伊賀・伊勢などの兵ども、参りつどふ中に、事のはじめより頼みおぼされたりし楠木正成といふものあり。心猛く、すくよかなる者にて、河内国に、おのが館のあたりをいかめしくしたゝめて、このおはします所もし危からむをりは、行幸をもなしきこえむなど用意したり。

とあり、また、そのあとには

中務の御子（尊良）・大塔宮（護良）などは、かねてよりこゝ（笠置）を出でさせ給ひて、楠木が館におはしましけり。行幸もそなたさまにや、とおぼし心ざして、藤房・具行（中納言）、師賢（大納言）入道、手をとりかはして、炎の中を免れ出づる程の心地ども、夢とだに思ひもわかれず、いとあさまし。

とある。これによって菊水の旗も「事のはじめ」にすでに用意せられていたと考えるよいであらう。

名和氏について増鏡は云う。――

（隠岐を脱出せられた後醍醐天皇は）おなじき廿五日伯耆国稲津浦といふ所にうつらせ給へり。この国に名和の又太郎長年といひて、あやしき民なれど、いと猛に富めるが、類（るい）ひろく、心さかくしく、むねくしき者あり。かれが許（もと）へ宣旨を遣したるに、いとかたじけなしと思ひて、とりあへず五百余騎の勢（せい）にて御迎へにまゐれり……それより船上寺といふ所へおはしませせて、九重の宮になずらふ。

とある。そして前述したように、水に船の紋をさすけられたのである。名和長年につ

いては「あやしき民」と云っている。それは正成については云っていないけれど、当時の社会通念から云えば五十歩百歩であろう。天皇と、この「あやしき民」との間に立ちふさがってわがままにふるまったものが、鎌倉幕府の片割れ・足利氏とその一味徒党であつた。

正成の一族（和田・橋本を含めて）には、ほとんどすべて、その名前に正の字が付いている。正成以前の人で、この字をもつ著名人は平正盛たひらのまさもりくらいしか思い浮かばぬ。すつきりとした、よい字であるのに、あまり使われていないのである。それで正成およびその一族がこの文字を使うのにはなにかわけがあるのではないかと考えざるをえないのである。——嵯峨の大覚寺を創められたのは、嵯峨天皇々女正子内親王（淳和天皇々后）である。生母は橋嘉智子たかはなのかちこである。仁明天皇は正子内親王と母を同じくする。その諱（いみな）は正良である。この諱について北畠親房きたばたけちかさき（二二九—二三五）は神皇正統記で「これよりさき御諱たしかならず。多くは御乳母の姓などを諱に用ひられき。是より二字たゞしくましませばのせ奉る。」とことわっている。そして親房は仁明のみ代について「わが国のさかりなりしことは、この比くらほひにやありけん。」と云っているのである。橋氏が世の前

面に出でいたのもこのときまでで、このあとは学者の家柄としてほそぼそと命脈を保っていた。ところで正成は、自ら橘姓を名のっていた。(湊川神社蔵・法華經奥書署名) それで橘氏と大覚寺統と、二重にゆかりのある「正子」「正良」の「正」の文字を、勅許あつて、用いたのではないか、と臆測せられるのである。後醍醐天皇の皇子はどなたにも「良」の字が付けられている。それも「正良」にかゝわりがあるのではないか。かわりがあるとすれば、それは親房の進言によつたのではなからうか。(四三・一・五記)

## 観心寺の記

昨春、桜の花のさかりの時分ぼくは河内の観心寺かんしんじをたずねた。そこには桜はなかったように思う。ときどき小雨の落ちる暗い日でもあつて、しめやかな空気が漂っていた。ここは楠氏の菩提所ぼだいじよであり、正成まさしげの首塚くびづかがある。後村上天皇の行在所あんざいしよとなつたところであり、天皇の御陵はここにある。国宝である金堂はいわゆる観心寺様式の代表的遺構である。方七間の単層入母屋造りで、それに三間の向拝が付いていて、けつして小さいも



大楠公首塚

のではないが、胸を張って天空を望む、といった堂々たる構えではなくして、伏目がちに何か思いを凝らしているような、沈重な姿である。それは、この地方に存在する、最も美しいものの一つである。

金堂の右手に単層の塔がある。ちようど修理中で、四方かこつて、屋

根の上には二、三の職人の姿がちらついていた。これは正成が三重の塔を造るつもりであつたところ、高たかうち氏の叛でにわかに出陣することになつて、造りかけたままになつた。それで「造りかけの塔」というのだ、とお寺では云っている。しかし金堂は正行まさつらの再建したものであることは、ほかならぬ観心寺文書もんじよにあることだ。してみれば、この塔を造りかけたのも、正成ではなくて正行である。としたほうがよさそうである。

とにかくこの金堂が六百年後の今日まで生き残つたことは不思議というほかはない。

法隆寺や薬師寺三重塔は別格として、六百年以前の木造建物で今に存しているものはどのくらいあるであろうか。おそらく十指には余るまい。

ここの本尊の如意輪観音は、大和室生寺・撰津神咒寺のそれとともに日本三如意輪と云われ、しかも隨一の美しさをたたえられている。弘仁・貞観期（九世紀）のものと思われる。ぼくの参ったとき、その拝観は許されなかった。ところで正行は決死の出陣に當って吉野に参り、主上に今生のお暇乞いを言上したあと、如意輪堂にて、その板壁を過去張にして、一族郎従百四十三人の名字を書き連らね、その奥に、「返らじと」の歌を書き留め、「逆修のためとおぼしく、各々鬢髪を切つて投げ入れ、其の日、吉野を出で、敵陣へとぞ向かはれける。」とある。太平記にはこれにつづけて、「師直・師泰は、淀・八幡に越年して諸国の勢を待ち調へて、河内へ向かふべしと議しけるが、楠すでに逆寄せにせんため、吉野へ参つて暇申し、今日河内の往生院に著きぬ、ときこえければ云々」とある。これによれば、正行は寸暇を惜しんで、菩提所の観心寺に参るかわりに、本尊を同じくするこの如意輪寺で告別の儀をすませた、と云わねばならぬ。

後村上天皇の行宮が、天野金剛寺から観心寺に移つたのは正平十四年のくれのことで

ある。「無用ならん人々をそぞろに召し具すべからず。」ということ、供奉の人員は極度に制限された。摂政・関白・太政大臣をはじめ、多くの上達部、官女たちは諸々方に身をひそめねばならなかった。この行宮を目ざして攻め寄せたのは、畠山道誓のひきいる大軍であった。和田・楠方は、赤坂・平石・八尾などに城をこしらえて、これに對した。太平記は寄せ手の畠山勢について、こんなことを云っている。――

さるほどに、始めのほどこそ禁制をも用ひけれ、兵次第に疲れければ、神社仏閣に乱れ入りて、戸帳を下ろし、神宝を奪ひ合ひ、狼藉手に余つて、制止に拘らず、獅子駒犬を打破つて薪とし、仏像経巻を売つて魚鳥を買ふ。前代未聞の悪行なり云々

というのである。正行逝いて十二、三年経つた時分のことである。このような、何をしでかすかわからぬ徒輩の爪牙もなぜかここ観心寺には及ばなかった。

くりかえして云う。正行の造建した観心寺が六百年後の今日に伝えられているのは不思議というほかはない。ぼくはその地に立つて、夢ではないかと疑つた。しかし、正行の電光石火のような、短い、しかし激しい生にくらべれば、六百年の歲月こそ、むしろ夢ではないか。不思議なのは、観心寺が今日まで遺つてゐることではなくて、正成・正

行の出現したこと、そのことのほうが不思議である。岡潔先生の近著「春の雲」に――

吉野を出でて打ち向かう

飯盛山の松風に

なびくは雲か白旗か

響くは敵のときの声

と歌うと、ピリピリと電光が背骨を走るのである。

とあるのをよんで、感奮してこの一文を草した。

(四三・二・四・節分の日に)

## 信貴山の記

楠正成の幼名を多聞丸たもんまると云うのは、彼の母が信貴山の毘沙門天びしゃもんてんに祈ってもうけた子だからだ、と太平記にある。多聞は毘沙門の訳語である。この多聞が聖徳太子のお名前の豊聰耳とよとみみに通ずるのはちょっとおもしろいが、そんなことは別にしても、信貴山は太子を思い出させるところである。それは信貴山寺すなわち朝護孫子寺あさごそんしじ(かわった名称だが、

その謂われをぼくは知らない。)が太子の創建にかかる、と云う寺伝を信ずるからではない。信貴山は生駒山地に属する。生駒山は太子のみ子山背大兄王(六四三)が蘇我入鹿(六四五)の追求の手を遁れるために、斑鳩宮を脱出して、しばらく潜伏せられたところなのである。日本書紀に――

蘇我入鹿、小徳巨勢徳太臣、大仁土師娑婆連を遣りて、山背大兄王等を斑鳩におそはしむ。是に、奴三成、数十の舍人と出でて拒ぎ戦ふ。土師娑婆連、矢にあたりて死す。軍衆恐れて退く。軍中の人相謂ひて曰はく、一人当千といふは三成を謂ふか。

とある。三成と正成とが成の字を同じくしていることが、――わらわれることをおそれずに云えば――ぼくの心をひくのである。それはどうでもよいが「一人当千」とあるのはまさに正成にそのままあてはまるではないか。書紀は前記にすぐ続けて――

山背大兄よりて馬の骨を取りて内寝に投げ置き、遂に其の妃並びに子弟等を率ゐて間を得て逃れ出で、胆駒山に隠れたまひぬ……巨勢徳太臣等斑鳩宮を焼く。灰の中に骨を見いでて、誤りて王死せましぬとおもひて、罊みを解きて退去す。

と云っている。これは赤坂城脱出のときの正成の詐謀を思い起こさせる。正成は、死

骸を穴の中に取り入れ、自分が落ち延びたところを見計らって火をつけさせる。城の焼け落ちたあとで、寄せ手のものは、大きな穴の中に、多くの焼けた死骸を見つけて、「あなあはれや、正成はや自害してげり。」と云った、とある。しかしこの似通いも大したことではない。大事なことはほかにある。大兄王の「それ戦勝ちての後に、まさに丈夫と云はんや、それ身を損<sup>す</sup>て国を固くせむはまた丈夫ならざらむや。」というみことを正成の生と死にもあてはめてみたいのである。

信貴山については、絵巻物の絶品「信貴山縁起<sup>えんぎ</sup>絵巻<sup>えまき</sup>」を思い出さぬわけにはいかない。飛倉の巻（山崎長者の巻）が一般に親しまれているが、その延喜加持の巻の一コマに、護法童子<sup>ごぼう</sup>が剣を片手に虚空を疾走する場面がある。それは信貴山の聖<sup>ひじり</sup>の法力の示現である。重いみ病の床に在った延喜の帝<sup>みかど</sup>（醍醐天皇）に、夢ともなく、うつつともなく、その童子がきらきらとして見えたかと思うと、心地よくなされた。後醍醐天皇が正成の存在を夢に告知せられたという伝えには、この説話がいくらか流れ込んでいるかと思われる。天皇の夢には、びんづら結<sup>ゆ</sup>うた二人の童子があらわれているのである。さてかの聖<sup>ひじり</sup>の法力で山崎の長者の米倉は空を飛行して山まで運ばれてしまった。山崎と云えばすぐ

に油が思い浮かぶ。絵巻の中に長者の屋敷で搾木しゆで油をしぼり取っているとところが描か  
れている。ここは油の製造、販売を一手にひきうけていたところである。ところで正成  
は油には不自由しなかつたらしい。千早城では、投げ松明たいまつのさきに火を付けて、寄せ手  
が我先にと渡ってくる橋の上に、薪を投げ集め水弾はじきをもって油を、「滝の流るるやう  
にかけ」て橋を焼き落した、とある。それに先立って、天王寺辺で宇都宮治部大輔うつのみや じぶ だいくと対  
戦した日には、「すべて大和河内紀伊国にありとある所の山々浦々に、かがりを焼かぬ  
所は無かりけり」ということで、「闇夜に昼を易かへたり」というありさまであった。こ  
の無数のかがりには多量の油も使われたであろう。正成は山崎の油業者に手を打つこと  
を忘れなかつたにちがいない。

北条幕府討滅の成った日に、大塔宮護良親王もりながは、信貴の毘沙門堂に腰を据えて帰洛し  
ようとなさらなかつた。それは、足利高氏の逆心をすでに看破して、それを抑制する保  
障のないかぎり、戦闘体制を解除するわけにはいかぬ、と云うことであつた。征夷將軍  
の宣旨あるべしということ親王はようやく信貴を立て入洛された。親王のその日の  
様子を描いた増鏡の文は気持がよい。——

十三日（元弘三年六月）大塔の法親王都に入りたまふ。この月ごろに、御ぐしおふして、えも云はずきよらなる男になりたまへり。からの赤地の錦の御鎧直垂といふもの奉りて、御馬にて渡り給へば御供に、ゆゆしげなるものふどもうち囲みて、み門の御供なりしにもほとほと劣るまじかンめり。

とある。しかし間もなくひきおこされた親王の悲劇は、今更云うまでもないことであり、また云うにしのびないことである。それは山背大兄王の悲劇を思わしめるものである。

（四三・二・一九稿）

## 有情の記

南朝に仕えるか、あるいは北朝（実は足利）に付くかは、どのみち利害得失の打算に依ることで、一概に前者をもって正とし、後者を邪とするのは当たらない、との論が普及している。一往その通りである。例えば赤松円心（則村）（一二五〇）は、千早に拠った楠正成の孤軍奪闘に激励せられて、逸早く旗を挙げ、六波羅を攻めて、北条氏討滅に大き

な働きをしたが、それに酬いられること少きを不満として、建武けんむの日には高氏の手に属して南朝を苦しめた。ところが正成の進退は始終かわることがなかった。それで史家は、正成の進退についてあれこれの解釈を加えているが、それは史家自身の心性のいかなるものかを示すだけである。史家の実証主義は正成をなお不可解な存在とするが、しかし正成の人間は太平記にりっぱに実証せられている。太平記の描く正成を信ずるか信じないか、そのことがわれわれ自身の何たるかを実証する。正成が利害打算に無縁であったとは思われない。しかしそれを感じさせないほど彼はそれを超えていた。そんなことは信じられない、というものは、その人自身にそういうところがないというまでのことである。武朝申状たけとももちじょう(武朝は菊池武光きくちたけみつ(二三三九)の子)によると、北条氏討滅成った日に、正成は、この日を見ずに戦死した菊池武時たけとき(二二九三)をもって功臣の第一として推し、自分などは運よくこの日に遭って恩賞にあずかるものだ、と云った、とある。実証史家はなぜかこの話に触れたがらない。美しいものは信ぜられない、というくせがあるらしい。湊川合戦のときに、兄菊池武重たけしげ(二三四一) (武時の子)の使として、この合戦の状況を見に来た武吉は、正成とその一族の最後に行きあわせた。――

菊池七郎武朝（武吉とあるべきところ）は、兄肥後守が使にて、須磨口の合戦の体に見に來たりけるが、正成が腹を切る所へ行き合ひて、をめをめ見捨ててはいかが帰るべき、と思ひけるにや、同じく自害をして炎の中に伏しにけり。

というのである。これは美しい友情の咲かせた真紅の花である。こはまた実証史家は信ぜぬのであろうか。彼の近眼には、このような利害打算を超えたものはいっさい映らぬのであろう。

正平二年十一月の阿倍野の合戦において、楠正行は敗戦の敵兵に救いの手をさしのべた。すなわち――

安倍野の合戦は霜月二十六日のことなれば渡辺橋よりせき落されて、流るる兵五百余人、甲斐なき命を楠に助けられて、河より引き上げられたれども、秋の霜肉を破り、曉の氷膚に結んで、生くべしとも見えざりけるを、楠、情ある者なりければ、小袖を脱ぎ替へさせて身を暖め、薬を与へて疵を療させしむ。かくのごとく四五日みな労はつて、馬に乗る者には馬を引き、物具失へる人には物具をきせて、色代してぞ送りける。されば敵ながらも、その情を感じる人は、今日より後、心を通せんことを思ひ、その恩を報

ぜんとする人は、やがてかの手に属して後、四条繩手の合戦に、討死をぞしける。

正行のこの仁恵の心は彼亡きあとの楠・和田にそのまま伝えられた。正平十六年九月、楠・和田は渡辺橋を渡って天神森に陣を取り、神崎橋を隔てて敵と相對した。彼我の間の合戦は楠・和田に有利であった。——

半時ばかりの軍に、死する京勢二百七十二人、この内、敵に討たれて死する兵わづかに五、六人には過ぎず。そのほか二百五十余人は、みな河に流れてぞ失せにける。楠、父祖の仁恵をつぎ、情ある者なりければ、あるひは野伏どもに生け捕られて面縛せられたる敵をも斬らず、あるひは河より引き上げられ、甲斐なき命生きたる敵をも禁め置かず、赤裸なる者には小袖を着せ、手負ひたる者には薬を与へて、京へぞ返し遣はしける。身の恥は悲しかりけれども、悦ばぬ者はなかりけり。

楠・和田には、敵味方を超える、普遍的な人倫意識が見出される。それがありがたい。史家は何々史書にすがって、自分の甲羅に似た穴をつくって、それがほんとうの歴史だ、と思い込んでいる。なるほど一枚の借金の古証文は重要な史料として、さまざまのことを示してくれるであろう。しかしあえて破り棄てられた証文も少くはないだろう。それ

は実証史家の思い及ばぬ世界の消息である。

足利高氏の清水寺願文きよみづでらがんもんについて、今は亡き吉野秀雄先生がその内容と筆蹟とをあわせてひどく感心しているのを読んでガッカリしたことがある。(吉野秀雄著「心のふるさと」)先生を敬愛していただけにうらさびしい氣持を味わった。その願文は左のとおりである。――

この世は夢のごとくに候まからふ、尊氏にだう(道)心たばせ給候て、後生ごじまうたすけさせをはしまし候べく候。猶々なほなほとくとんせい(遁世)したく候。だう心たばせ給候べく候。今生のくわほう(果報)にかへて後生たすけさせ給候べく候。今生のくわほうをば直義ただよしにたばせ給候て、直義あんをん(安穩)にまもらせ給候べく候。建武二年八月十七日 尊氏花押がし

この建武二年八月十七日という時日は、湊川合戦みなとに大勝して入洛し、八月十五日に光明天皇を押し立てた直後で、彼の得意の絶頂の日であった。ところでこの願文が心にもない、いや、弟の直義を欺く下心のあるものであることは、やがて直義を毒殺したことによって弁解の余地はない。彼は直義を欺くために仏を利用し、仏をも欺いたのである。

楠氏の「情有る者」であるのに対して「情無き者」と云わねばならぬ。ぼくにはこの願文は、遊女の起請文以下のものとしか思えぬ。それは云い過ぎであらうか。

(四三・七・七稿)

## 磯長・天王寺の記

正平三年(北朝貞和四年)(一三四八)の正月に楠正行・正時が戦死した、そのすぐあとに高師直は吉野行宮を炎上せしめた。そのことは太平記に出ている。ところで太平記にはなぜか出ていないが、このとき師直の弟師泰は河内へ向かって、正行を失なった楠和田を攻め、そのついでに聖徳太子の河内磯長廟を破壊し、あまつさえ太子尊像を傷け、砂金以下の重宝を略奪したのである。そのことは園太曆(洞院公賢の日記)に出ている。太平記にも師泰が河内に向かったことは伝えられている。――

貞和四年正月五日、四条繩手の合戦に和田・楠が一族皆亡びて、今は正行が舎弟次郎左衛門正儀(生歿)ばかり生き残りたりと聞えしかば、この次でに残る所なく、皆退治せ

らるべしと、高越えちごのかみ後守師泰三千余騎にて、石川河原むかいじろに向城を取って、互に寄せつ寄せられつ、合戦の止む隙もなし。

とある。師泰は磯長陵に乱暴を加えただけでなく、太子創建の天王寺の所領を押領した。右の記事のあとに太平記は云う。――

今年石河川原に陣を取って、近辺を管領せし後は、諸寺諸社の所領、一処も本主に充て付けず、殊更ことさら天王寺の常燈料所の庄を押へて知行ちぎょうせしかば、七百年より以来このかた、一時も更に絶えざる仏法常住の燈も、威光と共に消えはてぬ。

と。ところでこの天王寺の金堂が大地震のために崩壊したことがあった。それは正平十六年（北朝・康安元年）（一三六一）の八月廿日のことである。また太平記を引く。――

南な・方は・には、この大地震に諸国七道の大伽藍がらんどもの破れたる体ていを聞くに、天王寺の金堂ほど崩れたる堂舎はなく、紀州の山々ほど裂けたる地もなければ、これ外の表示にはあらじと、御慎み有って、様々の御祈どもを始めらる。則ち般若寺はんにやせんかいしやうにん円海上人勅を承って、天王寺の金堂を作られけるに云々

とある。以上によって明らかである、天王寺あるいは磯長御廟は南方（南朝）の世界

の存在であったのである。

話はあとさきになるが、河内国藤井寺ふしむでらの合戦で正行のために破られた足利方は、山名伊豆守時氏いづのかみときうぢ、細川陸奥守顕氏むつのかみあきうぢを両大将として、六千余騎を住吉天王寺へ差し下した。大手の大将時氏は住吉に陣を取り、搦手の大将顕氏は天王寺に陣を備えた。正行はこれに当惑した。――

住吉天王寺兩所に城郭を構へられなば、神に向かひ仏へ向かつて弓をひき矢を放つ恐れ有りぬべし。不日に押し寄せて、まづ住吉の敵を追ひ払ひ、唯攻めに攻め立てて、急に追ひかくる程ならば、天王寺の敵は、戦はで引き退きぬと覚ゆるぞ。

と苦慮したのであった。彼我の世界の相違は、これによってさらに明らかであろう。正成が天王寺で聖徳太子未来記を披見して世の成行きを予知したという、太平記の伝えをぼくは好まないが、正成が太子にみちびかれた人格であることを示すだけの意味はあるだろう。

さて、正行の同志である和田新発意源秀・阿間の了願の二人のことは前に一度取り上げたことがある。(拙稿「小歌うたい」)それで、彼等の出てくる太平記の記事を再び

持ち出すことはしないが、若き源秀に了願が付き添ったかっこうで、二騎だけで山名の大勢の中へ懸け入っているのである。そのことは、この二人が同志であるというほかに、何か特別の間柄にあるのではないか、を思わせる。つまり二人が真宗ごうしじ仏光寺の了源にかわりのある同信でもあるのではないかと臆測せられるのである。明治のすぐれた史家・原勝郎博士は、「真宗が京都及び近畿に弘布したのは、鎌倉時代の末十年間で、これは主として、存覚の弟子なる仏光寺の了源の力である」と云った。(日本中世史)鎌倉時代の末十年とは後醍醐天皇の治世である。了源は、親鸞にはじまり、真仏・源海・了海などと次第相承した法系を受けついでと云われる。「源」とか「了」とかいう文字は仏光寺にゆかりのある文字なのである。了源は仏光寺を創はじめめたとき、聖徳太子孝養像(現存・重文)を造建している。建武二年の歳の暮に伊賀山中で暗殺されたという。それは彼の活動がいかに精力的なものであったかを示すものであろう。ところで和田源秀は別に賢秀とも記されてあって、むしろこのほうが通りがよいのだが、源秀とあるのに従ったわけである。阿間の了願については、太平記(卷廿一)に、諸国の官軍を数え上げる中に「淡路あはぢには阿間、志宇知しうち」とあって、淡路の住人であることがわかる。(阿間

は安間とも記されている。

和田源秀のほかにもう一人の源秀がいる。それは、有名な結城宗広(ゆづきむねひろ) (一二六六)であって、彼は入道道忠と称しているのだが、源秀とも記されている。晩年に了源を知って、源秀の別号を持つようになったのではなからうか。また彼が北畠顯家(きたはたけあきいえ) (一二三六)に従って再度西上する途中、尾張の熱田(あつた)で五百余騎をひきつれて馳せ加わったのは、大宮司の摂津入道源雄であった。「源」が付くからと云って、すぐ了源にかかわらせるのはどうかと思うが、少くとも阿間の了願・和田源秀はたしかではないか。——その生涯を聖徳太子にみちびかれた親鸞の門流、必ずしも楠・和田の同志ではない。しかし楠・和田の同志の中に、親鸞門流とおぼしき源秀・了願等を見出すことはうれしいことである。

(四三・五・五、端午の節句の日に)

## つつじの記

何回か楠正成父子について書いたが、正成に先立つこと凡そ百有余年、承久(じょうきゅう)の日に

ける正成とも云うべき山田重忠やまだのしげたのことを書きとめて、十回に亘る拙稿の打止めとしたい。ぼくがこの人を心にとめたのは沙石集しゃせきしゅう（無住著一二八三成る）の伝える美しい話によってである。――

尾州びしゅうの山田二郎源重忠というのは、承久の日に後鳥羽院みかたの御方に付いて戦死した人である。武勇にすぐれているだけでなく、心やさしく、民の労苦のわかる、なさけ深い人であった。その所領の中に山寺法師があつて、八重やへのつゝじを持つていた。重忠はそれが欲しくてたまらなかつた。しかし、自分が欲しいように、かの法師とて手離したくないであらう。領主の権力で、情容赦なく取上げるわけにもいかない、と思ひあぐんでいた。そのうちにチャンスが到来した。かの法師に大きな科とががあつて、その科料を徴することになった。重忠は部下に命じて、科料として絹七疋四丈ひきを納めるか、それとも八重のつゝじを出すか、二つに一つの返答をするように下知した。ところがかの法師は、絹を出すという。重忠はがっかりした。主の心を知る部下の者は、「絹をまいらせては猶々なほなほ御不審残ることもや候はんずらん、たゞ、つゝじをまいらせ給へ」と云つた。規定どおりの絹を差出すことは自分の罪科をあからさまに認めたことであり、なお余罪の嫌

疑が残るであらう、つゝじを寄せせと云うのは、万事穩便にすませようとの趣意であらうから、その通りにせよ、と云うことであらうか。そこで法師は力なく、つゝじを掘つて寄こした。

という話なのである。「かのつゝじ今にあり」と著者の無住は書きそえている。彼はこのつゝじを見たにちがいない。実は彼は、重忠が亡母の菩提を弔うために建てた長母寺の住持であつた。

この心美しい重忠は承久の合戦（一一二二）で一番めざましく働いたのであつた。彼ははじめ河内判官藤原秀澄の副将として美濃の洲俣すのまたを守つた。こゝはかつて彼の父泉冠者重満が、源行家ゆきいへ（一一八九）とともに、平重衡しげひら（一一五六）と戦つて討死したところである。

ところで東国勢の猛攻にたまらなくなつた御所方ごしよがたは総崩れになつて退却する中であつて、彼は杭瀬川くひせがはの西岸に踏み止まつて、九十余騎で十余万の敵に相對した。しかしそこで力尽きた彼は退いて瀬田に拠つた。吾妻鏡あづまかがみには「山田次郎重忠独り残り留まりて、伊佐三郎行政いささぶろと相戦ひ、是又逐電ちくでんす。」と云つている。折から大雨であつた。彼は唐笠からかさをささげて指揮をとつた。苦戦の中にあつて平然たる彼の姿が目に見えるようである。瀬田も

破られて彼は京に入り、西山で自決した。実は自決するひまもなく敵兵に攻め寄せられたのだが、嫡子伊豆守重継しげつぐ奮戦して敵を支え、そのひまに彼は自決して果てたのである。重継は負傷して捕えられ、のち殺された。孫の十四歳になる又太郎兼継かねつぐは越後へ流された。重忠の一家一族みな御所方として戦い仆れた。一々は云わないが、重忠のいとこ足助重季すけしげすえの子重成の戦死したことだけを取上げておく。足助というのはほくになつかしい名前だからである。宗良親王の李花集に――

遠江国に侍りし頃三河国より足助重春しげはるしきりに誘ひ侍りしを、なほ思ひ定めぬ由申し  
つかはして

一すぢに思ひさだめぬ八橋やっはしのくもでに身をもなげくころかな

とある。太平記卷三・笠置軍事の中に――

やゝ暫くあつて木戸の上なる櫓やぐらより、矢間の板をひらいて名乗りけるは、三河国住人  
足助次郎重範かたじけな 忝かたじけなくも一天の君にたのまれまいらせてこの城の一の木戸きどを固めたり。前  
陣に進んだる旗は、美濃・尾張の人々の旗と見るは僻目ひがめか云々

とある。この「美濃・尾張の人々」とあるのにほくは胸打たれるのである。承久の日

に彼の父祖山田重忠等といっしょに働いたのは美濃尾張の人々であった。それをいま向こうにまわしているわけである。重範しげのりはのちに六条河原で首をはねられた。李花集の足助重春と太平記の足助重範とは兄弟か、さもなくば、ごく近い血縁のものであろうし、承久の足助重成の子孫であるにちがいない。尾張の山田氏の血縁がお隣りの三河に拡がっていたと思われる。尾州山田は今は名古屋市内となり、足助は愛知県加茂郡にある。

承久合戦の御所方として、重忠のほかにはくになつかしい人がいる。それは八田知尚はつた ともひさである。筑後前司八田知家の子で筑後六郎左衛門尉ちくごろうさえもんじょうと云はれた。親子ともに源実朝みなもとのさねとも(一一九二)に仕えた。「沙石集」に、知家が実朝の上洛を諫止した話がある。知尚は出でて後鳥羽院の西面の侍となり、左衛門尉に任ぜられた。承久の合戦では大井戸の守備にいたが、敗退する御所方の中に彼も加わらざるをえなかった。

「筑後六郎左衛門尉、黒皮威くろかわいの鎧よろいに、赤の母衣はら懸けて、白月毛しろつきげなる馬に乗りて落行きけるを、武田七郎(信隆)、きたなし、余すまじ、とて追懸けたり、六郎左衛門取って返す。御所焼ごしよやきと云ふ聞こゆる太刀を帯びたりけり、御所焼とは、次家・次延に作らせて、君(後鳥羽院)御手づから焼かせ給ひけり。公卿殿上人、北面西面の輩、御気色ごきしよくよきは

どの者は皆給ひて帯びにけり。筑後六郎左衛門尉、都を出でける時、今度佩<sup>は</sup>けと給ひけり。只今其太刀をぞ帯びたりける。武田七郎雙<sup>なら</sup>びたる所を抜き打ちに、馬の首、手綱添へて、ふっと切つてぞ落したる。武田、鎧<sup>あぶみ</sup>を越えてひらりと下り立つ。(承久記)とある。馬の首を切つて落すくらいなら、なぜ武田信隆その人に切りかゝらなかつたのか。馬のほうが切り易かつたということかもしれない。しかし知尚は、かつて鎌倉で同僚であつた信隆<sup>のぶたか</sup>を切るにしのびず、さりとて「きたなし、余すまじ」と、罵<sup>ののし</sup>つて追いつがる相手を振り切つて逃げるわけにもいかず、馬の首を切り落して、「お前もこうなりたいか」と、威嚇<sup>いかく</sup>したということではないであろうか。ぼくは知尚の心のやさしさをここに見てとりたいのである。彼は退いて宇治に抛つたが、そこで戦死した。

(四三・十一・三)

## 純一なるものを求めて

昨夏(昭和四十七年)八月の雲仙での青年学生合宿教室で、ぼくは北畠顕家について話

した。そのときは暗中模索するようなころもとなさがあったが、今度書きついでいる間に大分はつきりしてきた。北畠親房は「神皇正統記」で、「第六十三代冷泉院、この御門みかどより天皇の号を申さず、又宇多より後、諡おくりなを奉らず」と云っている。「天皇の号を申さず」とあるのは、何々天皇と申上げずに御住の名をとって何々院と申上げる、といふことである。又「諡を奉らず」といふのは漢風の諡を奉らぬ、といふことであつて、宇多天皇からさかのぼると、光孝、陽成、清和というように、漢風の諡になつてゐる。あとのほうはいまは論外にするが、前の何々院という呼称は、あきらかに摂関時代になつて天皇というものが、有名無実の存在となつたこととかかわりがある。ところで白河上皇によつて院政がひらかれると、今度は摂関が有名無実になつた。しかし同時に、天皇というものも依然として有名無実であつた。長く院政を聴かれた鳥羽法皇が、崇徳上皇をしりぞけて、まだ三歳の近衛天皇を立てたことなどは、藤原摂関のやつたこととまったく同じである。この無理が保元の乱をひきおこしたのであつた。さて、親房は、「第九十四代花園院」のあと、俄然、「第九十五代第四十九世後醍醐天皇」と記している。第四十九世とは、一系の皇統で云いあらわしているのである。

後醍醐天皇が花園院のあとをうけて即位せられたとき、御歳はすでに三十一であった。にもかかわらず、例によって父帝後宇多院が院政を執られた。下には型の如く閑白が存続している。その上に、持明院統と大覚寺統との皇位の更迭は鎌倉幕府の一存にかかっている。このような多年の朝政のゆがみをば後醍醐天皇は思いきって肅正しようと決意せられた。まづ院政が停められた。「始めつ方は後宇多院の御政なりしを、中二年計有りてぞ譲り申させ給ひし。」と親房は云っている。後宇多院がおかくれになると、持明院方では皇位更迭のチャンスとばかり、幕府にはたらしきかける。討幕の企て有りとして、天皇の側近日野資朝、俊基はとらえられた。元弘の隠岐での日々を経て、鎌倉幕府倒れた日に、天皇は都に還御、いわゆる建武中興の日をむかえた。しかし間もなく足利高氏叛して光明天皇を立て、後醍醐天皇は吉野に入らせられて、これより凡そ六十年間の南北朝抗争の世となった。ここで注意しなければならぬことがある。楠、菊池、名和氏などの目ざしたものは、北朝あるいは足利氏を倒して、我が世の春にしたい、ということではなかった。そういうことから、あの無償の生と死は出てきはしない。皇位継承に始めて幕府の介入を許したのは執権北条時宗（二二五—二二八四）のときであった。そのことあ

て間もなく、かの弘安元寇の国難があった。皇統が分裂し、ひいては国家が分裂して、どうして外敵に当ることができよう。楠氏等の無償の生と死は、国民を一つにならしめる、純一なるものにさゝげられた。最後の血の一滴まで、ささげ尽くされた。

ところで、南北朝六十年は、いわゆる「和寇」の活動した時期でもあった。それは、いわば尊王攘夷の動きであり、国民国家形成への志向であった。「和寇」を押し出したものは元寇の消えがたい記憶であったにちがいない。元にとってかわったばかりの明が、「和寇」の取り締りを訴えたのは、実に西征將軍宮懷良親王に対してであった。征西將軍宮を奉じた菊池氏が独力、抗戦して屈しなかったのは「和寇」の後援があったことをうかがわしめる。南北朝の偽似合一に成功した足利義満は、明に低頭し、「和寇」を弾圧した。

(四六・一・九記)

## 楠氏のこと

楠正成の出自は依然として不明だとされている。しかし仮説としてなら思いつきやす

いことである。当時の武将の姓はその出身地の名に負うているのがふつうであるから（新田、足利、名和、結城、菊池など）、楠も地名である、ときめてかかってよい。そして楠の地名を探すと播磨国赤穂郡赤松村の字に楠というのが見出される。ここが楠氏の出身地だと考えてさしつかえない。もと赤松氏に属して、のちに河内に移ったのであろう。赤松則祐は護良親王の手足となつてはたらいた人であり、その父則村（円心）は正成が北条の大軍を千早城下にひきつけている間に、京都六波羅を攻めた。楠氏と赤松氏とは氣脈を通じていたことうたがない。正成が最初赤坂城に拠つて拳兵したとき、これに呼応して起つた備後の桜山四郎入道というのは、やはり播磨から出た、楠氏の支族ではなからうか。楠の北方に桜山というところがある。

正成が最初に拠つた赤坂城はにわかごしらえの城であつた。敵は熊手にひっかけてその堀を引き倒そうとした。すると「城の中より柄の一二丈長き杓に、熱湯の沸きかへりたるを酌んでかけたりける間、甲の天辺、綿がみのはづれより、熱湯身にとほつて、焼けただれければ、寄手こらへかねて、榎も熊手も打捨てて、ぱつと引きける見苦しき、矢庭に死ぬるまでこそなけれども、或は手足を焼かれて立ちもあがらず、或は五体を損

じて病み臥する者、二三百人に及べり。」という。この「熱湯」というのが水を沸かしたそれにしては被害がひどすぎる。これは鉄湯にちがいない。河内は大和とならんで、当時鑄物の本場であった。(河内鍛は広く知られていた。)今日でもそのなごりはある。鑄物師は諸国を遍歴して鍋釜や農具の販売修理に従ったのであるから、正成は彼等を通じて、天下の情勢をキャッチしていたかと察せられる。

正成の三子すなわち正行・正時・正儀の名は太子憲法に、「天覆ひ地載せて、四時順行し、万氣通ふことを得。」とあるのによつたのではないか。正行、正時は説明を要しないが、正儀はどうか。「天覆地載」がすなわち儀であろう。渾天儀とか地球儀とかいう儀である。正成の幼名を多聞と云つたのは、その母が志貴の毘沙門に百日詣でて、夢想を感じて設けた子だからだ、と太平記にある。毘沙門を意識すれば多聞である。この伝説を信ずるくらいなら、聖徳太子の御幼名「豊聰耳」にあやかつたと考えるほうがましであろう。いうまでもなく豊聰耳は多聞ということである。

正成の出自が不明である、ということはその出自が卑賤である、ということにほかならない。名和長年について太平記は、「あやしき民なれど」とか「さしも勇める夷心に

も」とか云っている。正成も長年とおなじく「あやしき民」であったと思われる。吉野朝廷を支えて始終かわること無かったのは、ほとんどが「あやしき民」であった。明治維新の捨て石となったのもやはりそうであった。

(四六・五・二八)

## 神魂神社のこと

竹山道雄先生の著書「日本人と美」で、実にすばらしいものの存在を教えられた。それは、松江市大庭町にあるという神魂神社（祭神イザナミノミコト）である。先生は次のように云っている。――

松江の神魂神社こそは、その純粋性において世界に比類のないものである。私は十年前までは、このようなものがあることを知らなかった。今でも多くの人が知らないし、名も聞いたことがないであろう。私が見たものの範囲は狭いが、これは、その中で至醇なるもの一つである。このような世に知られない美しいものが、この日本の山野のあなたこなた、まだたくさん埋まっているのであろう。



神魂神社

この神社の美しさは、直接目で見て感ずるほかはない。写真では再現できないだろう、その微妙な線の組み合せの気高さや、軽やかな重さなどは、どの写真にも出てはいない。……この神社からは、潜勢する精気のようなものが発散しているのだが写真はそれを捉えることはできないだろう。

所詮、われわれは精神の秘奥を叙述しつくすことはできない。たと感じ、感じさせることができるだけである。――

先生の文をよみながら、ぼくは思わず居すまいを正した。ところがぼくの感激をさらに高める文字が目映ってきた。

現在の大社造りの神社では、この神社がいちばん古く、いちばん美しい。昭和二十三年の修理の際に、神魂神社の支柱の上方に、「正平元年丙戌十二月」の墨書が発見され、南北朝時代のものであることがわかった。しかし天正十一年に炎上したという記録がありその時に部分的な変化が加えられたかもしれない。――

天正の炎上が全面的なものであれば、支柱の墨書は残されるはずはないから、それは部分的のものであったにちがいない。ぼくが感銘に堪えないのは、「正平元年」という、南朝の年号の用いられていることである。北朝は貞和二年である。ちょうど楠正行の起ち上がった時分である。たとえ人目につかぬところにせよ、南朝の年号を記しているのは、時勢にゆるがぬ純粹性のしるしである。

(四六・九・二四)

## 竹葉記

東京銀座に竹葉亭ちくようていという弁当屋があるが竹葉ちくようというのは、もと酒の異名で、やがて弁当べんたうということになったそうである。それは、弁当には酒がつきものだったからであろう

か。ぼくが竹葉の語が酒あるいは弁当のことだと知ったのは太平記によってである。それは、四条畷なむての合戦の合間に、楠正行主従が腹ごしらえをするところに出ている。――

この時和田・楠が勢百騎討たれて、馬に矢の三筋四筋射立てられぬは無かりければ、馬を踏み放して徒立ちだちになつて、とある田の畔くろに後うしろを差当てて、えびらに差したる竹葉を取り出して、心閑しづかに兵糧つかひ、機（氣）を助けてぞ並み居たる。――

とある。腹が空へつては戦はできぬ。とはきいているが、敵の包囲の中にあつて、腹ごしらえをした。というのは、ほかで聞いたことがない。ところで、こゝの「竹葉」は弁当というのでは落ちつかぬ。竹筒（ささえ）に容れてある酒のことではなければならぬ。

まず酒を酌みかわして、それから兵糧をつかつたのである。正行主従にとつて、それは、いわば最後の饗宴であつたのだ。それだからこそ、このありさまを見た足利勢は――

これほどに思・ひ切・つた・る敵を取り籠こめて討たんとせば、御方みかたの兵若干亡びぬべし。ただ後うしろをあけて、落・ちば落・とせ、とて数万騎の兵、皆一処に打ち寄つて取り巻でく体をば見せざりけり。――

ということになつたのである。しかし正行は、相手の開あけてくれた退路をもうけの幸

いとはしなかつた。「和田も楠も諸共に一足も後へは退かず」決戦をいどんで、ついに一族郎党みな討死を遂げた。正成の場合もそうであった。――

其勢（楠方の軍勢）次第に滅びて、後は僅かに七十三騎にぞ成りにける。此勢にても、打破つて落ちは落つべかりけるを、楠、京を出でしより、世の中の事、今は是迄と思ふ所存ありければ、一足も引かず戦つて、機（氣）已に疲れければ

ということ、ついに一族郎党そろつて自決したのである。楠父子のえらんだ死は、その生が何にささげられたかを実証する。「世の中の事」において勝利を収めた相手は、仲間割れをして殺し合いをはじめた。高師直・師泰兄弟は足利直義のために殺される。その直義は兄の高氏のために毒殺される。高氏が癱で死んだのは、延文三年（一三五八）四月二十九日だが、その年の二月十二日に、直義に従二位が追贈された。直義が死んでから六年も経っている。すでに身体の変調を感じて懊悩していたであろう高氏が、罪ほろぼしのために取計らったことにちがいない。彼等の、このようなみじめな死は、自己の生をささぐべき何ものもなかったことを証明している。

さて、正行主従の最期に、その喉を潤おした竹葉は、天野酒であったと考えられる。

天野酒というのは、金剛山下の天野の金剛寺で造られる酒である。金剛寺は、後村上天皇の行宮になったことがあり、正成からおくられた書状（重文）を伝えている。天野酒が「天野酒比類なし」とか、「美酒、言語に絶す」とかうたわれたのは、室町中期以降のことだが、正成・正行の時分にすでに造られていた。ぼくは金剛寺には二度参っている。その境内に丹生明神祠があったと記憶している。お隣りの紀伊・伊都郡天野に鎮座する丹生都比売神社（旧官幣大社）を勧請したのであろう。また天野の名もこの紀伊天野に由るのではないか。丹生は、このほか、大和吉野郡の丹生河上三社、北畠氏の根拠地伊勢多気郡の丹生社がある。

ところで天野酒はもと、丹生明神の神酒として造られたのであろう。そしてそれが天下一の名酒になったについては、楠氏の直接間接の関与があったと思われるのではない。

（四六・一〇・一記）

追記 新葉和歌集を見たら――

年中行事の歌の中に献醴酒といふことをよませ給うける

後村上院

いかにして一夜ばかりの竹の葉にみきといふ名を残しそめけむ

とあるのが目についた。醴酒は甘酒のことで一夜酒ともいうのだそうである。一夜は一節の意を兼ねて、竹の縁語になっている。

## 夢殿觀音記

延元々々年（一三三六）十月に足利高氏のために京都花山院に幽閉せられた後醍醐天皇は、大江景繁にみちびかれて、夜中ひそかに花山院を脱出、辛うじて大和賀名生あなうに落ちつかれた。そしてやがて吉野に入られた。この事について神皇正統記は――

同じき十二月しはすに、しのびて都を出でましまして、河内国かみのくにに正成しんせいといひしが一族を召しよぐして芳野よしのに入らせ給ひぬ。

と云っている。この「正成といひしが一族を召し具して」といふのは太平記には見えぬ胸うたれる事である。むろん正成はこの年の四月に戦死しているのであるから、このときの楠氏一族の中心はまだ幼い正行である。太平記は、しかしながら、この事に劣らぬ、ありがたい事実を伝えている。後醍醐天皇崩御せられるや、吉野朝廷の失望動搖は

甚しかった。そのとき、たてわき帶刀正行は、二千余騎をひきいて馳はせ参り、皇居を守護して、人々をホッとさせたのであった。正行が父正成に死なれたとき十一歳というのを信ずれば、この時正行は十四歳である。吉野朝廷と楠氏とは形影相伴うものであった。

正行討死のすぐあと、勝ちに乗じて高師直こうのもろなほは吉野を攻めて、行宮を炎上せしめ、弟の師泰もろやすは河内に攻め入って楠氏を窮迫し、そのついでに太子御廟を侵した。

法隆寺関係記録である「嘉元記」かげんきに――



法隆寺東院夢殿

貞和四年（正平三年、一三四八）正月五日、河内国合戦、樟木たてわき殿打たれ了ぬ。  
ぬ。

同正月九日 别当覚懐、武家当寺に入寺有るの由、内々その聞こえあるの旨仰せ下され了ぬ。

とある。右の記事で、正行戦死のすぐあと、高師直の軍勢が法隆寺にやってくるというわさのあったことがわかる。なおつゞいて――

同 正月十二日、河内国太子御廟、武家打ち入り、坊中在家悉く焼失せしめ了ぬ。塔堂伽藍少々残る。御廟の内違乱無し。御影堂に乱入して、御衣はぎ取り了ぬ。御手足少々破損すと云々。

同 正月廿八日午時、吉野蔵王堂並びに御塔焼失し了ぬ。執事武蔵守（師直）発向の故なり。

とある。師直の軍勢が法隆寺にやってくるといううわさがあって間もなく、師直の弟師泰によって河内の聖徳太子御廟に火がつけられ、太子御影（尊像）に乱暴が加えられた。太子造営の斑鳩宮が蘇我入鹿に焼かれてこのかた絶えてなかった、そしてまたこの



夢殿救世観音

たのはこの時のことではないか。高村光太郎先生は――

救世観音が生きているとか言葉を発するとか言われたのは無理のないことで、実に恐ろしく見えたので、秘仏にするほかに、ぐるぐる、布に巻いてミイラのように箱にしまったのだと思います。

と云っている（「日本の美」）。高村先生のこのみ仏に寄せる深い畏敬の念には感動するのだが、この説には服しがたい。ほんとうに恐ろしいのならば、生けるみ仏を窒息さ

後にもなかった不祥事である。その斑鳩址に、行信ぎょうしんによって造立せられた法隆寺東院、いわゆる夢殿の本尊が綿布で十重二十重に、いやそれ以上に嚴重に包まれ

せるようなむごい仕打はそれこそ恐ろしくてできるわけがない。それをあえてしたのは、それだけ重大な事情がなければならぬ、その重大な事情として考えられるのは、河内太子廟の侵されたこのとき以外にはない。

嘉元記によると―和泉国南北庄の高石新左衛門なるものが、聖徳太子以来の法隆寺領である播磨国いかるが鶴庄に入りこみ、そこを押領した。ところが、そこから上洛してわが家に帰ったその夜、敵方が夜討ちをかけて、たちまち高石は討たれてしまった。嘉元記は「不思議の事なり」と注記している。この「東条」は、距離的に見て、播磨東条ではなくて、楠氏の拠点・河内東条（現・河内長野）であろう。してみると「敵方」とあるのは、楠氏のことにはちがいない。正行戦死の前年の十一月廿一日のことである。嘉元記が楠氏の名を出さずに、高石の敵方と呼び、この出来事を「不思議の事なり」と云うだけで、楠氏に対してそっぽを向いているのは、それこそ不思議の事である。それだけに楠氏の無償の行為は感歎するほかはない。

ところで夢殿観音が布でぐる／＼巻きになったのは、河内太子廟におけると同じような暴行をおそれ、その対策としてなされたことではないか、と一往思われるが、それ

だけのことなら、その危惧の去ったあと、すぐ、かのいましめは解かれるはずである。天平の日に、入鹿のために焼かれたまま、むざんな廃墟となっていた斑鳩宮の址に立つて「流涕感歎」して、夢殿を造建した行信の遠い遺弟の中に、正行亡きあと、いやまさる蛮族の暴行に憤激して流涕感歎しつつ、このみ仏を虚假の世間から永く隠してしまつた、いわば第二の行信がいたのではないか。文永十一年（一二七四）に、中宮寺の如信によしん尼は夢想によって法隆寺封綱藏（宝藏）中に、ぼろ／＼になった、かの天寿国曼陀羅繡帳ちようちやうを発見した、という。云うまでもないことだが、この繡帳に、世間虚假・唯仏是真という、聖徳太子の御遺言が織り出されているのである。第二の行信も夢想によつたのかもしれない。

後醍醐天皇宸筆の「四天王寺縁起」（国宝）がある。これは聖徳太子の御真筆と伝えられる原本（根本本）を、天皇が筆写せられたものである。原本は、しかしながら、寛弘四年（一〇〇七）にそれが発見される少し前に作成された、と云われるが、天皇は太子の御真筆と信じて心こめて筆写せられたと察せられる。それは、足利高氏が天皇に叛そむく直前の、建武二年五月八日から十日間かかって、その十八日に成つた。そのことは天

皇おん自ら注記せられているところである。楠氏の、聖徳太子思慕の心は天皇のみ心を心とするものであった。天皇崩御の日に法隆寺は弔問使を吉野におくっている。彼等はそこで、まだ幼いしかしながら凜々しい正行の姿に接したはずである。それから八年あまり、正行の戦死と、そのすぐあとの師直兄弟の乱暴とは、法隆寺に一大ショックを与えたにちがいない。夢殿観音が岩戸隠れしたのはこの時だと考えてけっして無理ではあるまい。

(四六・一一・一一)

## 七 生 滅 賊

——「看聞御記」から——

「かんもんぎよき看聞御記」と云ふのはごすこういん後崇光院(一三七二)の日記である。院は北朝系の第一〇二代ご後花園天皇の父君である。この日記の中の、楠氏にかかはる記事は、歴史年表にも載せられてゐて、せんごく先刻知られてゐることだが、年表の摘録ではすまされぬものがあると思ふので、あらためてその原文を取り上げて、感想を述べてみたい。——

永享元年(一四二九)九月

十八日。雨下る。楠木、召捕られて上洛。この間、南都に忍び居る。これ室町殿御下向を伺ひ申さんためと云々。筒井拵め取る。高名なり。天下のために珍重。——

六代將軍足利義教が春日詣でのために南都に下向するのをねらってゐたといふので、楠光正なるものが捕縛されて上洛した、といふのである。院はこのことを「珍重」と云つて、よろこんでゐるのである。——

同十四日。先日召捕へらるる楠木、今夕六条河原にて首を刎ねらる。侍所（赤松）所司代六・七百人取囲んで之を斬る。其の体、尋常に斬らる。先づ硯紙を召し頌を作る。幸哉。依小虚詐。成大謀高誉。珍重々々。

不来不去撰真空。万物乾坤皆一同。即是甚深無二法。秋霜三尺斬西風。

なが月やすゑ野の原の草のうへに身のよそならで消ゆる露かな  
我のみか誰が秋の世もすゑの露もとのしづくのかかるためしぞ  
夢のうちにみやこの秋の果ては見つところは西に有り明けの月

永享元・九月廿三日 楠木五郎左衛門尉光正

常泉

見物人河原に充滿。南都より御使立つて、急ぎ之を斬るべきの由仰せらる。其の形、

僧なり。頌歌等、天下の美談なり。楠木の首、四塚に懸けらると云々。

頌歌の端書はしかきの文句は「幸ひなるかな。小人のでっちあげで、將軍家をねらったという大謀のほまれを成した。けっこうなことだ。」といふことであらうか。ところで、光正の歌は、楠氏一族の歌として確實なものであり、しかも三首の連作であることがありがたいことである。太平記は正行の「かへらじと」の歌を伝へてゐるが、正行の自作かどうかは断定できない。後崇光院は、光正のとらへられたことを、「天下のため珍重」と云ひ、彼の頌歌を「天下の美談」と云つてゐる。武力的には取るに足らぬ楠氏の生と死とが「天下」の関心に価してゐたのである。光正ひとりを斬るのに六・七百人もの武士が彼を取り囲んだこと、その見物人が六条河原に充満したこと、それは楠氏の不可測の影響を示すものにほかならない。

「看聞御記」にはもう一回楠氏のことが出てゐる。――

永享九年（一四三七）八月

三日。楠氏兄弟討たる。……朝敵悉く滅亡。天下大慶珍重至極。

八月一日から三日までは、憑（たのも）の祝ひがあつて、朝廷・幕府間や諸家の間に

進物の贈答がある。その贈答の記事の中に、右に摘記せる楠氏討死の記事が見出されるのである。おめでたい時におめでたい事が重なって「天下大慶珍重至極」といふわけである。

五日。行豊、持経等朝臣、重仲候す。廻囲碁を打つ。予懸物兩種を出す。……聊か盃酌あり。さて楠氏の首上洛、河原に十一懸けらると。

院は賞品を出して近臣と碁を打ち、そのあと一杯やった。その酒席で楠氏の首の話が出たのである。光正ひとりでも「天下のため珍重」と云った院である。今度は十一人である。さぞかし院のよろこびのほどが察せられる。その晩の酒は格別うまかったであらう。しかし院のよろこびの大きさはそのまま楠氏への恐れの大きさにほかならぬ。楠氏の何をおそれたのか。それは云ふまでもないことである。

「御記」の永享八年九月十・十六・廿六日の記事によると、内裏に差し上げるために太平記を書写させた、とある。廿六日の分だけ引いておく。――

太平記廿九帖、内裏に先づ調進、残分書写未だ出来せず。

この「残分」がどうなったのか、それに関する記事はない。院が進んで太平記を主上

に調進するとは考へられない。おそらく主上から所望されて、やむをえず書写させたのであらう。「残分」がどうなったのか不明なのは院の氣乗薄うすをあらはしてゐるのではないか。

さて、南朝最後の天子後亀山院の亡くなられたのは応永三十一年（一四二四）四月十二日（御年七十二）であつた。ところが後崇光院は何も云つてゐない。何か感想があるとするれば、「天下のため珍重」と云ふことであらうが、さすがに遠慮して口を緘したのであらう。十二日の夜はものすごい雷雨があつた。後崇光院は「恐怖肝きまを消す」と云つてゐるが、その恐怖は雷雨のためだけではないであらう。ところで「御記」に後亀山院に関する記事が一度だけある。それはさかのぼつて応永二十三年九月十六日の条である。――

椎野入来、語つて云ふ、南朝法皇、此間吉野郡より出御、御行粧かいつくを刷ろひ、大覚寺に還御かんぎよ、御座有り。室町殿より御領等本復申ほんぶくすべく沙汰し、還御有るべきの由再三申さるの間還御と云々。此五六年御困窮と号されて吉野へ御出奔。よつて世上物言有るの間、管領沙汰かんりよう申し、御和睦有りと云々。

後龜山院が吉野に御座あることは幕府にとって不安のタネであった。京都にお迎へすることははいはばてい体のよい人質であった。院が京都に止まってゐるかぎり、さすがの楠氏も鳴りをしづめるほかはなかつた。逆に、幕府にしても楠氏を追窮することはさしひかへねばならない。光正の捕へられたのが後龜山院の亡くなられたあとのことであるのは、そのやうな事情を示してゐる。その証拠には、幕府が伊勢の北畠みつまさ満雅と和睦したのは、幕府が後龜山院と和睦して院を京都に迎へた年の前年であり、その満雅を討伐したのは、院の亡くなられたあとのことであり、光正を斬つた年の前年のことなのである。

以上、「看聞御記」から楠氏関係の記事を取り出して、それにそばくの感想をつけ加へた。むろん、これで楠氏が根絶したのではない。楠氏を根絶することは不可能であった。楠氏の死は生の使者である。楠氏を斬ることは、その七生滅賊の生の実存を証明することにほかならない。

永享の日のあと楠氏にかかはる事件を一つだけ、歴史年表から取り出してみよう。寛正元年（一四六〇）三月の項に――

幕府、楠木一族を斬る。

とある。これは「碧山日録」(建仁寺の太極正易の日記)に拠ったのであらう。「碧山日録」には左のごとくある。――

二十八日乙巳。……南朝將軍の孫楠木某、その党とひそかに謀反。既に事発はる。遂に囚虜に遭ひ、大理(檢非違使所司代)に下る。この日六条河上にて、吏その頭を刎ぬ。日録曰く、楠木氏、往昔天下兵馬の權を領し、人頭を斬ること幾万級なるを知らず。強半(大半は)無辜の民を戮殺す。潰亡の後、その遺ゲツ(子孫)の、官に獲はるる者、みな刑官の手に死す。これ積惡の報いなり。悲しむべし。――

実に冷酷無慚の評言である。これは昔日だけのことではない。三島由紀夫氏とその同志の憤死にも、これに似たやうな冷評が浴びせられた。しかしそれらは犬の遠吠えではない。

(四七・三・二〇)

## 国史の地熱 (未発表遺稿)

足利義満(一三五八―一四〇八)は、足利幕府を幕府的存在にとどめることで満足しなかった。南北

朝合体を企て、その上に立って自己の權威を絶対化しようとした。——延元元年（一三三六年）十二月に、海路遠江に赴いた宗良親王は多年の苦心經營空しく、東国の地を去って河内山田を経て吉野に落ち着き、やがてそこで薨ぜられた。それは元中二年（一三八五年）のことである。義満が將軍職に就いてすでに十余年経っていた。また宗良親王の御弟懷良親王がその五十余年の苦闘の生涯を筑紫矢部で終わられたのはその少し前の弘和三年（一三八三年）のことである。懷良親王は後村上天皇の皇子良成親王を後嗣にむかえて官軍の振起を計られたが見るべき効果はなかった。九州探題今川了俊（二三三—二四三〇）の手が延びて官軍の勢力は縮小するばかりであった。

楠正行の弟正儀は正平廿四年（一三六九年）正月に幕府に降った。それは、その前年三月に後村上天皇が崩ぜられて、心の支えを失ったためでもあろうし、また南朝にいくらか有利な条件ならそれを吞もうというつもりもあったであらう。そこに正成・正行以来の同志の間に同志討ちがひきおこされたのは悲しむべきことである。ところが結局正儀は同志のもとに戻ってきた。それは弘和二年（一三八二年）正月である。そのすぐあと、閏正月に彼は河内国平尾（美原村）で、和泉の守護山名氏清と戦って敗れ、一族六

人、家の子四十人を失ない、赤坂にひきこもるほかなかった。——楠氏とともに吉野を支えていた北畠氏の拠点は伊勢西部の多氣たきにあった。そのころの北畠氏の当主は顕能あきよし（親房の子、顕家の弟）である。正平十五年（一三六〇年）七月に伊勢伊賀の守護仁木にぎ義良よしなりの南朝帰順があった。幕府に不満があると南朝帰順のジェスチャーを示して相手の差し延べる手を待つというのが有力武将の常套手段であった。顕能はこのチャンスに伊勢南部及び伊賀に進出したが、彼は懐良親王の薨ひなぜられた同年、弘和三年に歿してしまった。

吉野では正平廿三年（一三六八年）に後村上天皇が崩ゆたぜられ、皇子寛成親王が皇位に即いた（長慶天皇）。一旦幕府に降った楠正儀が、淡路の細川氏春うぢはる、摂津の赤松光範等に援けられて河内天野の行宮を攻めたのは、天皇の文中二年（一三七三年）のことで、天皇はその年八月に天野から吉野へ移られた。天皇は弘和三年（前出）に皇位を皇弟熙ひろ成親王に譲った。南朝最後の天子後亀山天皇である。

前記したように、義満は朝廷を完全に自分のふところに抱き込もうとした。そのために神器不在の北朝に南朝を接木してその正統性を確かなものにしようとした。かつて足

利高氏は西走の途中、賊軍たることの決定的な不利を覺つて光嚴院こうごんいんの院宣いんせんを申し受け、九州から捲土重来して京都に入ったときに、院の皇子（光明天皇）を擁立して王朝を分裂させた。その分裂させたものを、いま自分の都合のよいような形で一つにしようとするのである。高氏のために光嚴院の院宣をとりもつたのは日野資名すけなである。それで日野氏と足利氏とは緊密の間柄になった。義満の前妻は日野業子であり、後妻の康子は業子の姪である。八代義政夫人はあまりにも有名な日野富子である。義政の母は日野重子であり、富子はその甥の重政の女むすめなのである。日野資名の取りもちが足利に、いかにありがたいものだったかがわかる。

南北朝合体の条件は左のごときものである。

- 一、後亀山天皇は讓国の儀を以て神器を後小松天皇に渡す。
- 一、今後皇位は南朝・北朝すなわち大覚寺統・持明院統が交互に即く。
- 一、諸国の国衙領がは大覚寺統の、長講堂領は持明院統の支配とする。

明德三年（一三九二年）十二月二十八日、後亀山天皇は吉野を御発足、閏十月二日に洛西嵯峨の大覚寺に入られた。この時供奉ぐぼせるもの、廷臣十七名、伯耆党ほうぎ（名和長年の

縁累）六名、楠党七名、和泉の和田某、大和宇陀郡の住人秋山・井谷、都合十六名の武士、そのほか十名にすぎなかった。——ところで合体の条件はほとんど履行されなかった。後亀山上皇が京都を脱れ出て吉野に潜入せられたのは応永十七年（一四一〇年）である。義満はその二年前に死んだ。同十八年に後小松天皇の皇子躬仁（実仁）親王が皇太子になった（称光天皇）。斯くなることを見通して、後亀山院は京を出られたのである。院の京都退去は旧南朝方の叛乱をひきおこした。姉小路尹綱・伊達宗村は兵を東国に挙げた。とくに伊勢の北畠満雅（顕能の孫）の抵抗は手ごわかった。彼は皇位継承の違約を責めたのである。一色義貫は満雅の拠る阿坂城を攻めて攻めあぐんだ。將軍義持は後村上天皇の皇子説成親王を介して、この次は必ず大覚寺統の皇子を皇太子に立てることを条件に、後亀山上皇の京都還幸を乞うた。ところが幕府は再び約に背いて、持明院統の伏見宮彦仁親王を即位せしめた（後花園天皇）。後亀山院の皇子小倉宮恒敦（良泰）親王は伊勢へ走って、北畠満雅にたよった。満雅は中津川の合戦に土岐持頼のために討ち取られた。正長元年（一四二八年）十二月廿一日のことである。この五年のちに説成親王の王子相応院宮は幕府のために殺害せられた。

旧南朝方の叛乱は跡を絶たなかった。ついに嘉吉三年（一四四三年）に一大事が出来た。この年の九月廿三夜、後鳥羽院の皇胤を称する源尊秀等は南朝の皇胤万寿寺院宮を奉じて皇居に潜入し、後花園天皇を殺害し奉ろうとして成らず、神璽しんじ神剣を奪取して逃走した。神剣はすぐに奪還された（禁闕きんけつの変と云われる）。翌文安元年七月には、説成親王の王子円満院宮は紀伊北山に兵を起こしたが、四年十二月に紀伊の守護畠山持国もちくにのために討ちとられた。神璽が赤松氏家人によって奪還されたのは、長祿元年（一四五七年）十二月二日である。赤松満祐あかまつみつすけが將軍義教よしのりを殺した（一四四一年、嘉吉の変）ため断絶した。主家の再興話を持ちかけるための、此上ない手土産であった。

南北朝合体の衝に当ったのは大内義弘おほうちよひろである。その事成った日に、義満は義弘を優遇して感謝の意を表するどころか、かえって彼に冷たく当った。義満が合体の条件を無視したことを、義弘がこころよしとしなかったためであろう。それは義満が義弘を討つ日に、後村上天皇の皇子師成親王もろなりをはじめ、橋本、菊池など旧南朝方が義弘の側に付いたことで察せられるのである。義弘の抛る堺城が義満のひきいる二万三千の大軍の攻撃を受けたのは応永六年（一三九九年）十一月廿九日で、十二月廿一日に堺城が陥ちて義弘

は戦死した（応永の乱）。——義弘の父弘世はかつて南朝方を称して周防を略取し、長門を侵して、守護の厚東義武を圧迫したが、貞治二年（一三六三年）春、にわか幕府に降り、周防・長門の守護に任ぜられた。長門の守護であった厚東氏は南朝に走った。弘世は九州探題斯波氏経の救援を命ぜられ、豊後に出向いたが菊池に敗れた。彼は幕府に降ったといっても完全にその支配下に入ったわけではなく、南朝方と戦うのも幕府への義理立ての程度を出なかつたようだ。この立場は義弘にも受け継がれたと思われる。幕府にベッタリくっついていたのでは南朝方で相手にしないだろうし、幕府から離れていたのでは足利がウンとは云わないであろう。この立場が義弘を南北合体の幹旋役たらしめると同時に、その事成つた日には、かえって彼をじゃま者にさせたと思われる。義満が二万三千の大軍をもって義弘を押しつぶしたのは、実は義弘の尽力で出来た南北合体のおかげではないか。今までだったら義弘は南朝に降って、足利と互格かくの立場に立ちえた。南朝なきいま、彼は孤立するほかなかつた。義満自身そのことを見ぬいていたにちがいない。

途中飛ばして応仁の乱に移る。この乱は一四六七年に始まる。そのくわしいいきさつ

を述べるつもりはない。つまりは將軍義政よしまさ、細川勝元の東軍と、義政の弟義視よしみ、山名持豊よしまさ（宗全）の西軍との争闘が十年あまりつづいたのである。東軍は將軍義政がいる以上、必然的に天皇（後土御門）を上うへに戴くことになる。これに対抗するために、西軍は小倉宮くわらみや（前出）の王孫を奉載した。その王孫が紀伊で策動しはじめたところを、持豊が迎えたのである。西陣の南帝と云われる。南北合体後七十年にして、南北対立が再現した形である。ある史家（水原慶二氏）は、「東軍が天皇と義政を奉ずるのに対して、西軍が小倉宮と義視をいただき、双方ともに名分をととのえる形となった。このような古めかしい形式が心理的な効果を与えるのは、おそらく公家・社寺や、せいぜい守護大名クラスの古い考え方もつ上層の人々だけであろう。」と云っている。しかし事實は逆である。美濃の守護、土岐頼遠とよとほは光厳院の御幸の御車に向って「なに、院と云うか、犬というか云云」と放言した。また社寺が小倉宮の出現によって「心理的効果」を与えられるとは考えられない。その「心理的効果」は別のところに求められねばならぬ。史家はなぜ「古めかしい」ものをばかにするのであるうか。それならば古いことを研究する史家をやめて、競馬か競輪の予想屋になるがよい。応仁の乱の時分に天皇をいただき、皇孫を奉ず

ることが「古めかしい」のなら、江戸幕府末期の尊王あるいは勤王の運動をどのよう  
に理解するのか。それはそれで、こざかしい理屈はつけるだろうが、要するに結論がは  
じめにあっての解釈にはかならない。天皇あるいは皇胤をいたたく、というのは、大義名  
分を求めるのである。党派あるいは私心を超えるものを要請するのである。それは、つ  
まりは党派や私心のカムフラージにすぎないかもしれない。しかしカムフラージするに  
は、それだけの意味がなければならぬ。——応仁の乱のあと、いわゆる「下剋上」の風  
潮は高まるばかりであった。この「下剋上」とは、一般人民が途中の権力を排して皇室  
に接近する過程であった。その行きついたところに、尾張の水呑百姓のせがれ豊臣秀吉  
の聚楽第の盛儀があった。

(昭和四十四年八月稿) (編者註・未発表原稿)

## 附 白鷺の記

白鷺城しらさぎの異名のある姫路城ひめぢは城郭でありながら、そこに法隆寺に似通った、高貴な美  
しさがある。天守閣だけ取ってみても、三基の小天守と大天守とのアンシンメリカルな



姫路城

取り合わせの妙。三基の小天守と大天守とを結ぶ渡櫓わたりやぐらの中庭に面した側部の見事さ。そして何よりも白鷺の名がそれに負うている、あの白堊はくあの総塗籠——それは本来は防火を目的としたものだそうだが——の清爽感。

のそれを思わせるものがある、と云ったが、それ以上に、案外法隆寺の直接の影響もあるかもしれない。というのは、この天守閣の着工は慶長六年（一六〇一）であり、その完成は同十四年だそうだが、それとほぼ平行して、慶長五年から同十一年にかけて、法隆寺創建以来はじめての大修理があったことが考え合わされるからである。この修理は、徳川家康とくがはいへやす（一五九二—一六五六）の強制によって、豊臣秀頼とよとみひでより（一五九三—一六五五）が片桐且元かたぎりかつもと（一五五六—一六二五）を奉行として

施工したものである。専門家に云わせると、あまり良心的な仕事ではなかったらしい。それでも、この千古の名作から、関係者は、あらためて多くのものを教えられたにちがいない。それが、姫路城造築に反映するところ全くなかったとは思われない。

姫路城を名城たらしめたのは、むろんこの城と前後してできた熊本城・名古屋城などを造り出した慶長期の築城技術そのものの発達に由るものあるのは云うまでもない。しかもほかの城とちがったものが、この城にある。たとえば家康の造った伏見城について、藤岡通夫先生は云う、「天守の整備された形態は一分の隙もないが、あまりに理智的な冷やかさと硬さがあり、姫路城のような温雅な気分は到底見られない。」（伏見城には）あたかも爪をかくす猫のような用意周到な鋭さがある。それは、家康の個性を反映したと考えるべきか、また時代の当然の推移と云うべきか。」と。

この城にあってはほかの城にないもの——法隆寺を思わせるような——とは何か、それは高貴性であり、清楚せいそな美しさでありい・か・め・し・く・な・い・威・厳・である。それはどこから来たのか、それについて直接に法隆寺の影響もあるかもしれない、とさっき云ったのである。しかし影響というのは物理的現象ではない、それは影響される主体をぬきにしてはあり

えぬことである。姫路城を造ったのは池田輝政(一五六四)である。彼の二度目の妻は家康女であり、関ヶ原合戦に功があったということで、三州吉田から姫路に移封され、かつて秀吉の築いた城を全面的に造りかえたのである。ぼくの云いたいことを結論から先に云うと、輝政は、桂離宮の創始者八条宮智仁親王(一五七九)の芸術的感化の中にあつたのではないか、ということである。

八条宮は後陽成天皇の皇弟で、幼名を古佐丸(一五七九)と云われた。かの天正十六年四月の聚楽第行幸の折には古佐丸君も天皇に伴なわれて、秀吉以下諸將の歓迎を受けられた。その中に輝政もいた。古佐丸君は十歳で秀吉の養子に迎えられた。しかし、秀吉に実子鶴松(一五七九)ができたためであろう、足掛二年で離縁になった。それは天正十七年末のことである。ところで、輝政の後添(一五七九)として家康女を取りもつたのは、ほかならぬ秀吉である。これほど秀吉の近くにいた輝政が八条宮に対して長く敬愛の念を抱いていたであろうことは容易に察せられる。輝政は慶長十八年正月に五十歳で歿したのであるが、姫路城天守閣のできあがったのは彼の四十六歳のときであり、この時宮はすでに三十一歳であつた。輝政が宮の感化の中にあつたと考えても不思議ではない。彼は死ぬ前の年の九月に上洛し

て参議に任ぜられた。將軍秀忠ひでたかの推挙によるものだが、彼の望みがかなえられたものと思われる。それは彼の京都への強い関心を示しているのではないか。

さて八条宮が丹後宮津藩主京極高知たかともの女むすめ（常子）を妃に迎えられたのは、その三年後の元和二年十一月である。妃の父高知はその六年に歿し、そのあとを嗣いだ子の高広（妃の弟）は寛永三年に輝政てるまさ女むすめ（すなわち家康外孫）と結婚した。八条宮の薨去は寛永六年四月であるから、この結婚は——そのいきさつもぼくは知らないが——少くとも宮の受容せられたものだと云えよう。そのことはさかのぼって宮と輝政との親密の度合がいかなるものであったかを測定させるに足りる。

八条宮の創始せられた桂離宮に、加藤嘉明よしまき進上と云われる奥州白川石（松琴亭のそばにかかっている石の橋）があり、また加藤清正進上と伝えられる赤間石（いわゆる「天の橋立」の傍に立っている石）がある。それは伝説の域を出ないものではあるが、そのような伝説のできるだけのわけはある。——彼等兩人はいずれも、かつては秀吉の有力な部将であった。主人の秀吉が、その器量を見込んで養子に迎えたほどの八条宮に対して、彼等は親しみと尊敬とを持っていたはずだし、宮の重大な仕事に協力しないはずは

ない、ということがこの伝説のもっともらしさを支えていると思われる。くりかえして云えば、彼等がふたりとも、かつて秀吉部将であったという事実を見逃してはならぬのである。輝政も、彼等と肩をならべて、秀吉の下にあった。そして八条宮への親しみと尊敬は彼等とかわりがなかったであらうと察せられる。しかも輝政女が——輝政歿後とはいえ——八条宮妃の弟と結婚したこの事実は、宮と輝政との間を近づける有力な証拠である。

ぼくは、姫路城造築について、輝政が八条宮の指図を仰いだなど云うつもりはまったくない。たゞ輝政自身すら、はっきり意識しない八条宮の芸術的感化が、いわば酵母のようなはたらきをして、姫路城の高貴な美しさを醸成したのではないか、と思うのである。

(四三・九・一稿)

## 友松の記

前稿「白鷺の記」を書きつづけているうちに、かいほくゆうしやう海北友松(一五三三—一六一五)のことが頭にこびり

ついでにしまった。というのは、森蘊先生（おさむ）の「桂離宮の研究」に紹介されている「智仁親王御記」（としひと）（細川家に伝わるという）によって、友松が親王の許（もと）に出入りしていたことを知ったからである。彼は親王が桂離宮（かつら）の造営に着手される六、七年前に八十三歳で亡くなったのであるから、離宮の造営は彼の与り知らぬことである。しかし親王の芸術的修養の中に、友松の芸術が取り入れられなかったとは思われない。友松は親王の兄君後陽成天皇のために、新調の琵琶の撥面（ばちめん）にキリンの画を描いた、と云われる。その友松が親王の許に出入りしたのは不思議ではない。若き親王は、細川幽斎（ゆうさい）（一五三四—一六二〇）に歌学を学んだように、この老画家から画を——画技ではないまでも——学んだにちがいない。してみれば、桂離宮にも、どこかに「友松」が出ていてはないかと思われるが、ぼくにはわからない。その中書院二の間の「竹林七賢」の襖絵、同じく一の間の「水辺樹木と宿鳥」（りはく）「李白觀瀑」の貼付絵などは、狩野探幽（かろうたん）（一六〇三—一六七四）一家の画いたものかと云われているらしいが、少くともその画題は友松自身の取扱ったものでもある。このことだけ注意しておきたい。

さて、ぼくは今まで友松を二天宮本武蔵（むさし）（一六四五）が絵の師とした（直接か間接かは別

にして)という点だけで見てきた。そして両者の絵を漠然と同一水準において考えていた。それは、武蔵のほうは実物を見て感心したことがあるが、友松のほうは実物はおろか、写真版でも、できのよくないものにししかお目にかゝっていなかつたせいでもあろうし、また一般に、彼は永徳・山楽・等伯等とともに桃山期を代表する画かきだと云われながら、彼等のかげに、なかば、かくれていた観があつたからでもある。竹内道雄先生は、京都博物館で友松の「松に孔雀の図」を見た感想を、「これにくらべると、宮本武蔵の絵すら、スケールの小さな趣味的な文人画に見える」と述べている。これにはほくは目のさめる思いがした。そして先生は、「海北友松という大画家があまり知られていないのは、見る機会も少ないし通俗味もないからだろうが、まことに不思議なことである。」と云っている。(「京都の一級品」) ぼくは耳が痛かつた。

ところで、彼の画の性質を「武人的」と評するのがふつうらしく、ある美術書は「剣画一如」とか云っていた。この点では竹山先生もかわりがない。そのところぼくには腑に落ちないので、思いつきを書きとめておく。

彼の父は近江の浅井長政ながまさの幕下で、長政が織田信長に亡ぼされたとき、父は一族とと



海北友松画・松に鳥絵・襖

もに戦死した。その時分友松は四十一歳であった。彼は幼くして東福寺の喝食となり、画かきとして世に立っていたので一族と運命を共にするのをまぬかれた、彼は武士の血は享けてはいるが武人ではないのである。彼は明智光秀の家臣齋藤利三と親交があった。山崎合戦のあと、利三は斬罪に処せられ、その首は栗田口で獄門に懸けられた。友松は真如堂の東陽坊長盛と謀り、長槍を振って番兵を追っばらい、利三の首を収めて、真如堂の裏山に葬った、と云う。これを彼の武勇伝としてみるのはいかゞなものであろうか。彼は死

物狂いであったかもしれぬ。腕に覚えがあるからやってのけたのだ、とは必ずしも云えまい。(友松の墓は利三の墓の隣りにある。今春、雪の舞い散る日に、ぼくは真如堂の墓地に彼をとむらった。)またこんな話が彼にある。——亀井茲矩に良馬数頭を求めたところ、そのどれも気に入らず、悉くこれを返却した。後日気に入った駿馬を手に入れて、得意になって乗りまわした。という。これなんか、今時の人が、たいていは自動車を乗りまわし、どうせ乗るなら高級車が欲しいと云ったようなものだ。駿馬を乗りまわしたからとて武士的とは云えまい。要するに、彼は画筆よりも重いものを持ったことのない画かきとはちがう、というだけのことだ。彼は平生、「自分は誤って芸家に堕ちたが、願わくば、時運に際会して武門を起し、父祖の志を継ぎ、子孫に伝えたい」と云っていたという。そういう悲歎はあったにしても、それはあくまで芸家に堕ちきった者の言でなければならぬ。芸家でありながら、たえず武門に色目を使い、劍のほうの腕もみがいていた。ということではあるまい。このようなわけで、友松を武人とか武人的とか規定し、彼の画を剣画一如など形容するのはやめてもらいたいと思うのだ。それでは友松は、へたな宮本武蔵になってしまふ。

彼はたしかに武士の血は享けているが、決して武人ではない。もっと広い世界の空気を呼吸していた。宮本武蔵が彼に、あるいは彼の画に学んだ、と云うが、それを云う前に、本阿弥光悦ほんあみこうえつが彼に学んだことを云い忘れてはならない。実は、ぼく自身、このことに最近まで気づかなかった。光悦は画家というよりは、書家であり工芸家であり、また、その裝飾性は友松よりも永徳、山楽のほうに近いとばかり思っていた。それならば、光悦は友松から何を学んだのか、光悦の芸術のどこに友松が生かされているのか、それを見極めることはぼくの力に余る。しかし友松と光悦とが同じ世界にいたことだけはまちがいない。友松が智仁親王の近くに在ったように、光悦は親王の王子・智忠親王の近くに在った。そしてその世界は徳川のバーバリズムを寄せつけぬ世界であった。

以上記しおわってしばらく経った昨日（十月二十日）、ぼくは建仁寺をたずねた。竹山さんの本に、十月十九・二十日に友松の画が公開される、とあったからである。建仁寺の塔頭たつちゆう禅居庵・大中院・靈洞院（僧堂）などを歴訪し、さらに京都博物館をものぞいたのだが、ついに友松に会うことができなかった。しかしぼくはこれでよいと思っっている。ぼくに会ったとて、友松は決してよるこびはしないであろうから。——ぼくはこゝ

で、日本のすぐれたるものに出会ったよろこびを語りたかったのである。しかしそれは舌足らずでおわった。

(四三・一〇・二二記)

## 水仙記

——天心・松陰・素行・蕪村——

岡倉天心(二八六三)は、その著「日本の目覚め」のうちで、徳川時代の「仏教と儒学」を論じた章を「真の靈性は僧堂の悦楽を捨て、学問所の安易を放棄して、孤独の浪人学者の胸に、素朴な座席を占めたのであった。天の一瞥を得んと思ひ焦れる、雪に埋もれた水仙の如く、その無言の魂は抑え難い春の予言を堪え忍んでいた」と結んでいる。この名文をよんでからというもの、ぼくは水仙が好きになって、年末年始には水仙を活けるのが、ならわしになった。ところで水仙といえは、東京近辺では鎌倉の瑞泉寺ずいせんじが有名である。この禅寺は吉田松陰(二八三〇)ゆかりの御寺で、ぼくは二、三度訪ねているのだが、いつも水仙の時期には外れていた。旧蠟きゅうろうろう(十二月二十三日)、例によって同僚の田中邦幸兄の車で運ばれて、はじめてこの御寺の水仙を見ることができた。曇り日のさむ

ざむとした空であったが、梅の古木をめぐって八分どおり咲きそろっていた。人影まばらで、若沖（二七〇六）の画にみるような極彩色の東天紅の鳴き声があたりによくひびいた。田中兄は得意のカメラを水仙に向けて倦むことを知らない。その間ぼくは句を案じていたが、

水仙の尼僧めきたる色香かな

の珍句を得ただけであった。この御寺が松陰ゆかりの寺だとは知っていたが、どんなゆかりがあるのか、くわしいことは知らなかった。彼の書簡集（岩波文庫本）をしらべて、彼の伯父（母の兄）の竹院なるものがこの寺の住持であることを知った。松陰がはじめてここに足をとどめたのは二十二歳



鎌倉・瑞泉寺の水仙

(數え年)のときである。嘉永四年(一八五二)六月廿二日付、兄の杉梅太郎宛の書簡の冒頭に――

今日午後浦賀行より帰着、……此行、東肥人宮部鼎藏同道にて道中益多く愉快に奉存候

とあり、また――

此行、鎌府二階堂於ニ金屏山瑞泉一夜宿し、上人(伯父)に逢ひ十歳之款を尽し申候。御無異之段矩方より申上呉候様にとの御事候。

とある。このときの浦賀行は藩の許可を得て房相海岸の防備視察をしたのであったが、この二年後に鎌倉に入ったときはすでに浪々の身であった。前年末に土籍を剝奪されたのである。嘉永六年六月廿日付、兄杉梅太郎宛の書簡に――

五月廿四日江府到着、……廿五日より赴ニ鎌府一候。江戸至ニ鎌府、十三里、中山道已来練熟之脚にて安々と朝辰時に発ち日未レ没達候。扱上人御事堅剛倍ニ一昨年一段之御事奉レ存候。黍粉呈レ之候処、山海數千里之処拜味も無ニ勿体ニ由之挨拶有レ之、矩方亡命一事、出羽源八より御承知之由頗被レ悉ニ其詳一候。流石禅学之功其甲斐ありて其論甚獲ニ吾

心二者に御座候。自後之処名聞利禄之念を断候との事、逗留中甚殷勤に御教誨有之候故、矩方尤其志也と、拙作長篇を出候処、朗誦一過大に被喜候。

とある。松陰はこの翌年の安政元年三月廿八日未明、下田に碇泊中の米艦に投じてとらえられ、江戸獄に拘置せられ、十月廿四日に萩の野山獄に入った。野山獄から兄に宛てた十一月五日付書簡に――

鎌府へ獄中より呈書候。尤航海外事は上人へは昨秋相談仕りたる事也。此度之陥獄之事も委しく申上候。

とある。彼が前年五月廿五日に鎌倉に赴き数日滞在したことは前記したがそのあと江戸に帰り、江戸・浦賀間を往復して、九月十三日に再び瑞泉寺をたずねている。「昨秋」とあるのはそれを云っているのである。江戸浦賀間を往来しているうちに、松陰は海外渡航のことを思いたち、そのことを伯父上人に打明けたものと思われる。彼は天心のいわゆる「孤独の浪人学者」であった。そして雪に埋もれた水仙のごとく「天の一瞥を得んと思ひ焦れ」つゝ、ついにそれを得ることがなかった。安政の大獄について、「日本の目覚め」は云う、――

「日本にとってこのクーデターの嘆ずべき結果は非常に沢山の非凡な天才を喪失した  
ことである。打首の仕置しおきに遭った者の中には木戸（孝允）や伊藤（博文）の先駆者であ  
り激励者であった長州の吉田松陰、マツイーニーに似た叡智の政治家、越前の橋本左内  
がいた。こういう人物を殺しただけでも徳川幕府の滅亡は当然の罰であると云われた。」

松陰は山鹿兵学やまがに傾倒していた。年廿一（数え年）の嘉永三年八月下旬萩を發つて九  
州巡歴の途に上った彼は、途次平戸ひらとの山鹿万介やまがまんけをたずねた。万介は素行直系そこうの子孫であ  
る。折あしく万介病臥中で面会がかなえられなかった。そこで松陰は書面を以てその来  
意を告げたが、そのはじめに「山鹿家の支流を汲むもの長陽吉田矩方」と自己紹介をし  
ている。この後しばらく平戸に止まって、万介から親しく素行の「武教全書」の講義を  
受けたらしい。松陰と山鹿兵学とのかかわりについては今はこの位にしておく。さて山  
鹿素行（二六三二）  
（二六八五）について「日本の目覚め」は次のように云っている。――

「この学派（古学派）の墨守者ぼくしゆの中で徂徠そらいのような人々は、孔子は純然たる政治家で  
倫理を教える人ではないとまで主張した。これに反して山鹿素行のような人々（我々は  
儒教に基いた武士道の發達を素行に負うているのだが）は、日本の制度の中に支那の聖

人の道徳律の表現を発見した。然し如何に個人的にその結論を異にしても、正統の徳川流の考え方に対して異端である点では一致していて、すべて御上のお咎めを受けるものであった。(筆者注・徂徠は御上のお咎めは受けていない。)即ち山鹿素行は門人もかなり従えていたが、江戸から遠い、取るに足らぬ赤穂藩へ追放せられた。然し赤穂の地に蟄居ちつの間に於ても素行の人格は有名な四十七士を鼓舞して、あの忘れ難い忠節の功を成し遂げしめたのであった。」

素行が流謫りたくの地播州赤穂ばんしゆあかほに着いたのは寛文六年(一六六六)十月廿四日であった。

(素行四十五歳) 翌月四日には妻子を迎えた。流謫の身で妻子との同居が許されたのはずいぶん寛大な計らいであると思われる。十二月廿一日には、明日は亡父への祥月命日であるというので、素行は妻とともに亡父の靈を祀まつる支度したくをした。靈前には水・仙・花が挿された。(「日記」による。)彼の父は前年十二月廿二日に八十一歳で亡くなったのである。素行は北条安房守ほつしよあふのかみから刑の宣告を受けるに先立って、亡父の墓所、早稲田宗三寺わせだに参詣したが、母にはその悲歎を思つて、何も云わなかった。「配所残筆」には、「態わざと老母方へは不申遣まうしやらず、宗三寺へ参詣仕、下人成程省なるほどき、若党わかとう兩人召連めしつれ、馬上にて房州へ参

候」とある。彼が配所に在った足かけ十年の間、亡父の命日ごとにその靈前には水仙花が供えられたであろう。彼は延宝三年六月廿四日に赦免せられて江戸に帰り、浅草田原町に借屋住まいすることになった。

水仙をよんだ句は意外に少ない。ぼくは蕪村ぶそん（二七一六）の

水仙や寒き都のこゝそこに

という句が好きである。もと暖地のものである水仙には、蕪村の生国播州しやうこくとはちがつて寒い京都は不向きである。それでもなお、あちこちにけなげな姿を見せている、ということであらうか。

（四七・一・三三記）

## 附篇 青年時代の論考から

——『伊都いづ之男建をたけび』その他から——

天地とともに・渡辺華山『慎機論』を読む・不退転の一路・精神科学の出発点・歴史哲学に就て・太平記の劇的要素・時事評論家としての日蓮上人・『山鹿素行先生日記』から・近松と親鸞・宗教生活の国語の表現・発見の生・ひらくる世界・『法華義疏』の研究・『法華義疏』より・三条実美公の歌・藤原藤房論・青蓮院宮・捨身固国——山背大兄王の御生涯・一幕吏の人生記録

——文末記載の年月日で特に出典を示さぬものは『伊都之男建』の発行年月日である。



## 天地とともに

マルチン・ルテル（一五四八—一五八六）の宗教改革は實質的には独逸の独立宣言であり、宗教改革史はその建国史であつた。フイヒテ（一八七九）は『独逸国民に告ぐ』の中に如何に大なる感激と得意とを以てこれを叙してをることか。「独逸精神を再び向上せしむべき個々の特別なる手段の中、一の甚だ有力なるは斯の如き時代の独逸人の感激的歴史を書くことであらう。」斯の如き史書は将来更に吾人が一層特筆に値する事績を挙げ得るまでは、聖書讚美歌集の如く国民必読書国民読本となるであらう。」これと共に東西宗教改革と併称されてをる我が鎌倉時代のそれは本質的に異つてをるので、ルテルの有名な「人は信仰によりてのみ義とせらる」といふ言葉は宗教の極致と云はれてをるが、かのインダルヂェンスなどに反抗して立つた強い気持が感ぜられるに対し、親鸞（一一三三—一二六二）は長い彷徨と煩悶の極、只和国の教主と和国の衆生の胸に還り來つたので、北陸から関東へかけて懐しき多くの伝説と同信交通の消息とを遺して九十年の生を了した。歎異抄の「善人な

ほもて往生を遂ぐ、いはんや悪人をや」といふ文句に個人的見地から色々理屈をつけようとするが、言葉としては已に親鸞以前のものであつたことに注意せねばならぬ。彼の「自然のやう」は明慧（二七三）の「もののあるべきやう」と一見似てをるが、後者はカント（二七二四）などのゾルレン当為と通ふのであつて、個人の生活をゾルレンのものにしようとするは高尚な趣味以外の何ものでもない。明慧は印度インドに仏蹟巡歴を企図してをつた。ほくらにとつて解脱とは日本の伝統に連ることに尽きる至極の易行道いぎやうどうで、そこに批判の原理を置けばよいので、近く明治以後の我国に於けるキリスト教の運命に徴するならば、当時これに熱狂したモダンボーイやモダンガールは已に過去の夢として忘去つたか、ヤスツポイ社会主義へ転向したか、その辺のことであつて、キリストの信を正しく生かしたのは日本の伝統精神に連つてをつた人々であり、今日その信を持続してをるも正に斯の如き小数の人々であり、ここに信仰の重大意義を認むべきで、それは一時的個人的でなくして「末通りたる」念々相続せらるべきもので、国民同朋生活のうちに恵まれ護持せらるる感激である。日本の伝統精神と云ふに就て、上野君が第三号に述べてをるやうに「我国の淵源は極めむとして極め得ず、日本歴史は我等の现实生活の痛感に体

達さるゝのである。」これは昔の事はよく分らぬということでもなく、歴史認識の主観性を云ふのでもない。藤井貞幹は『衝口発』(一七八一)にて「上古ノ世ヲ天神七代地神五代ト名ヅケテコレヲ神代ト云、神武紀ニ此間ヲ百七十九万二千四百七十歳トス、此年数モトヨリ論ズルニタラズ」と。本居宣長(一七三〇—一八〇二)『鉗狂人』を著し反駁して曰、「漢国のならひとして書典にのする所三千年にたらざる内の事にしてその間になきことは天地の始にも終にも決めてなき理とおもひ」「皇国は天地の始より神代の事どもいと詳つまびらかに正しく伝り来て今は古事記、日本紀に残れり。」「天地出来て以来は甚久遠なるべければ神武紀に出たる年数も何かは疑るべき。」実に痛快にも日本史と支那史との根本的相違が明示されてをるのであつて、黄河流域文化は世界最古に属するが、歴史としては三千年位しか記載されてをらず古事記などに表現せられてをる大和民族の総合的生命威力の背後に無限の時間を感じせしめらるといふので、支那では有名の尚書などすべて後人の理知的造作にかかり、神話もなく国民宗教もなく、山鹿素行(一六二二—一六八五)は『聖教要録』道統に「孔子没して聖人の統殆んど尽く」「道統の伝、宋に至つて竟に泯没せり」と云つてをるが、支那には聖人のこちたき教以外に初めから道などといふものはないとする

宣長の見は過ぎてはをらぬと思ふ。これを思ひ支那の現在を観るならば、ぼくら日本人は親鸞の述懐した如くに遠く宿縁を喜ばなければならぬ。古事記に表現されてをる生命威力が直ちに聖徳太子（五七四）の大陸文明摂取となつたのであつて、十七条憲法・三経義疏には支那印度の幾多の思想家が意を尽し情を傾けて追求愉快しやうこくしたものが、綜合的現実的精神によつて貫徹せられてをる。これらを学術的に論証するはぼくら一生の任務と感ぜられる程である。時間を物質的連続とのみしか理解出来ぬのは非現実的個人的精神の故で、宣長にあつては時間の尺度は長短ではなくして深淺となつてをる。現今、歴史哲学に於て時間の意義が論究されてをるが、祖先の遺したものに生命を感じ、自己を脱却せしめられるぼくらには判りきつたことで、親鸞も「弥陀五劫思惟ごこくの願をよくよく按ずるにひとへに親鸞一人が為なりけり」と言つてをる。

#### 明治天皇御製

をりにふれて

さまざまにも思ひこしふたとせはあまたの年を経しこちする（三八）

建国の伝統を忘却するが亡国の因であつて、イザヤ、エレミヤ、エゼキエル、ダニエ

ル等につながるユダヤ伝統精神によつて祖国の恢復を計つたのがキリストであつたのだ。しかし祖国神靈への忠信と国民一致協力とを意味する「主たる汝の神を愛すべし」と「己のごとく汝の隣を愛すべし」との「二つの誡命」は人々によつて忘れられようとしてゐた。そしてやがては「汝の隣を愛すべし」もかのサマリヤ人の説話に示さるる如き個人道徳への転化を示したのであり、(マタイ伝二二章三四—四〇・ルカ伝一〇章二五—三七 参照) 自国の歴史は単なる過去の知識となり終らうとした。——禍害わざはひなるかな、偽善なる学者バリサイ人よ、汝らは予言者の墓をたて、義人の碑を飾りて言ふ「我らもし先祖の時にありしならば予言者の血を流すことに与せざりしものを」と。かく汝らは予言者を殺しし者の子たるを自ら証す。——マタイ伝二三章二九—三十節。

祖先と手をきつた支那思想の消長、祖国を失つたキリスト教の運命、生命なきところに言葉が入つて巢をかけるのである。

この間に神ながら言挙げせぬわれらが祖国は神代の伝統を相続しつつ東西文化融合の使命を遂行せむとしてをる。ぼくは自分の無力に泣く。

明治天皇御製

磯 松

波風をしのぎしのぎて荒磯の松はちとせの根をかたけむ

〔伊都之勇建〕八・七・二〇

渡辺華山 『慎機論』を讀む

天保九年（西紀一八三八）に、英国船「モリソン」号、近時來航すべしとの風聞が世に行はれた。幕府は嚮さきに文化五年（一八〇八）英国軍艦が長崎港内にて暴行したる思出があるからして、今度若し來航したならば、文政八年（一八二五）の外国船うち攘令はらひに準拠して容赦なく之を撃退すべしと一決したのである。之を聞いた渡辺華山（一七九三、一八四二）、高野長英（一八〇四、一八五〇）等は夫々『慎機論』『夢物語』を書いて、「モリソン」とは船名ではなくして当時有名の人士たること及び内外の形勢を概叙して鎖國の行はるべからざることを力説、世に問ふ所あらむとした。この辺の史実の詳述は略し、左に『慎機論』の大意を摘記しよう。

「兵備は敵情を審にせざれば策謀のよつて生ずる所なきを以て地理、制度、風俗、事實

は勿論里巷説戯劇瑣屑の事に至るまで其説信ずべからざる事と雖も耳目の及ぶ所措る事なし」「今天下五大洲中亞墨利加、亞弗利加亞、烏斯太羅利の三洲は歐羅巴諸国の有となる、亞齊亞洲といへども僅に我國唐山、百爾西亞の三国のみ、其三国の中、西人と通信せざるものは唯我邦存するのみ、誠に恐れ多き事なれ共実に杞憂に堪はず、西人より一視せば我邦は途上の遺肉の如し、餓虎渴狼の顧ざる事を得んや」「もし英吉利斯交易の行れざるを以て我國に説ていはん、貴国海岸敵備にして航海に害あること、一国の故を以て地球諸国に害あらんには、同じく天地を戴踏して類を以て類を害ふ、豈これを人といふべけんや、貴国に於て能此大道を解して我國に於て望む所の趣を乞ん、と申せし時従来彼が疑ふべき事実を挙げて通信すべからざる故を論さんより外あるべからず、斯ては鎖屑の論に落て却て彼が貪婪の名目（口実ノ意）生ずべく、西洋戎狄といへども無名の兵を挙る事なければ實に露西亞、英吉利斯二国驕横の端となるべし」「嗚呼今夫在上大臣を責んと欲すれども固より紈袴の子弟、要路謀臣を責んと欲れども賄賂の倖臣、唯是有心のものは儒生、是又名賤小にして大を措き小を取る、一に皆不痛不痒の世界となりしなり、今夫如此唯束手して寇を待んか。」已上随意ニ取捨ヲ加ヘタリ。

当時の華山の感情の表白は、彼が揚屋入を命ぜられて天保十亥年、幕吏に呈した口供の中に殊によく見られると思ふ。孤影蕭然、天下を憂ふる逼迫したその気持は今日の僕の胸にもはつきりとうつつてくるのである。曰く「只一國ヲ治メルニ急ナル故、終ニ海外之侮ヲ請候事共、以後之變如何ヲ不存候ハ如何ト云々、昔一室ヲ治ムルノ志僅ニ鍾釜妻妾ニ有之、偶大盜至レバ門ヲ固シ、墻ヲ高シ、内妻妾ニ驕、大盜圧来候得ハ門墻ハ不越共、一村焼打仕候テ終ニ延焼ニ及候、所謂莊子ノ云フ譬之如ニ御座候」と。幕末に於て、亞細亞東海の孤島日本は欧米の擄取の対称となるにはあまりに敏感であった。それは前掲の『慎機論』にも明瞭に看取出来ることである。後年来朝した米國提督ペルリ(一七八四一八五八)は一八五三年九月二日日本國政府に遣つた書簡中に、日本人を評して「普通外交の規則を遵守しては此の抜目のない、sagacious として狡猾な deceitful 國民に対しては一寸も効能がないのであります」と言つてゐる。これは印象的の外面的觀察であるが、華山の「杞憂」が文字通りの杞憂に終つて明治維新及び爾後の國威の發揚となつたのは、彼の如き「杞憂」が亡國の志士のそれではなく、謂ふが如き進歩主義者のシニシズムでもなく、實には、大きな全体としての動きがあつたからである、中心から發せ

らるる力によつてその全体が進ましめられたからであると思ふ。この点に今少しく触れて行き度い。

明治十年、鼎軒田口卯吉(一八五五)は『日本開化小史』を著したが、その中「徳川氏治世の間に現はれたる開化の現象」の項にて、開化の物的方面として、衣食住、淨瑠璃及び歌舞伎芝居、絵画、印刷、望遠鏡の造初め等々、多くの細目の下にその發達状況を掲げ、心的方面として、医学、朱子学、王陽明学、復古学、開化史、和学、俳文、小説、理化学、天文測地学等々を列挙説明し、その後に於て「蓋し此等の進歩は嘗て政府の保護に由らず、又嘗て外国開化の助を藉らず、全く日本社会の内、に於て自ら進みし者なり云々」と言つてをる。(氏の史論の根本たる個人心理的功利主義的見地には賛同出来ぬことを附言して置き度い) 当時已に支那から学ぶべき何物もなかつたことは、渡辺華山も『西洋事情答書』にて西洋諸国の學術施設(造士の道)の進歩を説いて「唐山などの文弊は更にこれなく候」と指摘してをる。華山が『慎機論』を書いた前年即ち天保八年には例の大塩平八郎(一八三七)の事件があり、華山はそれとの關係ありやに就ても取調べを受けたのである。文化十三年(一八一六)に書かれた『世事見聞録』に「元禄より享保

の頃の体、都鄙尊卑貧福の境、国民の分量程合にてありしが夫より以来都会繁昌に過ぎ奢侈に過ぎ町人遊民の人数弥増して融通弁利の道を尽す故、国々種々の産業起りて売買の道広太に及び、都会寸尺の地も宝と成、塵も埃も利得のものと成り、世の中一面に透間もなく利欲を一筋にて詰り切、真綿にて首を締めたとかいふ如く利欲が人々の身に搦みて昼夜此苦痛を免さるる事を得ざるなり」とある。はちきれむとする民力の拡充は内部に様々の矛盾紛乱をも惹起したが、それは内輪の鬭争沙汰や、この『見聞録』著者の所謂「攻撃を行ふ」といふ如き韓非子張りの強力統制手段だけでどうすることも出来ぬものであつた。どう見ても日本は欧米の投資乃至占領の対象ではあり得ぬものであつた。開港といふても日本を彼等に明渡すまいとしたればこそ、華山は内外を通觀し我が無力を慨歎して焦燥したのであるが、彼の主張も全体との關係を得て初めて時代の責務を分担したのであつて、開港は我が国を彼の所謂「餓虎渴狼」の餌食たらしめず、却て日本を世界の日本たらしめる第一歩となつたのである。

更に次の事を述べることによつて僕の言はむとする所を暗示し度いと思ふ。天保に先立つこと六十余年、已に安永三年（一七七四）に『解体新書』の翻譯完成したること、

更に寛政十年（一七九八）に『古事記伝』の出現したること、せめてこれだけでも指摘してその暗示たらしめようとするのである。『解体新書』は Tafel Anatomia の和訳で明和八年（一七七二）三月五日着手され安永三年八月に完成刊行されたのである。訳者の一人杉田玄白（一七三三—一八一七）は『蘭学事始』にその事業の始終を回想してゐる。「良沢が宅に集り先づ彼のターフル・アナトミアの書にうち向ひしに誠に臚舵なき船の大海に乗出せしが如く茫洋として寄べきなく只あきれにあきれ居たる迄なり」「斯の如く勉励すること両三年も過ぎしに漸く其事体も弁ずるやうになるに随ひ次第に蔗を啖ふが如くにて其甘味に喰ひつきこれにて千古の誤も解け其筋たしかに弁へ得し事に至るの楽しく会集の期日は前日より夜の明るを待兼ね児女子の祭見にゆく心地せり」「滴の油これを広き池水の内に点ずれば散じて満池に及ぶとや、さあるが如し。その初前野良沢（一七三三—一八〇三）、中川淳庵（一七三九—一七八六）、翁と三人申合せ仮初に思付し事、五十年に近き年月を経て此学海内に及び其所彼所と四方に流布し年毎に訳説の書も出る様に聞けり。かくも長命すれば今の如くに開ける事を聞くなり一たびは驚きぬ」（文化十二年八十三才ニテ述）

国学の隆昌と蘭学の伸長とが恰も時を同じうして現れたのである。それは殆んど同様

の苦しき事業であつた。しかし地下より湧き出づる泉の如き、底深く強い力がそこに押し出されつつあつたやうに感ぜられる。東洋文化の一切を吸収して爛熟した江戸文化の内面にかよつてをつたさはやかなる生命の主流は、更に西洋文化をもやうやくにして呑まむとするに到つたのである。歴史的変遷は只物的地盤より理解し得られるべくもない。支那に共産党の勢力旺盛なることは支那民族将来の発展と幸福を約束するものでは断じてない。有てるものは更に与へられ、有たぬものは有てりと思ふものをも奪はるる（マタイ伝より）が生命の法則である。已上を以て冗漫なる論を閉づる。

(八・一〇・三二)

## 不退転の一路

一

ジャン・ジャック・ルソウ(一七一二—一七七八)は、『エミール』の第一篇で「避妊の風習はその他の人口減少の諸原因と相俟つて次に来るべきヨーロッパの運命を吾々に予言する。ヨ

ヨーロッパが産んだ科学・道徳は間もなくヨーロッパを荒蕪こうがの地と化し、そこには兇猛な獸類が横行するようになり、住民は墮落のどん底に沈んでしまふ」といふてをるが、すぐれた着眼だと思ふ。我国にても、産児制限論が色々の見地から口にせられてをるが、尤もつともらしい理由のある理論が一番危険であるからして鋭く吟味を加へられねばならぬ。

「優秀な子供を必要なだけ」といふによつて親子共によからむとするのであるが、こな一の幸福主義に立脚した、行きづまり的の、根本の力を否定した所に、どうして国民生活の無極の発展性があり得ようか。人生に矛盾は免れることは出来ぬのであつて、その矛盾を一定の局部的結果に固定せしめて、その除去が人生の矛盾そのものの消失を意味するといふ思想は全く本末顛倒である。さやうの安易な思想は、逆に矛盾そのものを体験として解決しつつ進んでゆく根本の力を否定するものであるといふことに何故氣付得ぬのであるか。事しげき世に堪へつつ共に苦しめ！そこに人生の力がある、科学与芸術と、哲学と道徳とは美しく花咲きみだるであらう。バイブルの中にこの点に触れた微妙のことばが示されてをる。

イエス答へて彼等に曰けるは爾曹なんぢら人に欺れざるやう慎め。そはおほくの人わが名を冒しきたり我はキリストなりと云て多くの人を欺べし。又なんぢら戦と戦のうはさを聞ん。然ど慎て懼るる勿れ。此等の事は皆ある可きなり。然ども末期は未だ到らず。民おこりて民をせめ国は国をせめ饑饉疫病地震とどころに有らなん。是みな禍の始なり。其とき人なんぢらを患難に付し爾曹を殺すべし。又なんぢら我名の為に万民に憎れん。その時許多のものつまづき且互に憾むべし。また偽言者多く起て多くの人を欺ん。また不法みのるに因て多くの人愛情ひやゝかに為べし。然ど終まで忍ぶ者は救はるゝことを得ん。(マタイ伝二十四章)

戦争の苦痛より逃避せむとして却て祖国をヴェルサイユ条約の鉄鎖につけたる独逸社会民主主義者等はキリストのことばに鋭く責められぬであらうか。

## 二

田に畑に処ゆづりてしづがすむいほりちひさく見えわたるかな

右の 明治天皇御製を拝誦しまつりて気付かしめらるるは「所有」といふことの真意である。「私有財産制度」の否定は、その財産が他からの奪取の上に成立してをると考へるのであるからして、否定することによりすべてに平等にそれを奪取して来ようと

するが根本思想である。事実、否定せらるべき「所有」は多く存在するであらう。特に財産が奴隷制度の上に蓄積されることに馴らされた所ではこの否定平等化の観念は当然生じてくるに相違ない。併しここに「奪取」に対して「獲得」といふことに就て考へて見ねばならぬ。露西亞農民は、地主の土地が自分等に与へらるる約束としてその革命を認識した。併し与へられたものはパンではなくして石であった。自分等を支配するものは旧態依然たる専制政治である。「テーゼ」に対立する「アンチテーゼ」は何等実内容を有たぬことに注意せねばならぬ。しかるに生命をこめて「獲得」したるものは単なる否定によつて否定せらるべくもない。他によつて換置せらるることを許容せぬのである。従つて自ら失ふのでなければ他がこれを奪ふことは出来ないのである。であるからして「領土」の所有は必ずしも帝国主義ではない。さう見ることしか出来ないのは、あくまで「領土」を物質とのみ見る認識の浅薄を示すにすぎぬ。併し乍ら逆に領土の「所有」はあくまでそれを「獲得」たらしめねば無意味であると言ひ得られるのである。みなものさねとも源実朝(一一九二)の歌「ゆふされば塩かぜ寒し波間より見ゆる小島に雪はふりつつ」のうちには、寒い塩かぜのなかをふりしきる小島の雪をもとけしむる実朝の温い血潮が感知せられる。

おくのほそ道を踏分けて行つた芭蕉（二六六四四）は、「塩がまの明神」に詣でつつ「国守再興せられて、宮柱ふとしく、彩椽きらびやかに、石の階九仞に重り朝日あけの玉がきをかがやかす。かかる道の果、塵土の境まで神靈あらたにましますこそ、吾国の風俗なれ」といふと「貴けれ」として日本の道の果に於てすら自分のこころの故郷を見出さしめられたる感激を吐露したのであつた。この実朝・芭蕉等の芸術及び尊王思想（次号に論じたいと思ふ）と攘夷開港思潮との必至の關係を感知せぬならば、今日の日本をして、旧式帝国主義あるひは空漠世界主義追随になりさがらしむることになるのであり、ここに僕等の忘我の創造的努力感を促さしめらるる。前号拙論「慎機論を読む」と併せて考へていただきたいのである。

### 三

僕は人々の魂の冷たく荒れてゐるのを憤り悲しむことはすまい。僕自身その一人なのだ。天地にみちてをるあたたかい日の光に背いて、理論を纏うた所が身体はぬくもりもせぬであらう。僕は自分の生き且つ死ぬる国土の歴史と周囲とに自分の生命の源泉を見出さなければならぬ。それが唯一の具体的の生き方である。そこに生の歡喜がある。こ

の今速刻に実感せられる歓喜なくして、何処に何を求めむとするのであるか。魂の安住の地を外に求めむとする眼をひるがへして内を凝視せよ。自分の生命が芽ぐみはぐくまれた故郷の地に還って自己を周囲につながらしめよ。そこには共なるよろこびがあり、共に悩まねばならぬ悩みがある。そして涙は涙によつてのみぬぐはれることが分らう。すべての苦悩はなくされるためにあるのではなくして共に苦悩せらるるためにあるのであり、その現実に従順するが救ひのただ一つの道であると知らねばならぬ。証上に方法あらしめ、出路しゅつろに一如いちじよを行じつつ、彼岸ひがんは此岸しがんの体験となり、此岸は彼岸の光明に導かれる。彼岸は此岸の生のうちに感知せらるるによつて、却かへつて此岸の生そのものをあげて彼岸へと帰入せしむるとも云へる。その故に『四生しじようの終歸しゅうき万国の極宗ごくそう』たる三宝への帰依きえは「和を以て尊しとなし、忤さかふなきを宗とする」によつて現實的根拠を獲得するのである。

諸君、この不退転の一路をば忍持経歴し来つたのが日本の歴史そのものなのだ。そして、それは明治維新によつて、明治天皇の大御心にすべをさめしめらるるによつてここに現在の僕等の生があるのだ。それ故に我が国体を否定するは人生目標そのものの放棄

を意味する。この国体の信に目覚めずして今更何をたくらまむとするのであらう。それの否定は却て自己の否定に結果するが必然であるのだ。僕はすべての人が万一この厳然たる事実を否定するならばもうこの世は住むに甲斐なきものだと思ふ。それは人間性の暗愚と卑劣を証明する以外の何物でもないからだ。否定と陰謀はぼくらの生の内容と価値とに加ふることが出来ないのだ。キリストが「まづ汝の隣を愛せよ」といひ、孔子が「身を殺して仁を為せ」と言はれたのはそこに人生の出発点を求めたのだ。一切はそこからだと知つたからだ。しかしそれは求められなかつたではないか。そこに出発することにより吾等の生き且死ぬる精神の国を「日本」として現に与へられてをりながら、今更何処に何を求めむとしつつあるか。

(八・一一・二八)

## 精神科学研究の出発点

——特に吉田松陰先生の言葉に就て——

僕等の敏感性は、僕等自身の生の成立をそのあらゆる要素にまで分析してやまぬ——これは実に僕等青年の特権であつて、自己に対するこの批判の刃はいくら鋭くてもすぎ

ることではないのである。その一例として最近、中学の時の友人が来て、自分はクロボトキン(一八四三—一九二二)の『青年に訴ふ』といふ一文を読んでいたと心動かされた、彼が、学生生活を論じて、学生に分まで生産してをる労働者を、他日自分等が支配せんために、彼等学生は現在学問してをるのだ、と社会的矛盾を突くあたり、涙なしには読めなかつた、と語つた。ここには青年の純情がながれてをるので誰人も共感のことであらうが、僕はただ、この種の思考がこゝにのみ止つてをるのでは滔々たる人道主義として徒に青年子女の紅涙をしぼるにすぎぬことを懼れるのだ。それは、人生帰結の急所に帰向せしめられねばならぬを思ふのであつて、より根源的問題として親子の關係についてはどうか。「子を持って知る親の恩」で、僕等は一生親の恩が分る機会が与へられぬかもしれぬし、それが分つたときには僕等の親は世にをられぬかもしれぬ。こゝに「父母ニ孝ニ」の人生の大問題があるのであり、クロボトキンの提出した疑問もこれの解決のうちに、あるひはそれと共に考察せらるべきものである。しかるにこの重大不可避の「孝」の問題は平凡事として平気でをられながら、今更後者のみに目をしばたゝいてをるものはないであらうか。一切の虚偽を見据ゑんとする自己の眼を内に転ずるならば、そこに一切の虚

偽を背負ふてをる自己の姿がある。こゝに「無我」の仏教的人生認識が「四恩」の自覚として理解せらるべき必然性があるのであつて、この『四恩』の反省を持たざる「無我」感は積極的消極的「反恩」の自己主義に外ならぬのである。かの一七八九年のフランス革命は、周知の如く、自由、平等、博愛をモットーとして勃発したといはれてをるが、實際は、この中の「博愛」は革命進行中に後から附加せられたのである。そして革命の思想的原動力といはれるルソウ（一七二二—一七八二）の『社会契約論』は、後年フランスに発生したソリダリテイの思想の一の基礎となつたとも考へらるゝので、決して個人自由の無制限許容ではない——要するに、横暴なる君主に対して「人間は生れながらにして自由なり」といふに出発して、社会成立の内的根拠を求めんとしたので、しかもまだ機制的構成観のエンライトメント思想を出づることができないでをるのである。このやうにルソウの真意に同情するならば、この思想を、天地とともに君臣の分定りたる、億兆一心挙国一致の我国で口にするのは大きな認識不足といはねばならない。

吉田松陰先生は『講孟劄記』こうもうとうき卷之四にて『孟子』尽心章句上の

「求則得之。舍則失之。是求有益於得也。求在我者也。求之有道。得之有命。是求無益

於得也。求在外者也。」

（「求<sub>ム</sub>レバ則チ得<sub>ル</sub>之<sub>ヲ</sub>。舎<sub>フ</sub>レバ則チ失<sub>フ</sub>レ之<sub>ヲ</sub>。是<sub>レ</sub>求<sub>メ</sub>テ有<sub>ル</sub>レ益ニ於得<sub>ル</sub>ニ一也。求<sub>メ</sub>ノ在<sub>ル</sub>レ我<sub>ニ</sub>者<sub>アリ</sub>也。求<sub>ム</sub>ルニ之<sub>ヲ</sub>有<sub>リ</sub>レ道。得<sub>ル</sub>レ之<sub>ヲ</sub>有<sub>リ</sub>レ命。是<sub>レ</sub>求<sub>メ</sub>テ無<sub>キ</sub>ナラレ益ニ於得<sub>ル</sub>ニ一也。求<sub>メ</sub>ノ在<sub>ル</sub>レ外<sub>ニ</sub>者<sub>アリ</sub>也」）

の一句を解釈しつゝ、「大平ニ鼓腹シタル士ノ常言ニ、今ノ士は昔ノ士ノ様ニ勇猛ナル事ハ出来ヌナリ、是モ時運ナリ抔云者アリ。余甚ダ其言ヲ惡ム。己ガ職ヲ廢シ是ヲ時運天命ニ附セバ不忠不孝不仁不義皆時運天命ニナル也。余ガ意ヲ以テ是ヲ言ヘバ国家夷狄ノ事、固ヨリ君相ノ職ニハアレ共、神州ニ生レタラン者ハ普天率土ノ万民皆自ラ職トセズンバアルベカラズ」と言はれてをる。この前後も大切のことであるが、これのみ書きぬいたのである。維新の鴻謨は「回天之事業」といはるのであるが、それは実には内心の「回天」といはるべきものである。僕等は、先生が江戸獄中よりの書簡に『至誠ニシテ而不<sub>ル</sub>レ動<sub>カ</sub>者未<sub>ダ</sub>ニ之有<sub>ラ</sub>一也。此語高大無辺な聖訓なれど吾未<sub>ダ</sub>レ能<sub>ク</sub>ニ之<sub>ヲ</sub>信<sub>ズ</sub>ル一也。此度此語の修行仕る積也』と述べ、あるひは

皇神の誓ひおきたる国なれば正しき道のいかで絶ゆべき

道守る人も時には埋もれどみちしたえねばあらはれもせめ

と詠じたるを読む時に、我が全存在を含む一切価値を転回せしめた先人苦悶の内的過程に参入して、煩鎖の人生相對主義の彷徨より出離せねばならぬ。こゝにまた「修身齊家治國平天下」の語に要約せらるべき全儒教思想の實現客觀化の内的モメントが潜んでをると思ふ。

外来の思想ドクトリンをも人生事實に密着せしめて理解し、自己の體驗としたること  
が日本思想の特色であるのであつて、その故に、これを対象としての精神科学研究は、  
「全か無か」の重大決意を僕等に促さしめるのである。現代学校教育批判について併せ  
考へらるゝことであるが、その昔南都北嶺の既成宗教に対して興つた浄土宗派の中には  
その「易行」主義の故に随分ホウラツをしたものもあつた、それと似た現象は徳川幕府  
の時、松平定信（一七五八—一八二九）のやつた『寛政異学の禁』で、これは、幕府の官学である朱  
子学に反対の儒者に、道徳的にかゞはしいものがあつたのがこの挙の一動機であつた  
らしいのである。外から与へられたものに満足出来ぬものが、それと反対の方向に向け  
しめられることは人性の自然として面白いことであり、現代に於て、学校教育の無内容  
がマルキスト学生を発生せしめ、それが多く享樂思想と提携しようとするのもこれと同

一素質の現象であるが、それらに対して、親鸞（二二七三）、実朝、素行（二六八三）、宣長、松陰等の業績の意義を三省して、今日に於ける僕等の不可替の使命に生きねばならぬと思ふのである。

已上、匆卒いじようの間に筆をとり、ゴタ／＼になり、諸兄に御詫びします。前号にて、尊王攘夷論を論ずるやう、申しておきましたが、研究の不行届から果せませんでした。筆を改めてからのことにします。

（八・一二・二五）

## 歴史哲学に就て

「人格」を重んじたカント（二七三三）は人生現象を文化 Kultur の概念によつて自然現象と区別したが、歴史といふことが分らなかつたからその人生観は個人主義的であつた。ヘーゲル（一七七〇）は歩を進めて、歴史を一の精神の弁証法的発展としてその人格性を認識したが、それは実体なき文字通りの精神史であつたので、折角歴史の内面化に想到しながら、その「精神」を「物質」にすりかへるマルキシズムを対立せしむる素質を有

してをつた。実内容のなき所には常に空なる概念の対立が巢くふ。それ故にマルキシズムとヘーゲリズムとは同じ哲学的観念論であつて、他の自然科学的史観たる人類学的人種学的実験心理学的統計学的史観とは全く異なる方法論の上に立つものである。又之等の自然科学的史観に対して、歴史現象の一回性や個別性を説くウキンデルバント（二八四八）、リツケルト（二九三六）等の文化科学的歴史哲学は、普遍的抽象的一般性を立てる自然科学に対する反動的のもので歴史的消極的意味しかないのである。歴史現象の一回性を人間の顔の非同一性と比論しても、この意味の一回性なら石ころでも有つてをる。又文化を自然と対立せしむることは却つて人生物質視であると心理的洞察が加へられねばならぬ。自然科学的史観にはもう批判を加へる要はあるまい。人生研究は人生を原理としなければならぬことを一言しておく。歴史はヘーゲルなどの暗示したやうに、まことには精神史でなければならぬが、その「精神」の内容は正しく「言葉」であり、個別性をいふなら、正しく「日本語」といふべきである。それは個別的にして、普遍的である。歴史の時間性を言葉（文字ではない）のそれと見た本居宣長は流石に偉かつた。外国文化の日本化といふことの正しい言ひ方は、その日本語化といふべきである。この意味で歴史

研究とは文献文化史的研究といふことになる。ファイヒテ(二七六二)は、ローマ人は基督教を排斥も同化もできなかったといひ、それをラテン語の衰滅と結合せしめて考察してをる。それで又日本または西洋物質文明国と対照せらるる東洋精神文明国の範疇に入るものではない。物質文明をも栄えしめぬ精神では駄目である。こゝで日本語の威力といふことを考へねばならなくなるのである。

(八・一・二五)

## 太平記の劇的要素

——主として足利高氏(二三〇五)の動静——

『太平記』は平家物語と共に、あるひはより以上に巧妙の脚色を受けたなら立派な一大史劇となるであらう。昨上演禁止を受けた『源氏物語』は、この点大平記に劣つてをり、その全体より部分々々を拾つて戯曲化する外ないが、『太平記』は全篇をあげて一貫した雄大な民族的史劇を成立せしめ得る内容を有してをる。その全体から、故事引例、粉飾多岐を、必要以外はあらひ去り、内容の連絡をうんと緊密ならしめるなら、そこに渾然たる一大史劇が現出してくると思ふ。またこの気持でこの作を読むと、惻々と

胸打つ箇所によくぶつかるのである。

『太平記』は北条氏討伐と、建武中興足利高氏叛逆と、南北兩朝の交渉と大体この三部に分たるゝ、今はその第一部のところを読んでみる。後醍醐天皇御治世の事、それより正中之變、楠正成(一二九四—一三三六)の挙兵、天皇笠置かさぎに落ちさせ給ふ事、正成赤坂城軍事で、最後に、天皇の隱岐遷幸せんこうとなつて、北条氏がこれで一安心といふことになる。これが元弘二年三月の比ころで、已上いじようで卷四までが大体終るのである。卷五から北条氏は倒壊の一路を辿ることになり、卷十末の高時(一二三〇—一二三三)并ならびに一門以下於東勝寺自害事といふのを大詰と見てよからう。

これで第一部は卷五以前と以後との更に二部分になるが、その後者を北条氏滅亡史劇としてまとめてみたいが、長くなるので二三の記事を拾ふ程度にとゞめて置く。

○

まづ序幕をどこにとるか。卷五第四条は「相模入道高時弄田楽竝闘犬事」といふので、「其比洛中そのころに田楽でんがくを弄もてあそぶ事昌さかんにして、貴賤あひ争あて是に著せり。相模入道此事さかみにゆらうどうを聞及び、新座本座の田楽を呼下して、日夜朝暮に弄もぶ事無たじなし他事」といふ書出しである。

それから或夜、高時が酒に酔うて舞うてをると、忽然として田楽共十余人あらはれ、着座して巧妙に舞歌ふ。暫あつて拍子を替てその歌ふをきけば、「天王寺のえうれほし（妖霊星）を見ばや」といふのである。いかにもドラマチックな凄味のある文句である。そこである侍女が、障子の隙よりそつと見ると、その田楽といふは皆異類異形の変化である。この由を城入道時頭じじょうに告げたので、この入道大刀おつ執つてその場に臨むが、已に化者は消え失せ、燈を挑かかげさせると、畳の上には禽獸の足跡が点々としてをり、さては天狗どもが入りこんだかと合点するが、高時はその場に全く酔ひ臥してをる。やがておどろき覚めて起上るが、何等知る所がない……。

これを伝聞した儒者刑部少輔仲範せいぶしょうふなかつのりといふ者が、「天下將に乱れんとする時、妖霊星と云悪星下くだつて災を成すといへり。而も天王寺は仏法最初の靈地にて、聖徳太子自ら日本一州の未来記を留給へり。されば彼化者かのが、天王寺の妖霊星と歌ひけるこそ怪しけれ。如何様、天王寺辺より天下動乱出来て、国家敗亡しぬと覚ゆ。武家仁ぶけを施して妖を消す謀を致されよかし」と言ふ。

一昨年さきとしの末頃と思ふが、歌舞伎座で、誰の作であつたかも忘れたが、松本幸四郎の高

時で「高時」といふのをやつたが、その筋はこの話と、すぐつゞけて、「相模入道斯る妖怪にも不驚<sup>おどろかず</sup>」として鬪犬を好んだことがあつて、この二つを仕組んだものであつた。

所がこの条の直ぐ前条には、「其比都鄙<sup>そのころ</sup>の間に稀代の不思議共多<sup>ども</sup>かりけり」といひ、その例として、山門の根本中堂の内陣へ山鳩が一番飛込んで、新常夜燈に飛入り、燈明を消してしまひ、此山鳩が中堂の闇に迷うて仏壇の上に翅をたれてをると、承塵（なげし）の方より、朱を注したやうな色の馳<sup>いたち</sup>走り出て、此鳩を二つながら食殺してぞ失にけるとある。これらを「天王寺の」と結合せしめて、全体を暗示する予言的の序幕としたら面白いと思ふ。シエクスピアのマクベスの序幕妖女の登場や、ハムレットの序幕先王ハムレットの亡霊の出現のやうに、全体の暗示的場面たらしめ、最後の高時の自害と照應せしめるのである。

○

右の序幕の暗示は、六巻の「楠出張天王寺事」に於てうつしくなつてくる。これは元弘二年四月のことであるが、前年赤坂城にて自害し、焼死したる真似をして落ちた正成が、突如天王寺に現はれ、縦横の智略を示して勢力を張り、今は京都より討手がなくて

はかなはぬ程になつたとある。この辺から卷七の、吉野にて村上義光(二二三二)大塔宮(二三〇八)の御命に代つて自刃すること。正成千劍破城軍のこと。先帝後醍醐天皇、船上山臨幸のことまで、呼吸もつかせぬ面白さがあり、已に戯曲にされてをる部分もある。それらを巧に排列して全体を構成せしめたいが、とぼして、たゞちにこの討伐運動に於ける足利高氏の動静を辿つて、大詰まで行つてしまひ度い。以下卷九にすゝむ。

名和長年(二三三六)が後醍醐天皇を船上山に擁しまゐらせ、討手を京都に差上らせる由の早馬が六波羅から高時の許(もと)に到達する。そこで大勢東上のため、名越尾張守を大将として、リーダー格(とさま)に外様大名二十名が撰定せられ、高氏もその一人に加へられたのである。高氏は折から少しく加減が悪かつたにもかゝはらず、度々上洛を催促されるので憤慨し、父の喪に服して三月も過ぎず、自分のこゝろはまだかなしんでをる。それに身体の具合もわるく、あれやこれやで身心共に疲労してをる際、この無体の催促はどうだ。源家累葉の身でありながら、こんな待遇を享けるのは、自分が意気地がないからだ。よし今度催促されたら一家全部で上京し、先帝後醍醐天皇の御方に参じて六波羅を攻落し、家の安泰を計らうと決意する。果して又の催促があつたので、この通り実行しようとする

ると、長崎入道円喜あや怪しみ思つて、高時にその由を告げ、高氏の妻子を鎌倉に人質にとつておき、且かつ忒心なきを神仏に盟ふ起請文を出させるやう勧告する。高時は使者を立て、道中は危険だから、幼い御子息はこちらに止められるが宜しい。貴家とは異体同心の親交もあり、且は我が一門の赤橋相模守の妹御むすめは貴方にかしづいてをる。今更何といふことはないが、他人の口がうるさいから、兎も角と誓言を認め下さるやうと婉曲に申込ませるので、高氏の憤懣は油をかけられたやうになる。どうしたものかと弟直義に相談をかけると、直義のいふやう、「吾々のなさうとする事は、忠義のためであるし、誓言などは神も受けはせぬともいはれる。構はぬから偽りの誓言を書くがよい、吾々の忠誠は神も守らせらるゝであります。公達きんたちはとどめておいて、万一の時逃れられるやう計ひおき、赤橋殿もをらるゝことだし、それにこんなことは大事の前の小事です」高氏もこれに同意をし、自分等の野望を忠誠の志として、ジャステイファイし、目的の為に手段を多らばぬ彼等一流のやり口はこゝに端を発するのである。仰せ一々うけたまは承る旨高時に言上すると、高時はすつかり喜んでしまつて、様々の待遇を与へたり、八幡太郎義家以来の白旌はたその他の品々を授けたりしてをる。高時は臆病でお人好しであつたらう。

こゝで元弘三年三月二十七日鎌倉を立、大手の大将と被定、名越尾張守高家に三日先立て、四月十六日京都に著給ふとある。高氏は著京の翌日、直ちに伯耆の船上山へ潜在使を立て、御方に参る由を天聴に達せしめ、朝敵追罰の綸旨を拝受してをる。このことは両六波羅も、名越も思ひ及ばぬことなので、毎日高氏は彼等に交つて、何処を如何に攻むべきかなど評議してをる。彼の凶々しくすました顔が見えるやうである。

さてその評定の結果、四月二十七日は、千種忠顕（二三三六）等率る所の八幡山崎の官軍との合戦といふことになる。名越は大手の大将、鳥羽より向ふ。高氏は搦手、西岡より向ふ。足利殿は未明に京都を立給ひぬと聞いて、名越尾張守人に功名を先んじられてなるものかと、馬の足もたぬ泥土に馬を打入れたりして我先にと進む。彼は気早の若武者で、この合戦では人の耳目を驚さむものと意気込んでをり、その日のいでたちは辺りを耀さんばかり、花曇子の濃紅に染たる鎧直垂に紫糸の鎧金物重く打たるを透間もなく着下して等々々とする。僕は彼に於て、高氏と全く対照的の性格を認めて面白く思ふのである。併しこの尾張守は、官軍を靡かする如く奮戦するが、休息中弓のねらひうちを喰つて、あへなき最後を遂ぐるのである。この頃高氏は、合戦をよそに桂河西端に下り

て、そこで酒盛をしてゐた。大将名越戦死の報告をうけるのはその時である。単純な奴だ位くらゐに思つて、高氏はせゝら笑つたであらう。名越の死をよそに、彼はさつさと兵をつれて大江山を越え、丹波路を西へ、篠原へと向ふ。目指すは六波羅である。目的貫徹のため、かうと睨んだ急所に向つて、如何にも巧に事を運んでゆく。少しの無駄もせぬのである。こゝで高氏の本心をさとつた中吉なかきち十郎と奴可ぬか四郎の兩人はあとに居残り高氏に行く方にむかつて散々にのゝしるところがある。まだあるが端折ることにする。かくて六波羅亡び、持明院方の悲劇となり、千剣ちけん破城はやじょうのかこみも解かれ、一方新田あた義貞よしさだの拳兵あつて、鎌倉幕府遂にたふれることになる。

(八・一・二五)

## 時事評論家としての日蓮上人

時事評論家としての日蓮上人(二三三)と云つてもこれが日蓮その人の生命に外ならぬ。旧時代は貴族社会の職業僧侶が遁世独善の宗教的ペシミストであつたのに比して、日蓮は社会全体国家の歴史そのものに自己を対向せしめてゐる。出家遁世はその動機に現実

への消極的批判を含んでゐるとしてもこれは積極的批判である。略同時代（一三六七）の親鸞（一一二七）（三）や道元（一一五〇）とも違つてゐて、鎌倉時代の政治社会問題をそのまま自己の言行に表現せしめたのは彼が一番である。親鸞や道元の内的批判を誤解して「懺悔」とか「修行」とかに耽溺して、生きた社会の実行力を失つて終ふよりも、日蓮の積極的態度を学ぶのはよいが、短所として自我的にならうとするから充分の批判にその価値を究極せしめねばならない。

「日蓮ハ日本国ノ中ニハ安州ノモノナリ、総ジテ彼国ハ天照大神ノスミソメ給シ国ナリトイヘリ。カシコニテ日本国ヲサグリ出シ給フ。アハノ国御クリヤナリ。シカモ此国ノ一切衆生ノ慈父悲母ナリ。カ、ルイミジキ国ナレバ定テ故ゾ候ラン。日蓮又彼国ニ生レタルハ第一ノ果報ナルナリ」（弥原太殿御返事）と我国の歴史を回顧して現実の自己の郷土と結合せしめそこに深き感激を汲むのは底力ある精神である。こゝには歴史哲学の学術的客観性は乏しいとしても復古的先進の意義は大きい。我国にては天智朝に朝鮮問題が断念せられて以来、主として支那文化の影響化に受身的態度を持續し、国際的現実意志力に直接対抗する機会なしに過ぎてきた。併し時代の推移は漸く自国への反省を促さしめる

と同時に、支那との交渉にその現実味を加へつゝあつたのである。藤原頼長(一一二〇)の

『台記』康治元年十二月卅日の条に「予聊遊心於漢家之經史、不停思於我朝之書記」

(「予聊遊心於漢家之經史、不停思於我朝之書記」)と云ひ「早習倭国旧事、可慕葵

霍忠節」(「早習倭国旧事、可慕葵霍忠節」)とその子孫を戒め、同二年五月二五日の

条に「明我朝之記」(「明我朝之記」)なる者を「真学者也」と評してゐるのは、支那

文化の羈縛より解脱して自国の伝統に覚醒せむとしたのである。同時に『百鍊抄』承暦

二年五月廿五日の条には、

「諸卿定申大宋国貢物事、錦唐黄等也、此事已為朝家之大事、唐朝与日本、和親久絶、

不貢朝物、近日頗有此事、人以成狐疑」(「諸卿定申大宋国貢物事、錦唐黄等也、此事已

為朝家之大事、唐朝与日本、和親久絶、不貢朝物、近日頗有此事、人以成狐

疑」)とある。これだけの事実を点出して再び日蓮に還らねばならぬ。彼は文応元年

『立正安国論』を著述し將軍時頼(一二三三)に呈した。主として法然門流の正法破壊のデ

カダン思潮を攻撃し、「近年ヨリ近日ニ至ルマデ天変地夭飢饉疫癘、遍ク天下ニ満チ、広

ク地上ニ迸ル。牛馬巷ニ斃レ骸骨路ニ充テリ。死ヲ招クノ輩既ニ大半ニ超エ、之ヲ悲マ

ザル族敢テ一人モ無シ」といふ時代で「金光明経ノ内、種々ノ災禍一一ニ起ルト雖、他方ノ怨賊国内ヲ侵掠スルコノ災まだあらは未露レズ……若シ残ル所ノ難、悪法ノ科ニ依ツテ並ビ起リ競ヒ来ラ者其ノ時ハ何ガ為ン哉。帝王者国家ヲ基トシテ天下ヲ治メ人臣者田園ヲ領シテ世上ヲ保ツ。而ルニ他方ノ賊来ツテ其国ヲ侵逼シ自界叛逆シテ其地ヲ掠領セバ豈驚カザラン哉。豈騒ガザランヤ哉。国ヲ失ヒ家ヲ滅サバ何ノ処ニカ世ヲ遁レン。汝須ク一身ノ安堵ヲ思ハ者、先四表ノ静謐ヲ禱ルベキ者歟」とは当時の各宗各派の個人的幸福主義の適切な批判であり、かゝる眼前の自国の弱点は他国の侵襲を誘惑するとの現実の正しき直観を示してゐる。この九年後文永五年にはかの元使が来たのであるから彼がこれの予言書たるを信じ主張したのはその宗教的信念からであつたが、承暦康治より百年後の時代の客観的事情をそのまま表現しそこに醸成せられたる民族的感情を爆発せしめたのであつて、「予言」といふことを狭く固定せしめて神秘化するのも否定するのも共に当らない。この時代の現実の表現に彼の眞価を究極せしめたいと僕は強調する。

「現実の正しき直観」に僕は日蓮の究極の価値を置く、と云つた。彼の『神国王御書』は短篇であるが、慈円の『愚管抄』と共に仏教徒の日本史に自己の史観を立てゝゐるの

は注目すべきである。仏に背いては梵王帝釈等諸王の国土も破壊すべき運命にあるといふに比論して「神ト申ハ又国々ノ国王等ノ崩御シ給ヘルヲ如ニ生身ニ崇メ給フ……片時モ背カバ国不レ可ニ安穩」と現実の国家に論及し、然るに神国たる我国に於て「如何ナレバ彼安德隱岐阿波佐渡等ノ王ハ相伝ノ所従等ニ責メラレ」とて自己に近き時代の痛切の事実につき、その不可思議に深き疑念を發してゐる。日蓮のこの現実の認識とそれに對する疑念とは正しい。又「仏記云……三衣ヲ皮ノ如ク身ニマトヒ一鉢ヲ兩眼ニアテタラシ持戒ノ僧等、大風ノ草木ヲナビカスルガ如ナル高僧等、我正法ヲ失フベシ」といふのも當時の實狀に適用して鋭敏である。又「此時梵釈日月四天曠ヲナシ其国ニ大天變大地天等ヲ起シテ諫ムルニ諫メラレズバ、其國中ニ七難ヲコシ父母兄弟王臣万民互ニ大怨敵ト成リ……自破国結句他国ヨリ其国ヲ責メサスベシ」とあるのも充分に現実的認識を持つてゐる。これらには何れにも僕の所謂日蓮の眞價がよく發揮せられてゐるのである。そして彼はつゞけて「今日蓮一代聖教ノ明鏡ヲ以テ日本国ヲ浮ベテ見候ニ」といひ「法華經ハ人ノ形ヲ浮ブルノミナラズ心ヲモ浮ベ給ヘリ」といつて、かゝる我国の現実に心理的批判を加へむとの意圖を示してゐる。併し日蓮のこの批判は如何なるものであらう

か。これが問題であり、こゝに鋭く注目せねばならぬ。彼は結局これらを真言念仏禪宗等のみが上下全般に信仰せられ法華経がしかせられぬ故との一点に帰着せしめてゐるのであり、又彼のこの結論も全然無意味でないことは前述の通りである。法華経の開顕せる万善同歸の教義は聖徳太子の我が国民生活原理に摂取させ給うた所であるから、日蓮の本経を帰依の經典として撰択した心底にもこの点は触れられてゐたであらう。そして法華経の行者としての一致に依つて他国の「侵逼」に備へむとしたのにも時代的意義は認めらるゝ。彼の他宗攻撃の理由あることは云ふまでもない。これらに依つて日蓮の我国の現実への批判は、適切な部分があつたからして、「適切」といふことが心理的への第一歩といふ意味では彼も亦心理的である、と云へようが、これは寧ろ僕が日蓮の価値を心理的に考察してゐるに基いてゐる、と云へば明瞭である。即ち日蓮自身の批判の現実的意義は強いものがあり、又心理的批判への意図に於いて歴史的客観性をも含んでゐるが、全体としては一見積極的であつても外面的たる点に於て、現代社会の弊害矛盾を指摘してその改革を主張する人々の強力統制論と近親関係を結ぼうとする。こゝには究極原理を明確ならしむる鋭烈の心理的批判がないのである。「此鎌倉ノ御一門ノ御

繁昌ハ義盛ト隱岐法王マシマサズンバ、争カ日本ノ主トナリ給フベキ」と『愚管抄』に  
よく見らるゝが如き論法を用ゐて日蓮自身も法敵なければ「争カ法華経ノ信者トハナル  
ベキト悦ブ」（種々御振舞御書）と云ひ承久の変について「天下第一代未聞ノ下剋上  
出来セリ」と云つても「相州ハ謗法ノ人ナラヌ上、文武ヲ究尽セシ人ナレバ天許テ成ニ  
国主、随テ世モ且ク静カリキ」（下山御消息）とあるのは仏法と善政主義とに基準を置  
くからの「下剋上」批判の弛緩を示してゐる。本居宣長の「中ごろ、朝廷の大に衰へさ  
せ給へること有しは天下の乱によりての事とおもふは普通の料簡なれども実はこれ、朝  
廷の衰へさせ玉ふによりて天下は大に乱れて万の事もおとろえ廃れしなり、此道理をよ  
く思はずはあるべからず」「惣して武将の御政は、かの北条足利などの如くに大本に、  
朝廷を重んじ奉ることの闕ては、たとひいかほどに仁徳を施し諸士をよくなづけ万民を  
よく撫玉ひても、みなこれ私の智術にして道にかなはず」（玉匣）とあるのがまことの  
心理的批判に基く究極の原理であるのだ。日蓮の眼はまだまだ眩惑してゐる。

日蓮は所謂龍口の法難を叙して「此ニテゾ有ランズラント思フトコロニ案ニタガハズ  
兵士ドモウチマハリ騒ギシカバ左衛門尉申様、只今也ト泣ク。日蓮申様、不覚ノ殿原哉、

是程ノ悦ヲバ笑ヘカシ、イカニ約束ヲバ違ヘラル、ゾト申セシ時、江ノ島ノカタヨリ月ノ如クナル光物鞠ノ様ニテ辰巳ノカタヨリ戌亥ノ方ヘ光リ渡ル。十二日ノ夜ノアケグレ（味爽）人ノ面モミエザリシガ物ノ光月夜ノ様ニテ人々ノ面モミナ見ユ。大刀取目クラミ倒レ臥シ」（種々御舞振御書）と、その実景を劇的に目前に浮べしむる強い筆法を用ゐてゐる。兵士どもは「コノホドハイカナル人ニテヤオハスラン、我等ガタノミ候フ阿弥陀仏ヲ謗ラセ給フトウケ給ハレバ悪ミマキラセテ候ヒツルニ目ノアタリ拝ミマキラセ候ヒツル事ドモヲ見テ候ヘバ尊サニ年頃申ツル念仏ハステ候ヒヌトテ火打袋ヨリ珠数トリ出シテ捨ツル者アリ、今ハ念仏申サジト誓状ヲ立ツル者モアリ」とあるのは念仏に外的魔力を認めてゐた人々に日蓮の印象せしめたものも亦外的魔力に外ならぬことを示してゐる。彼には現実的直観は動きつゝあつたがその全体の表情は魔術的であつた。彼は確に鎌倉暗黒時代の一大炬火であつたが永遠の白日を仰ぐことはなかつたのだ。

（九・一一・二五）

## 『山鹿素行先生日記』から

——括弧内訓読文は編者（葛西順夫）の註——

寛文五年（素行四十四歳）

十二月十三日……此夕家君（素行父）罹微恙、遂不起、二十二日逝去、医師久保玄貞、浅尾長沢来、用薬終無起、八十一歳、葬宗三寺、（此の夕、家君微恙に罹る、終に起たず。二十二日逝去。医師久保玄貞、浅尾長沢来り薬を用ふ終に起つなし。八十一歳。宗三寺に葬る。）

同 六年

三月十九日 読礼運、二十一日。読祭法（礼運（『礼記』）を読む。二十一日祭法（『礼記』）を読む。） 四月三日 亡親百日、詣宗三寺（亡親百ヶ日、宗三寺に詣づ。）

とあつて、素行が父（貞以）の逝去が動機となつて祭祀についての研究を初めてをるところを明示してゐる。この年、素行はその著『聖教要録』が幕府の忌諱きいに触れて赤穂流謫（十年間）となるのである。この時のことは『配所残筆』にも見えてゐるが、『日記』には次の如くある。

十月三日 未刻北条氏長（安房守）以切紙招予、有公用、依盥漱拜神主（亡父靈）、書旧識及遺書、食晚炊觴妻子云、事皆有命不可患、如此節丈夫之妻子可見其志、予欲見母君、母君必悲歎、故不謁焉、且明日有会津輕氏之約、供人行可告之、乃新衣服整礼容、省供輩至彼地（氏長邸）云々。（未刻、北条氏長（安房守）切紙を以て予を招く、公用ありと。依て盥漱して神主を拜し旧識及び遺書を書く。晚炊を食し、妻子に觴して云はく、事皆命あり、患ふべからず。此くの如き節に丈夫の妻子はその志を見はすべし。子母君を見んと欲すれども、母君必ず悲歎せん。故に謁せず。且つ明日津輕氏に会するの約あり、供人行いて之れを告ぐべしと。乃ち衣服を新にして礼容を整へ、供輩を省きて彼の地（氏長邸）に至る云々）

かくて素行は同月九日質明（未明）江戸を発し、二十四日申刻赤穂に著したのである。ついで

霜月

四日 妻子至、（去月十七日発江戸）同氏千介、高橋七右衛門従之（妻子至る。（去月十七日江戸を発す）同氏千介、高橋七右衛門之に従ふ。）

十日 初読論語、将述句読、十一日、水仙花破顔（初めて論語を読み、将に句読を述べんと

す。十一日、水仙花破顔(開花)

二十一日 藤井氏又介帰国、告<sub>ニ</sub>萱君(素行母) 無事之報<sub>一</sub>(藤井氏又介帰国し、萱君(素行母)に無事の報を告ぐ)

二十二日 夙点茶焼香拜神主、食事上饌、今日愚弟自大阪発价(あきはや)(夙く点茶焼香して神主を拜す。食事に饌を上る。今日、愚弟大阪より价ふひを發す。)

## 十二月

十九日 自今日沐浴齋、凡居喪則無齋戒、予不幸而不得居喪、從世俗或嘗魚味、故有此齋戒。(今日より沐浴齋す。凡そ喪に居れば齋戒なし。予、不幸にして喪に居るを得ず。世俗に從つて或は魚味を嘗む、故に此の齋戒あり。)

二十一日 明日当小祥忌、故与愚妻滌祭器、正喪服、掃灑靈座之地、備<sub>ニ</sub>神主之服御<sub>一</sub>、夜設燭焼香点茶具饌、挿水仙花、夕設蕎麵、(この水仙花は十一日の候に水仙花破顔とあつたそれであらうか)(明日は小祥忌に当る。故に予、愚妻と祭器を滌あはひ、喪服を正し、靈座の地を掃灑し、神主の服御を備ふ。夜は燭を設け香を焼き、茶を点じ饌を具へ水仙花を挿す。夕に蕎麵を設く。)

二十二日 快霽、質明立燭二基、焼香点茶拜礼、待明供盛饌、同氏千介、高橋七右衛門佐之、有酒盃三汁七菜三献、茶菓濃茶菓子、三品（快霽、質明、燭二基を立て、焼香点茶して拜礼し、明くるを待つて盛饌を供ふ。同氏千介、高橋七右衛門之を佐く。酒盃あり。三汁、七菜、三献、茶菓、濃茶、菓子、三品）

（祝詞） 今月今日、正当小祥忌、孤子不幸十月三日貶播陽、不得侍墓側、拜神主於異境、最畏 尊靈之不安、今備蘋蘩之志、哭踊不止、遙懷去年今日、尊靈如在上、清音如聆耳、思其居所、思其笑語、日月不奄、速至小祥之忌、世変難計、忽沈無妄之咎、与萱君及弟姉等、一処不迎此期、罪逆甚重、伏乞靈鑑之宥恕、而尚享之、（祝詞）（今月今日正に小祥忌に当る。孤子不幸にして十月三日播陽に貶されて、墓側に侍するを得ず。神主を異境に拜するは最も尊靈の不安を畏る。今蘋蘩の志を備へ、哭踊して止まず。遙かに去年の今日を懐ふに、尊靈、上に在すが如く、清音耳に聆くが如く、其の居所を思ひ、その笑語を思ふ。日月奄らず速かに小祥の忌に至る。世変計り難く、忽ち無妄の咎に沈み、萱君及び弟姉等と一処に此の期を迎へず、罪逆甚だ重し。伏して乞ふ、靈鑑之を宥恕して尚くは之れを享けよ。）

今夕立燭、及深更、悲歎不淺、夜既參半、思過聖戒、抑之閉神主横戸。（今夕、燭を立て深

更に及ぶ。悲歎浅からず。夜既に参半ばにして、聖戒に過ぐるを思ひ、抑へて、神主の横戸よこどを閉づ。十二月二十七日 中朝実録（後に事実）成。今その「祭祀章」から引用して素行の思想、その主張する「日用之学」の根柢を示したのである。

「蓋人未嘗無レ思ニ其父祖ニ既有レ念ニ其父祖ニ則未嘗無レ念所ニ其由出ニ、故遠乃思ニ基本始ニ、近乃慕ニ其父祖ニ、而祭祀之礼起、況本始之有ニ大功ニ父祖之有ニ大教ニ乎……祭祀不レ致ニ其礼ニ則神不レ可レ享レ之、礼儀不レ以ニ其誠ニ、則神不レ可レ格、礼致誠立而后可レ得ニ祭祀之実ニ」然乃明ニ人倫日用之道ニ、五典惟秩三德ツイヂ惟致則当レ猶レ視レ吾之、神勅豈夫空乎」（蓋し人未だ嘗てその父祖を思ふことなくばならず、既にその父祖を念ふあれば、未だ嘗てその由りて出づるところを念ふことなくばならず。故に遠きは乃ちその本始を思ひ、近きは乃ちその父祖を慕ふ。而して祭祀の礼起る。況や本始の大功あり、父祖の大教あるをや……祭祀その礼を致さざるときは神之を享くべからず。礼儀その誠を以てせざるときは、神格いたるべからず。礼致きはまり誠立ちて、而して后祭祀の实を得べし）（然れば乃ち人倫日用の道を明かにして、五典ごてん惟れ秩つづで、三德さんとく惟れ致きはむるときは、当に猶ほ吾れを視るが如しの、神勅、豈にそれ空しからんや。）

## 親鸞と近松

昨年暮に僕は友人と二人で房州鹿野山かのに登つた。こゝには聖徳太子(五七四)の開基にかゝる神野寺があると聞いたからである。雪解のため自動車自動車が頂上まで行かないので、四、五町の所を、借り受けた番傘をさして、自動車の下りくだりまでの僅か二十分許りばかの間に急いで参詣をすませなければならなかつた。それに、著名の四囲の山谷は雨に霞んで眺望を許さないで、時間的にも、空間的にもその時の印象は全く瞬間的でしかなかつたけれども、道を曲つて神野寺の大きな山門の前に出た時、それをくゞつて本堂まで行く間の、それらの朱に塗上げられて所々緑色を配合した、あくどいケバケバしさのみははつきりと思ひ浮かべられる。それは一口に云へば所謂いはゆるグロテスクな感じであつて、僕がその前に想像に画いてゐた、さゝやかな素朴なそれとは全然懸け離れてゐたのである。こんな辺陲の地に、太子創開の縁起を持つ寺院が、古くから地方民衆の信仰をつないでゐたことは、民族生活の開展とその統一を思はしめる興味ある事実であるが、それが時

代の経過と共に、伝説と俗信仰との粉飾に埋没せられてきたのである。この建築物そのものは江戸時代になつてからの改築で、その後の修理もあつた由であるが、僕はこれから受けたこのグロテスクな印象が、丁度その頃読んだ近松(二七五三)の『聖徳太子絵伝記』のそれと共通のものがあることに気付いたのである。平安末期から鎌倉時代の推移すると共に、我が日本の過去の精神生活は外的に集成せられ、内的に蘇生せられてきた。それは諸種の説話集や史書の類が示す所であり、親鸞(二一七三)日蓮(二二八三)等の新興宗教はその内的化の適例である。そしてそれが室町時代となつてからは謡曲の素材となつて能楽として、江戸時代には浄瑠璃歌舞伎等として舞台の上から強烈の効果を以つて民衆に普及せられた。之等が民衆をして過去の日本に親しましめた効績は非常に大きいものがあつて、その余効は現在にまで根強く作用してをるのであつて、それに比すれば学校で習つた歴史などの知識はその実力は薄弱極まつたものである。この過去のリプレゼンテイションの中にあつて、聖徳太子の主要の地位を占めてゐることは言ふまでもないことで、江戸時代の浄瑠璃化せられたものでも、この近松の作を初め、紀海音(二七四三)その他三、四はあるであらう。しかしこれ等は殆んど取るに足りないものであるから、

近松の作についてののみ言ふことゝする。近松は太子については充分諸書によつて研究してゐるらしいが、例によつて太子馬子方うまこを善人、守屋もりやを悪人、しかも形相ものすごき人物として表はしてゐる。そしてお家騒動的事件を中心に置いて、結局太子方の勝利、目出度めでたし／＼となつてゐるのである。本来劇の主たる任務は、個体の全体への融合を、観客の内心に味はしめることにあることは言ふまでもないことであるが、この高尚なる本務が近松によつてなし遂げられてゐるとはどうしても云へないのである。この太子劇も、その代の彼の時代物全体の特色がこゝにも現はれてゐるのであるが、全く民衆的娯楽程度のものでその材料の豊富と趣向の奇抜とに彼の技量があるのであらうが、それらの過大の誇張は、暗示の深刻をひそめしめてゐないからして、徒いたづらにグロテスクな雰囲気をつくるのみで、僕等には感覺的の不快をすら与へるのである。僕が神野寺の建物と共通の気分があるといつたのもこれであつて、こゝに徳川時代精神そのものの特質が示されてゐると云つて過言ではない。それは生命は物質によつて換置せられたのであるから、宗教は現世利益げんぜりやくを妥当とし、芸術は道具立の濫費らんびとなつて生命の威厳はどこにも求められなくなつたのである。僕は、聖徳太子を日本仏教の祖として仰ぎまつることすらいけな

いと思ふ。親鸞も徳川時代を通過する間に、無暗に伝説的裝飾が多くなつたが、彼をも本願寺の開祖として考へることは、大きな誤謬である。親鸞はその『皇太子聖徳奉讃』に

上宮皇子方便し

和国の有情をあはれみて

如来の悲願を弘宣せり

慶喜奉讃せしむべし

と云つて、民族的生活の全開展に着目して、その統一的生命として太子を『和国の教主』と奉讃してゐるのである。併しながら近松の作品は民衆の安易の理解に受け容れられたのであつて、近松に於て已に然り、況や諸他の群小作家に於てをや、である。そしてそれらの後世に及ぼせる影響は実に測るべからざるものがあつて、国民生活の伝統を考へるとき、そこに卑俗の調子が伴はしめられるのである。今の場合に於ても、聖徳太子の眞精神と国民生活に於ける地位とは、この神野寺の建物や近松の作品にあらはされてゐる、或る気味悪き感觸と何の関係もあるべくもないのである。そしてそれらの無生

命の故に現代に於ては次第にその実力を失ひつゝあるが、一方正しき精神科学的研究と新鮮の芸術的表現とによつて現実生活のうち生きしめられる努力が行はれてをらぬ所からして、国民生活の根柢とは全く無縁の、浮き草の如き思想とか文学とかゞ享樂せられてゐる現状である。国民生活の伝統は実に吾々の生命の大地である。が、それはハツキリ自覚せられ内的化せられて、開展して行く新時代の指導的威力たらしめる用意を怠るならば、それは花を咲かしめぬ朽ち果てた根幹にすぎなくなる。そしてこの生活の伝統を全く顧慮せぬものが近代日本の全般的思潮であることは、あまりにも重大危険である。そして、その根柢たる教育界に於て即刻その匡正きやうせいが実現せられねばならないのであつて、我が一高に於ける神社建立運動の意義もこゝに關聯してゐるのである。

(一〇・二・一五)

## 宗教生活の国語の表現

仏教が仏教として流行してゐても宗教や信仰そのものが盛んであるとは言へぬのであ

つて、それは外国文化の優勢である現象に外ならぬのである。まづ現実の生活が第一である。即ち現実生活の体験とその表現とに宗教が認められねばならぬ。それであるから僕は現実の生と密着せぬ教義ドグマよりも生の体験の告白を、その国語の表現を重要視しようとするのである。無住(二三二六)の『沙石集』(二二二六)に斯くいつてゐる、その前後をつめて引用すると「和歌の一道を思ひとくに、言少く心を含めり。惣持といふは即ち陀羅尼だらなり。仏若し我が国に出給はゞ和国の詞を以て陀羅尼としたまふべし」と。この言は勿論歌が大切に考へられてその功德に神秘的伝説の多く産出せられた中世の一般的風潮を背景としてゐるが、仏教といつても現実の生をはなれては存在しうべくもなく、その生の表現の中心は日本語としての和歌であり、その歌即ち陀羅尼である、としてみるならば、この言の普遍的意義が汲み得らるゝであらう。万葉集の中に仏教の思想を歌へる歌が見えてゐて、たとへば卷十六には

世間無常を厭いとふ歌二首

生き死にの二つの海を厭はしみ潮干しほひの山を偲しのびつるかも

世の中のしげきかり庵に住みくゝて至らむ国のたづき知らずも

とある。之等は当時の新思想享受者の遊戯にすぎぬもので、その現実の生の無内容を示してゐるのである。それであるから国語の表現といつても国語でさへあればよいとするのではなく、表現そのものにその真偽が批判せらるゝことを要する。友松円諦氏等がいくら高遠の教理を説いても、西行法師の「花の下にて春死なむ」などの歌に感心してゐるのでは、「百日の説法屁一つ」といふ言の発生的語感が喚起せしめらるゝのである。そして又現実の生とは我々の社会的道德的生活に外ならぬからして、こゝに宗教と道德との問題が起つてくるのである。歎異抄に「親鸞は父母の孝養きやうようのためとて念仏一返ねんぶつにてもまうしたることいまださふらはず」とあるのは、宗教と道德との乖離かいりとして考へられがちであるがさうではない。「孝養」といふのは源氏物語等に「けう」とあると同じで、善供養の意であつて通常の「孝行」の意はむしろ後世のものである。それであるから、前にあげた『沙石集』に、盲目の母を養ふ童のことを述べて「孝養の志し誠ある故に冥の御意もありけめ」と、通常の意に使用してゐる時には孝養を仏意にかなふことゝしてゐるのである。現実の道德生活と無縁の宗教生活とは個人の享樂であるから、こゝに宗教と道德との根本に於ける関聯が存在してゐるのである。宗教と道德と芸術との関係を

斯く考へて、この見地から我が国の民族的宗教生活の開展とその国語の表現について研究することは無限の興味がある。今は序論としてこれのみにして置く。(二〇・四・五)

## 発見の生

(素行の孟子性善説論)

仮定にすぎた観念論は実際には現実に無力の小賢しき理知主義にすぎぬのである。

孟子の性善説は一箇のヒポテーゼのみ。この故に實地に適用すれば人民無過誤論の口実となつて、君主に絶対の徳政を強要せむとするのである。孟子性善説はデモクラシー理論となる危険をもつてをる。素行は孟子の説を直接批判してをらず、寧ろ孟子性善説の真意を開示せむとする態度をとつてをる。併し乍ら素行の論は新しくて已に性善説と云はるべきではないからして、こゝから僕は孟子に対する批判的意義を汲みとるのである。「性者生々無息、感通知識底耳、更以善惡不可言、善惡之名、因発見之迹可見也。孟子謂性善、只性之方象無可謂、強名之曰善」(性者生々無息、感通知識底耳、更以善惡不可言。善惡之名、因発見之迹可見也。孟子謂性善、只性之方象無可謂、強名之)

曰レ善<sup>ト</sup>」と云つてをる。この「発見之迹」といふのからとつてこの論の題としたのである。善と悪とは外に樹てらるべき道德的規準ではない。人生事実、現実の諸問題に対する的確の判断と処置との結果がすなはち善悪と名付けらるゝのである。こゝに実行の生の威力をみとめしめらるゝのである。「名レ之曰レ善」とは、親鸞の「かたちもましまさぬやうをしらせんとて、はじめて弥陀仏とまふすぞときゝならひてさふらふ」といふのを思はしめ、うごきゆく生の律動がそのうちに流れてをるのである。素行は「性之本然只生々無息耳、不レ可ニ以名方<sup>ト</sup>」、孟子名<sup>ス</sup>其迹<sup>ト</sup>曰<sup>ク</sup>性善<sup>ト</sup>」（性之本然只生々無息耳、不レ可ニ以名方<sup>ト</sup>方<sup>ト</sup>、孟子名<sup>ス</sup>其迹<sup>ト</sup>曰<sup>ク</sup>性善<sup>ト</sup>）と孟子を弁護してゐるが、結果としての「迹」を固定せしめて、却つて実践の標的とせむとする時は、そこに人生の概念としての理知主義が立ち現はれ、善と悪とはつきざる仮説の空論にまとひつかれるのである。「孟子道<sup>ニ</sup>性善<sup>ト</sup>、言必称<sup>ク</sup>堯舜<sup>ト</sup>」、人以<sup>テ</sup>堯舜<sup>ト</sup>為<sup>レ</sup>的<sup>ト</sup>、性以<sup>テ</sup>堯舜性<sup>ト</sup>為<sup>レ</sup>的<sup>ト</sup>、道<sup>ニ</sup>性善<sup>ト</sup>与<sup>レ</sup>称<sup>ク</sup>堯舜<sup>ト</sup>二句、正相表裏<sup>ト</sup>」（孟子道<sup>ニ</sup>性善<sup>ト</sup>言必称<sup>ク</sup>堯舜<sup>ト</sup>、人以<sup>テ</sup>堯舜<sup>ト</sup>為<sup>レ</sup>的<sup>ト</sup>性以<sup>テ</sup>堯舜性<sup>ト</sup>為<sup>レ</sup>的<sup>ト</sup>、道<sup>ニ</sup>性善<sup>ト</sup>与<sup>レ</sup>称<sup>ク</sup>堯舜<sup>ト</sup>二句、正相表裏<sup>ト</sup>）。素行は堯舜をいつても「聖人感道知識之跡」に注目してゐるのである。堯舜を性善の客観化としてみて「正相表裏」と云つてをるのである。孟子にとつて堯舜

の聖代は究極の理想であつた。最後の足場であつた。これを以て現実批判の抛り所として叱咤したのであつたが、それは動かぬ概念であつたからして、現実を支へて開展せしめる批判の実力を欠いてをつた。堯舜を素行は性善の客観化の表現とみたのであるが、孟子にとつては永久につかむことの出来ぬ彼岸の偶像たるをまぬがれなかつたのである。素行のリアリズムがこゝに認められるのである。

(一〇・五・二五)

## ひらくる世界

道元『正法眼蔵随聞記』研究

道元(二二〇〇)は開展の生に随順せむとしたのである。この故に彼は所謂個人主義ではない。自己このまゝを絶対化して人生を知解するの楽天的態度は彼のとることではなかつた。「この道は人々具足なれども道を得ることは衆縁による。人々利なれども道を得ることは衆力を以てす」といふ、衆縁といひ衆力といふのは彼の客観的精神の熱意をしるばしむる。「人にたふとがられ供養せられんと思ひ、剩あまつさへ衆僧は皆な無当不善なれども我れ独り道心もあり善人なる由を方便して云ひきかせ思ひしらせんとする様もあり、是

れ等は云ふに足らざるもの」とある。自己を善人として他と區別せむとはせぬのである。彼の修行精神主義は人生の普遍的意義に徹到してそこに自他平等の世界を求めむとしたのである。

「いはゆる出家と云ふは、第一まづ吾我名利を離るべきなり」とは彼のこの信念をよく示してゐる。これは通俗の出家概念に対して革新的意義を有するのであつて、同時に釈迦出家の真意を復活せしめたる宗教改革者の叫びであると云へるのである。「学人はすべからく貧なるべし」と云ふのも釈迦の故実をよみがへらしめたのである。物質よりも生命を求めたからである。又云ふ「利他の行も自制の行も、たゞ劣なる方を捨て、勝なる方をとらば大士の善行なるべし。老病を扶けんとて水菽の孝をいたすは、只今生暫時の妄愛迷情の喜びばかりなり」と。これは注意すべきである。水菽の孝捨てよといふのではない。たゞ不断により生命ある、より積極的なる行動を持続せしめよといふのである。現代打破の新世界をひらかしめむとするのである。この故に水菽の孝の単純なる否定よりもそれに生きるのが『勝なる方』をとることになるのである。しかし乍らそれのみに止つてをらず、更にそれを撰取すべき全体を究めむとするのである。こゝにある

のは常に生命の持続である。これなしには進むも退くも死あるのみである。道元の哲学は生のそれである。

(一〇・五・二五)

### 三条実美公の歌(上)

近く三井甲之先生によつて「君臣の大義を詠じて古今第一人」と、その価値を世に闡明せられた三条実美公(一八三七)の歌集『梨のかた枝』を披見することを得た。高崎正風(一九二二)編、続日本歌学全書第十二編に収められてゐるから、読者諸兄の一読の端緒にもと筆をとつたのである。上巻三〇四首下巻二〇六首計五百十首あるが、収録にもれた歌も相当にあると見られるのである。上巻は維新以後の歌、下巻は所謂七卿落として公が長州及び筑前大宰府にをつた時の歌で編者の言によれば「山口大宰府あたりにおはしけるほどのは、自ら西瀕遊草と題し給ひて三巻ばかりの御草稿あり、それを写しとりて、ひなにさすらへしほどの歌どもとするして末につけて」とある。

所謂七卿落として、文久三年八月十九日暁、公等七卿が京洛妙法院を発足、降り出し

た雨のなかを長州へと落ちて行つたとき公は実に二十七歳の青年であつた。その他三条  
にしずみとも西季知（一八八一）五十二歳、ひがしくぜみちとも東久世通禧（一八三三）三十一歳、壬生基修二十九歳、四条隆謨  
 三十六歳、錦小路頼徳二十七歳、さほのよし沢宜嘉（一八三三）二十九歳。同二十七日夜、周防国三田  
 尻着。七卿のうち、沢宜嘉は平野国臣（一八二八）と共に十月十一日但馬国生野いくのに挙兵、敗  
 戦してその行方不明が伝へられ、錦小路頼徳は翌元治元年四月二十五日、砲台巡視に赴  
 いた馬関に於いて病歿してゐる。君側の奸を掃ひ、聖旨を奉体しようとして京師に入つ  
 た長兵は七月十九日禁門の役利あらず、くさかげんすい久坂玄瑞（一八四〇）まきいづみ真木和泉等こゝにたふ仆れたので  
 あつた。これより長藩にては俗論党勢力を占め、征長軍との講和条件の一つとして公等  
 五卿は筑前黒田藩に託されることゝなり、翌慶応元年二月十三日大宰府延寿王院に入つ  
 た。二年十二月二十五日 孝明天皇、宝算三十六歳にて崩御あらせられた。三年十二月  
 九日、五卿復位、十九日大宰府出発、廿七日京都還帰。——この間、公は配流の身とし  
 て辺地に何等なすなくして日月を空過せしめたのではなかつた。長藩の俗論党、黒田藩  
 の佐幕派のあひだにあつて、終始尊攘の大義をとつてうごかず、しかもそれを各地有志  
 の勸説連絡のうちに実現せしめて行つたのである。公の生涯の研究は、すなはち明治維

新史のそれとなるからして、こゝに説きつくすべくもない。明治二十四年、二月十八日、公の病危篤を告ぐるや、明治天皇公の第に親臨あらせられ、正一位に叙し給うたのである。薨年五十五歳、その墓所は音羽護国寺にある。公の一生はむしろ短命といふべきであるが、又実に測るべからざる長きいのちを感ぜしめらるゝのである。

○

公の生涯をまとめて記述したものに『三条実美公年譜』三十巻がある。明治三十四年宮内省の刊行である。このうちに極めて少数ながら公の歌が散見し、歌集にないものもあるのでこゝに抄出しておく。

慶応二年丙寅公三十歳

正月朔、公等従士ニ正寝ニ面シ佳節ヲ祝ス……公等各試筆ノ咏アリ。左ニ載ス

三 条 実 美

あまぐもの遠き国への旅にても春を春とは思ふ今朝かな

(原万葉仮名)

三 条 西 季 知

大野なるみかさの山は雪ながら春きてけりとけさぞかすめる

東久世通禧

天離あまざかるひなの手ぶりはかはれども有しににたるけさのはるかな

壬生基修

なにかものこゝろうかれぬ春ながらとしのはじめはうれしかりけり

四条隆調ハ流慶ノ二字ヲ書ス。・・・・・・

是ヨリ後公等論語万葉集ヲ講シ時ニ詩ヲ賦シ古文ヲ誦ス

五月九日公ノ従士山本兼馬死ス金ヲ賜テ之ヲ葬ル。兼馬名ハ忠亮、土藩士ナリ、初メ公等幕吏ノ迫ラン事ヲ慮リ従士ニ令シ死ヲ決シテ之ヲ待タシム、兼馬素ヨリ肺ヲ病ミ或ハ咯血ス、緩急節ヲ失ハン事ヲ恐レ絶命ノ詞ヲ賦シ自ラ腹ヲ割テ死ス、公等之ヲ憐ミ金十五兩ヲ賜ヒ、公別ニ二十兩ヲ賜ヒ是夜寅刻神式ヲ以テ宰府光明寺ニ葬ル、公傷悼ノ詠アリ

山本忠亮が身まかりたるをいたみて

つるぎたちわが身のうきにそひきつゝ旅ちの露ときえし人はも

慶応三年丁卯公三十一歳

正月朔、公等従士ノ賀正ヲ受ク、是日晴暖、従士水野溪雲齋、土方楠左衛門以下十二人來リ謁シ正ヲ賀ス、屠蘇及ビ煮餅ヲ賜フ、公等筑紫ニ移リシヨリ已ニ三歳、各和歌ヲ賦シテ志ヲ言フ、公ノ所詠ニ

旅路とてみのふり行もしらぬまにけさははるにも成ぬとぞきく  
草枕あかしくらして歳をのみつめるや何の心づくしぞ

慶応三年

十月三日忠成公（公の父実<sup>さねつむ</sup>万公のこと）忌辰、公遺詠ヲ掛テ之ヲ祭り和歌ヲ賦シ懷ヲ述ブ（これは『梨のかた枝』に出てゐるから後に引きこゝにては略す）

十一月十五日、是日土州藩士坂本竜馬、中岡慎太郎京師ノ逆旅ニ殺サル、慎太郎公等ノ命ヲ奉ジ本年三月ヲ以テ京師ニ赴キ爾來諸藩士ノ間ニ周旋シ同藩坂本竜馬ト共ニ河原町ノ逆旅ニ宿ス是夜新撰組ノ徒襲テ之ヲ刺殺ス、報宰府ニ達ス、翌月五日同志等本願寺ノ旅寓ニ於テ祭典ヲ修ム、公和歌ヲ賜ヒ以テ追悼ノ意ヲ表ス。

もののふのそのたましひやたまちはふ神となりても国守るらむ

いかなればおもはぬ風に絶ぬらんよにもかゝれる人のたまのを

この第一首目の歌は、歌集の方にては「大山道正が身まかりけるを悼みて」三首のうち第二首目になつてゐる。

十二月十九日、午刻公等宰府ヲ発ス、発ツニ先チ菅廟ニ詣シ宝劍一口ヲ納メ延寿王院信全等ニ別ヲ告ゲ和歌ヲ賦シテ之ヲ与フ（歌集に出づ）……宰府ノ傍近通古賀村老医陶山一貫齋嘗テ公等ノ知遇ヲ受ク、乃チ奉送ノ意ヲ表セントシ夫婦相携テ刈萱ノ関址ニ至リ薦ヲ路傍ニ布キ拜仕ス、既ニシテ公等ノ駕至リ昇夫輿ヲ華表ノ前ニ卸ス、送ル者皆此ニ至テ反ル、一貫齋亦輿ニ近キ別ヲ叙ス、時ニ公等ノ駕駐マル事久シ、一貫齋更ニ大声ヲ発シテ謡曲高砂ノ一節ヲ唱フ、……公、和歌二首ヲ賦シ之ヲ与フ

たちかへるわれをおくと老人の翁さびせしことを忘れじ  
送り来る人の情のうれしさにこゝろにとむる刈萱のせき

明治十年公四十一歳

十二月十五日、公伝家ノ薰香ヲ献ズ、表文ニ曰ク（略）公又添ルニ一首ノ国雅ヲ以テ

ス

たきものゝよゝのにほひをつたへきてふるきためしをおふぞかしこき

天皇御感 御製ヲ賜フ

三条太政大臣の奉りしたきものゝすぐれたるをめでゝ

こゝのへのくもゐに匂ふたきものゝかをりにきみがこゝろをぞしる

公自身のこの歌は歌集にも見えてゐるのであるが、こゝには公にたまはりし 御製を掲げまつつてあるので特に引用しておきたいのである。このほか、公としきしまのみちとの関係を示すやうの記事をあげるならば、公の父実万公(一八〇二—一八五九)が安政大獄に連坐して幽閉せられてをつたとき、公が父君をなぐさめられるに菅原道真(八四五—九〇三)の故事を以つてしてゐることは看過すべからざる事実であつて、後年公が大宰府に配流せられて菅公をしのべることは当然のことと云へようが、この兩者の不可思議の心的脈絡の必然性がこゝに示されてゐるのである。実万公は翌六年十月六日幽囚のうちに逝去してしまつたのである。――

安政六年公二十三歳

六月朔、公書ヲ忠成公(実万公)ニ寄セ幽居ヲ慰問ス、其書中ニ曰ク

一大鏡中所見 菅公の御歌たゞよふ御名水澹の字（この前五月三日実万公落飾して澹空と称したからである）清明之御趣意に符合管見入御覽候也

大 鏡（菅公つくしにてよみ給へる御歌の中）

さりともとよをおほしめされけるなるべし月のあかき夜

かみならずたゞよふ水のそこまでもきよき心は月ぞてらさむ

これかしこくあそばしたりかし、げに月よりこそはてらし給はめと

忠成公之ヲ得テ感吟措カズ

文久二年十月十二日、公は、攘夷断行のことを幕府に命ぜさせ給ふ勅書を奉じ、東下したのであつたが、その後間もなく、朝廷因州藩主池田慶徳（相模守）に勅して江戸に至り公等をたすけしめられたが、この二十日、即ち出発の前日に当つて大原重徳は書に公に寄せ、慶徳の依信すべきを告げたが、その文中の一節に次の如くある。

且又松平相模守事至極勤王心純一ニテ小生等感心之至ニ候断然タル所存赤心故愚家ニモ来臨被致種々心底申述候事ニ候歌ヲ被贈

玉の緒はよしたゆるとも一筋に我おほぎみのみことさゝげむ

又帰ルニ臨ミ勤王之事思程成就不致バ再面会致サズト被申候 実ニ 朝廷之御依頼此

人ト存候(下略)

これはしきしまのみちによる同志連絡の実例の一つとして、こゝに銘記しておかねばならぬものである。

こゝまで書きつゞつて来て丁度予定の紙数に達してしまひ肝心の『梨のかた枝』に入ることのできなくなつたのは残念であるが、やむをえず次号にまはすことゝしたい。

(一一・四・二五)

### 三条実美公の歌(下)

前叙のごとく『梨のかた枝』の歌は下巻の方が古いものであるからして、まづそれから見てゆくことにする。

公が京師を去つて長州へ落ちたとき、きのふまで君側にあつて補弼しまつゝた 孝明天皇に今よりはしたしく仕へまつることのできなくなつたこと、それは公にとつて云ふべからざる大きな悲しみであつた。そして公は自らの臣責をつくしえざるその不忠を歎

き、しかも辺地にあつて生きながらへしめらるゝ君のみめぐみをかしこみまつゝたのであつた。み空をあふぎ、ふきくる風に、四季の推移につけてしのぼるゝのはただに都のことであつた。かゝる公のひそめる心を、都のかたに通はしめたのは、公の従士等であつて、その人々は公の意をうけ、万難辛苦にたへしのんで京に入り、その使命をはたすのに懸命したのである。以下に出来るかぎり多く公の歌をあげたいのであるが、僕ごときものゝ任意の撰択を加へざるをえぬことは許していただきたい。

○

正月九日山口にて

大君はいかにいますとあふぎみれば高天の原ぞ霞こめたる  
大君のおほみ心をそよとだにこちふく風よわれにつたへよ  
うれたさのやる方なくて花鳥の色音をさへもかこちけるかな  
さまざまに思ひ乱れて文机のふみみるだにも物うかりけり

二月十日あまり夜深くねざめけるに有明の月さやかにてれり菅公の御歌の情など  
思ひて

古への空さへおもひいでられてあはれも深きありあけの月

折にふれて六首のうち

のどかなる心はなしに百とりのなきのみなきてくらす春かな  
百千鳥ちどりはなけどけふくとわが待つ人は帰り来もせず

物思ふと心づくしに暮すかな藤のしなひのながきこの日を

たちかへり都にいつかしのばまし心づくしの春の夜の月

右のうち第二首目は、都につかはした従士のかへりを待ちこがるゝ歌とおもはれる。

これらをよんでも、源実朝の人格と歌とに、その生の律動をひゞきあはせしめてゐるこ  
とがわかる。

人のもとにて

花園の藤の裏葉のうらとけて語らふまとゐたのしくもあるか

ふるさとの春にあひぬるこゝちしてとるも嬉しきけふの盃

ともし火の花のあたりに酔ひふしてひぢを枕にねぶる春の夜

さまざまの世の悲苦にたへてなぐさむことなきこゝろには、たゞその心知る友と語り

あふことのみ、つきざるよろこびであり、悲喜の涙にこころのなごむのを覚えるのである。公のこの歌を、前の歌と対照してよむならば、公のうちとけたこの心持は今のぼくらの胸にもうつくしくよみがへりくるであらう、そしてこゝに

大村丹後守たんののかみにおくる

かたらまくあはまほしくも思ふかな同じ道ゆく友とおもへば

との歌をよめば、同信世界に心をつないで時代の開展を生きしめた公の生の真実にふれるのである。

秋のはじめに八首のうち

いたづらに都の方のたよりのみまつとせしまに秋立ちにけり

かりそめと思ひし宿の花すゝき今年もわれを招きとめたる

草枕かなたこなたにさすらひて幾たび露にそでぬらすらむ

まさきくて旅にはありと都なるわぎへにつげよ秋の初かぜ

露に袖ぬらす、吹く風におもひを托する、これらは既に／＼歌ひふるされた常套句であるけれども、これらの歌に於いてはそれは現実の感覚と情趣の色調とをよくうつし出

してゐる。

現今の歌人がこれらの語句につられて、その歌そのものを一概に古くさいものとしてしまふことは、たとへば実朝の歌をよむ時などにもよく心づけなければならぬことであつて、伝統の形式を活かす新生命をくみとらねばならぬのである。この歌と照応すべきものとして

家人のふみをえて

玉章たまづさを手にとるからに平らけく安しとあるぞまづは嬉しき

ふる里の便きゝつるうれしさはうき旅ならで誰か知るべき

故郷のうからはらからやすけしと聞くこそ旅のいのちなりけれ

たらちねはくるゝ一日を一年に思ひなしても我をまつらむ

「たらちね」とは母君をいふのであつて、公の父君はこの時既になくなつてゐたことは前に記した。父なき家をとほくはなれてその家族のうへに心をはする公にとつて、故郷からのたよりのみ、せめてもの心やりであつたのだが、しかしそれも思ふにまかせぬことであつた。この「家人のふみ」も、公の従士決死の京師潜入によつてもたらされた

ものであると云はれてゐる。そして

鹿のゑに

所得て思ふことなくみゆるかな親子ひとつにしかのあそべる  
といふ、この「親子ひとつに」といふのも公のこの心情をしのぶよすがであらう。

時につけて三首のうち

月かげは八重立つ雲にかくろひてやみになりたる五月雨の空

思ひ寝の夢はさめぬる夏の夜に一人ぞむかふありあけの月

折にふれて

天さかるひなにすまへば雲の上に見てしそのよの月ぞ恋しき

月を見て

袖の上にやどるもうれし君が見る雲井の月の影ぞとおもへば

村雲はかゝるとすれど秋の月くもりはつべき影ならなくに

これら皆月を見ての歌であるが、思ふまゝをすなほにひとすぢに歌ひあげつゝ、そのふかくうごく内心の情趣をつたへてゐる。公の歌はその対象は何であらうとも、そのい

づれもつねに公の生そのものによつて統一せしめられてゐるのであつて、しきしまのみちは「月花のもてあそび」ではなきこと、そのことの最も顯著の客証を我々は公の歌に於いて見出すことをありがたく思ふのである。

○  
以下に引用する公の歌は本歌集の中心をなすものであるが、実に日本和歌史上に類比を見ざる名歌であり、しきしまのみちの上を照らす不滅の光である。又その前文に公が亡き父君の霊をまつることを述べてゐる所は、赤穂に於ける山鹿素行の生活を思はしめるのである。それについては嘗て本誌に素行の日記を引用しておいた。

○  
慶応のはじめの年神無月三日の日はしも、父君の七回の御忌にあたりけるを草枕旅にしあれば御墓につかへまつることもなく、はたいつきまつらむみたましろもなければ、もちこし御歌の色紙をかけてすぎにし昔を思ひしぬびつゝ

いかにせむゆきてをがまむさが山も八重の潮路の立隔てたる

とよみし事ありき。今日しも又かの御歌をかけたてまつりつゝ昔を思ひいでて故郷の空

を仰ぎつゝみかげを忍びまつるに、すぎにし方のみ思ひいでられて、世のさまのうつりぬるもいとかなくうれたきに、おのれ旅に出ではや五年にもなりにければ御墓につかうまつらで年月をすごしつる事のいと心ならず、追慕の情にたへがたくて、かくしるす時は慶応三年十月三日

述懐のうたども

くれ竹のみをはむ鳥の一人のみ朝日になくもあはれ此世や  
梓弓もとすゑたがふよの中を神代のみちにひきかへしてむ  
大君のまけのまに／＼ひとすぢに仕へまつらむ命しぬまで  
片絲のみだれしすぢをときわけて一つ心によりあはせてむ  
くはしほこちたるのみいつ末遂に仰ふがざらめや国の八十国  
かくばかり乱れ行く世をよそに見て過すは臣の道ならめやも  
今よりはまことの道に入ぬべき過にし事はいふかひもなし  
いづる日の方を仰ぎて打ちむせびなみだながらに世を祈るかな  
我なげくおきその風よ払はなむ心にかゝるそらのうきくも

うきくものかゝらばかゝれ天つ風ふき起るべき時なからめや  
いかにして築紫の海による波の千重の一重も君にむくいむ  
海山に身こそへだたれあさづく日さし出る方に行く心かな  
御代のためふかくも思ひそめ河のその心は神ぞくむらむ  
思川うへは氷のとぢぬともみづのころはよどまざるべし  
時しあらば雲の上にもきこえむと思ひつくし心たがひぬ  
つくしがた海人の苦屋くるまにさすらへて恵の波をかづく畏こさ  
かくばかり君が恵を受けながらつくさぬ臣の身をはづるかな  
うつ蟬のむなしき名のみおふ人の何の功か世にはたつべき  
国のため心づくしのおもひ川おもひぞわたるすゑのしらなみ  
万代の名こそをしけれうつ蟬の世の人言はさもあらばあれ（以上二十音）

折にふれて十七首のうち

若草のおひたつごとく日にそへて春の色にもかへる我身か  
冬ごもり春にあひぬる心地して身のやすらかなるが嬉しさ

ものゝふの道にあつしときくからに君が為こそまづうれしけれ

たまちはふ神し照さばよのなかの人は真心かくれやはする

身にあまる神の恵をうけながらなほゆくすゑの願はるゝかな

燈のひかりにうつる影にだにはづかしからぬ心ともがな

思へども千里の外はかひなくて聞く度にこそ音はなかれけれ

筆のあとにその面影もうかび来て共に語らふ心地こそすれ

かしこくも復位の勅命をかうぶりて都へのぼるとて

身にあまる恵になひて思河うれしき世にもたちかへるかな

かへらじとおもひ定めし家路にもかへるは君が恵なりけり

人々に別るゝ歌ども九首のうち

別るともたえず通はむ築紫がたかはしそめたる言の葉のみち

わすれめや心づくしの旅にして語らひなれし人のまことを

都にのぼらむとしけるほど六首のうち

つくしがた月に昔をしのびしもわが思ひ出となりぬべきかな

心なき庭のうゑ木もわかれをば惜むおもひのありげなるかな  
都へとおもふ門出にさきだちてこぼるゝものは涙なりけり

京に帰りきて

悲しきやかへりて見れば月の輪のみかげは早く雲隠れたる  
めぐみありて我は都にかへれども帰りきまさぬ君ぞ悲しき

御陵に詣でて

かなしくも雲がくれにし月の輪のみはかをがむは夢か現か  
わたれども渡れどもなほ現とはおもひもかけず夢のうき橋  
大船の思ひたのみしかひもなく雲がくれにし月のかなしさ

公は京師還帰の翌日、他の四卿と共に、神さりましゝ先帝孝明天皇の御陵にまうでまつたのである。この「京に帰りて」「御陵に詣でて」のかなしき歌のしらべに心のあやしくふるへるのを禁じえない。こゝで下巻は終るのであるが、以上その主なるものをあげたのである。なほこのうちには南朝の忠臣をしのびよめる歌おほく、特に公は楠公をしたひ、同志とゞもにその祭典のいとなみを屢々行つてゐる。そして又幕末同志にお

くれる歌、その死をいたみよめる歌のごとき、いづれも公の精神生活を知るうへに忘れてならぬものである。その二三を左に、

慶応三年五月廿五日正成卿をまつりて

七かへり君がみたたと生れきて力をそへよいまの御代にも

大宰府にありけるほど森寺大和守を山口に遣はし久坂義助（玄瑞）の靈にたむけしめける

九重のみはしのちりを払はむと心も身をもうちくできたる

おなじをり道明へ

ちゝのみの父の其子と語りつぎいひつぐ名をもたてよとぞ思ふ

○

上巻よりは次の十六首をあげるにとどめておく。

みちのくへ行幸ありける年の夏

いでましの道の暑さを思ひやれば涼む心もやすからぬかな

聯隊旗をさづけ給ふ式に侍りて

御手づから賜ふみ旗をもののは命と共にさゝぐべらなり

海軍観兵式に侍りて

静かなる波の上にもさわぐ世を忘れぬ今日の船よそひかな

憲法発布式に侍りて

千代かけて今日の恵をあふぎつゝ御法を守れ四方の国たみ

帝国議会の開院式に侍りて

つゝしみてつとめざらめや国たみの心を君にまをす人たち

折にふれて

身をつくし心を尽すかひのある御代にあへるは嬉しからずや

花にのみ人の心のなりはてゝみのなき世こそ悲しかりけれ

たふれにし人こそあはれかくばかりなれる功は誰が功ぞも

身にあまる国の重荷をかつきては氷をわたる心地こそすれ

いましめて忘るまじきはつくし瀉しづみし時の心なりけり

熱海のゆあみに物しけるをりく十首のうち

しづかなるあたみの海の春雨に釣する海人の船ぞかずそふ  
春雨のふるぞ佗しき湯あみしてくらしかねたる旅の日数を  
かへるさを急ぐ君ともしらざらむとじめ顔にも春雨のふる  
あたみがた開けし道の嬉しさにゆあみに通ふ人ぞおほかる  
荒波をかづきくへて海人の子があびきするわざ面白きかな  
朝な／＼沖の小島にうちむかひいづる朝日を見るがうれしき

○

あぐべき歌のなほ多くあるであらうことを恐れるが、つとめて全体にわたつて選み出したつもりである。公の歌の系統は香川景樹（かがは かげき二八四三—二七六八）のそれであり、公自ら香樹十年祭に歌をさゝげてゐるのでもわかる。そして古今以後の勅撰集などの影響あることはいちじるしくみとめられることであるし、又万葉をよみしことも『年譜』に見えてゐた。公の歌にもそのあとは指摘しうるのであるが、それらはそれとしては外的のことであつて、右にあげたるうち、いくつかの名歌の生命はしきしまのみちの見地からして更に究明せらるべきものである。公の歌は全体としても素直によまれてあり、ものゝ見方の正しき

ことはさながら公の人格そのものをしのばしむるのである。ぼくのことばの到らぬことをかへりみしめらるゝこと切である。

(一一・五・二〇)

## 法華義疏の研究

(訓読は編者の註記)

不安迷惑の日々をつみかさねてゐる今のぼくは殆んどまとまつた勉強もできぬありさまであるが、そのうちに全くあへぎ／＼太子の『法華義疏』をよみまつゝたことはぼくの内心をいへらす清浄光であつた。前号消息に見えてゐたやうに、黒上先生は梅木さんの看病をされながら常に義疏をよみ味はゝれ、その心持を歌に表現せられたのである。その緊張の生活には及ぶべくもないけれども、先生をしのべば僕の心にも勇気がわいてくるのである。僕らが今なほ病床にある高木尚一兄らと『維摩経義疏』を読みあつたのはもう数年前のことであらうが、実をいへばその時の僕の心は太子のみことばからあまりに遠くさまよつてゐたことを告白しなければならぬ。楞良ちよら研究文中に須賀兄のかいてゐた気持にも通ふのであらうが、時代の濁乱にうきたゞよはされて僕らは急速の解決に

むかつたので、自分の思ひつきにたよつて得意になつたり、しかし忽ちにそれも消えうせて落胆にもだへたりしてゐたのである。そのことは過去としてどなく、今日もその連続にはかならぬので、「研究」といつても何等まとまりのないものであるが、このごろ内心のおもむくまゝに太子のみことばに直接しまつゝた拙き思ひをかきつゞるのみである。

經義者。訓レ法訓レ常。聖人之教。雖ニ復時移改ニ俗。前主後賢不能レ改ニ其是非。故稱レ常。為ニ物軌則一。故云レ法。

(經義者。訓レ法訓レ常。聖人之教雖ニ復時移改ニ俗。前主後賢不能レ改ニ其是非。故稱レ常。為ニ物軌則一。故云レ法。)

「經」の一字について、かくの如き精微の解を下してをらるゝのである。思想、生活、歴史的、現実態を重んぜらるゝところ、儒学のエッセンスを把握した素行の実学はこゝに已にきはめられてゐたのである。素行については今僕等の間にしきりに研究せられてゐるから、まとまつた研究発表を近くに期待してゐる。

善入ニ仏慧ニ通達ニ大智ニ到ニ於彼岸一者、嘆レ心。仏慧謂ニ真智一。大智亦仏俗智。言既以レ慈為レ身。以ニ仏智ニ修レ心。則為ニ諸衆生ニ所依明也。

(善入ニ仏慧ニ通達ニ大智一、到ニ於彼岸一者。嘆レ心。仏慧謂ニ真智一。大智亦仏俗智。言 既以レ慈為レ身。以ニ仏智ニ修レ心、則為ニ諸衆生一所依 明也)

太子が「本義」としてよられた光宅の『義記』には前者を照空之慧とし、後者を照有之智とコンベンショナルな平面的のことをいふにすぎないが、こゝには二智は内的活動化せられてをるし、彼岸に到るといふを諸の衆生のために所依となる、といはるゝこときは、太子の現実的態度のいかに徹底せられてゐたかに吾々は驚かざるをえぬのである。太子の眼中には個人生活などなく、それをすべをさめしめてどこまでも社会全体を念とせられてゐたのである。(以上序品より)

即問。機不レ由レ仏。故不レ會者。人亦自成レ人。非レ由ニ如来一。亦応レ不レ會也。釈曰。言其形色。実非ニ如来一。而大小之称。正由ニ如来一。故以ニ仏語一為レ會也。且経既云下五戒得ニ人身一。十善得中天上。此五戒十善。亦由ニ如来一。以ニ此義一為レ論。応レ云ニ形色亦由ニ如来一也。

(即問。機不レ由レ仏。故不レ會者。人亦自成レ人。非レ由ニ如来一。亦応レ不レ會也。釈曰。言其形色。実非ニ如来一。而大小之称。正由ニ如来一。故以ニ仏語一為レ會也。且経既云下五戒得ニ人身一

十善得<sup>ハ</sup>天身<sup>ト</sup>。此五戒十善。亦由<sup>ル</sup>如来<sup>ニ</sup>。以<sup>テ</sup>此義<sup>ヲ</sup>為<sup>ス</sup>レ論<sup>ヲ</sup>。応<sup>レ</sup>云<sup>ニ</sup>形色亦由<sup>ル</sup>如来<sup>ニ</sup>也<sup>ナリ</sup>。

これは「人」としての個人人格中心の執着を批判せられてきはめて明快である。個人を中心とするのではなく、逆に人間全体の、精神生活の普遍的内容（それがこゝに「仏語」といはれるものだ）にあづかる程度によつて、人としての価値如何もきまつてくるといふのである。それであるからして、こゝにまで考へ及ぶことは、人類文化の未来を思念するものは、世界文化単位として世界文化の一半を現実に確持する日本文化の内的価値にめざむべきで、それなくてはだゞちにインタナショナルイズムにとびつかうとするのは、つまりは個人的空想で文化開展の現実的根拠に気づかぬものゝ所為である、とさう云はざるをえぬのである。太子のこのみことばをかく解きほごすことも妥当であると思ふのである。

除<sup>ニ</sup>仏滅度<sup>ニ</sup>者。言雖<sup>ニ</sup>復<sup>ニ</sup>真羅漢<sup>ニ</sup>。不<sup>レ</sup>聞<sup>ニ</sup>如来在世金口正説<sup>ニ</sup>。仏滅度後時。能信<sup>ニ</sup>此法<sup>ニ</sup>者無也。故云<sup>レ</sup>除<sup>ニ</sup>仏滅度後<sup>ニ</sup>。所以若楽<sup>レ</sup>道者。仏現在時不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>緩也。

如<sup>レ</sup>是敦<sup>レ</sup>信。標<sup>レ</sup>疑云。所<sup>ニ</sup>以<sup>テ</sup>除<sup>ニ</sup>仏滅後<sup>ニ</sup>者何、言<sup>ニ</sup>仏滅度後時。能説<sup>ニ</sup>此法<sup>ニ</sup>者。難<sup>レ</sup>得故也。若爾何時得<sup>レ</sup>信。必待<sup>ニ</sup>余仏出世<sup>ニ</sup>。乃<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>得<sup>レ</sup>信。而不<sup>レ</sup>知<sup>ニ</sup>諸仏亦何時日出<sup>ニ</sup>。又

仏雖レ出。亦不レ知ニ我無レ縁。然則今仏現在時。可レ勉自明矣。

(除ニ仏滅度一者。言雖ニ復真羅漢一。不レ聞ニ如来在世金口正説一。仏滅度後時。能信ニ此法一者無也。故云除ニ仏滅度後一。所以若樂道者。今仏現在時不レ可レ緩也。)

如レ是教レ信。標レ疑云。所以除ニ仏滅度後一者何、言仏滅度後時。能説ニ此法一者。難レ得故也。若爾何時得レ信。必待ニ余仏出世一。乃可レ得レ信。而不レ知ニ諸仏亦何時何日出一。又仏雖レ出。亦不レ知ニ我無レ縁。然則今仏現在時。可レ勉自明矣。)

これを太子が「本義少異」としてあげてをらるゝ『義記』の説明と対照するとき、太子の真意は自ら明かにせらるゝであらう。光宅はかう云ふのだ。仏が滅度して後、しかも仏再びあらはれぬ間は法華を説いてくれるものもないからして、当然又よく信ずるものもないであらうと。さうして今太子のみことばに立ち返つて見るならば「楽道者」とあるのがこの但書ただしがきの一句を内的化するモメントとなつてゐることに気付くのである。道をねがうてやまぬ真実をうちにもつものは、いまだ開展せしめられざる無辺際の未来に期待できぬことは生のまことの法則である。しかるにこの自己をぬきにした未来をいたづらに説いてゐるのである、光宅の『義記』は。そして太子のこのみことばをよみま

つるとき、信樂開発の時剋の極促をいつて即得往生を説いた親鸞の信への脈絡に思ひ及ぶことはきはめて当然であらう。

然上既云若人遭苦厭老病死。此言貪著於生死。此二不同。何故爾也。

(然上既云若人遭苦厭老病死。此言貪著於生死。此二不同。何故爾也)

經文に示さるゝ相矛盾するごときこの二句についての疑問について、太子は『義記』に明す所として三説をまづあげられてをる。その一、生死といつても二種ある、肉体的と精神的と。このうち前者は直接的のものであるだけにそれを厭ふことも切実であるが、後者はあまりはつきり自覚せられることはない、貪苦するといふのはそのわけである。その二、生死を一般的にいへば厭ふべきものであるが、たとへば妻子の愛のごとき、心惹かるゝごとき部分もある。それが著苦といふことであると。その三、概念的意識的には生死はいとはれるのであるが、無意識的にはそれからはなれられぬのをいふのである。これらに対して太子は

此三皆是本義所明。然但隨言而記。不知其意趣。但私懷者。衆生一心上。即有二相。一者聞苦厭生死之相。二者聞少道可求。而不知出生生死之相。今者但

拳ニ一偏ニ為レ明故不同也。

(此三皆是本義所レ明。然レ但隨レ言而記。不レ知ニ其意趣。但私懷者。衆生一心上。即有ニ二相。一者聞レ苦厭ニ生死之相。二者聞ニ少道可レ求。而不レ知出ニ生死之相。今者但拳ニ一偏ニ為レ明。故不同也。)

といはるゝのである。『義記』の三説はいづれも平面的心理分析であるに比して、『義疏』の説かるゝところ、道をもとめてすゝまうとする者の内心の煩悶についてをらるゝ。かへりみつゝ分析して出てくる二相ではなくして、フアウストのドツベル・ゼーレンにも比すべき、眞実のみちを歩むものに必然の内心のたゝかひそのものであるのだ。(以上方便品より)

法華經の教義そのものは理解するにさしてむづかしいものでなく、又あまり大したものともしはれぬが、太子のみことばに生きしめられて、こゝに吾々の生の直接的表現として味はふことができるのである。次号には比喩品に研究をすゝめよう。

## 法華義疏より

### 法華義疏信解品に

「一城に中止す」より以下は（父王）子を失ふの憂ありと雖、猶ほ其家業の大事を廢せざる事を明し、内合せば如来は一方の衆生應機を得ずと雖、而も其教化の常事を廢せざるなり。一城に中止す、とは一城は一大乗教に譬ふ。教を城に譬ふる義は即ち恒に積するが如し。言ふこゝろは如来恒つねに一大乗の教の中にあるなり。

とある太子御積のみ言葉について、吾等の如き自我の生に頭出頭没してゐるものには思ひつくせぬ内容であるけれども、私意の限りをつくして自らの戒めとするまでである。

太子が片岡山のほとりに飢えてこやせる旅人をあはれませ給うて「親なしになれなりけめや、刺竹きすたけの君はやなき」とみ歌よませ給うたのは、その旅人を外からながめて同情をよせる、といふやうのことではない、親を怨み世を呪ふその心情の根柢につき入つて動揺するみこゝろに堪へつゝ立ちつくさせ給ひしと拝察するのである。このことは「子

を失ふの憂ありといへども」又「一方の衆生、応機を得ずといへども」とのみ言葉のうち、にその実人生的根柢を味はしむる一つのよすがとなるであらう。これをたゞ「家業の大事」「教化の常事」と対照せらるゝものとのみ軽く看るならば却つて後者の真意さへも失はしむることになる。

普通吾々が内心の感動をもつてできることは自分に直接卑近のことであり、それだけにきはめて主観的になりがちであり、全体的には取るに足らぬこともあり、むしろ悪く結果することにもなる。又できるだけ全体的たらうとすると自分の感動は失はれて形式的になりやすく、魂のぬけがらになることをまぬがれがたいのである。あらゆるものに対して同感の情をふるはせつゝしかも部分に捉はれずに全体として生かしてゆく、と云ふことは容易のわざではない。現在に於ける多くの言説もこの二つのタイプの何れかに属し、そのあまりに気楽な問題の片付け方に反撥せしめらるゝのはよく経験することである。そしてこの大乘的総合を身を以つて実践せられた太子の御一生は実に忍苦そのものであつたことを銘記せぬばならぬ。

このやうにして、太子の御理解に従へば、一大乗といふのは個人的な特定の境地では

なくして、換言すれば全体的総合的であり、且永久的といふことになる。十七憲法の「和」とはまさにこの一大乗の社会的表現に外ならぬと思ふ。そしてその実践は吾々にとつてはその十五条の「私に背きて公に向ふは是臣の道なり」といふにつきるのであつて、この一大乗といふをカントの「汝の意志の格率が常に同時に普遍的立法たるやう行爲すべし」といふ「普遍的立法」といふに比して、こゝに人生の総合創造的開展に随順せんとする吾等の立場を差別しようとするのである。

(二一・八・二五)

## 藤原藤房論

藤原藤房卿(一二九六)の名は吾々の心になつかしい記憶をとどめてゐる。それは元弘元年、後醍醐天皇(一二八九)が笠置山を逃れ出でさせ給ひしとき、弟季房(すあき)と共に御供に従ひまつり、遂に賊軍の手にとらはれたいたましき物語をとほしてある。

兎角とかくして夜昼三日に山城多賀郡なる有王山の麓まで落ちさせ給ひけり。藤原季房も三日まで口中の食を断ちければ足たゆみ身疲れて今は如何なる目に逢ふとも逃げぬべき

心地せざりければ為ん方な無て幽谷の岩を枕に君臣兄弟諸共にうつゝの夢に伏給ふ。梢を払ふ松の風を雨の降るかと聞召きこしめして木陰に立寄せ給ひければ下露のはらはらと御袖にかゝりけるを、主上御覽ぜられて

さして行く笠置の山を出でしよりあめが下には隠家かくれがもなし

藤房御泪を押へて

いかにせん憑たのむ陰とて立ちよればなほ袖ぬらす松の下露

つねに主上の側近をはなれず純忠をぬきんでた悲劇の人とのこのやうな印象を惜むとき、吾々は思ひあがつた荒い批判を彼に加へることはつゝしむべきことゝ思ふのであるが、しかし一旦建武中興の大業成就した以後の彼の言動に思ひをいたすならば、そこに深い疑念を抱かしめらるゝのを禁ずることはできない。卿の父宣房のりよさ卿も北朝に仕へたり南朝に仕へたりした人であることも卿を考へる上に暗い影を投げるやうな気がする。

建武元年十月五日、中興の実状に愛想をつかして出家し行衛を晦した藤房は『太平記』の記述をそのまゝ読むと、そこに所謂「良心的」性格が見出されるのかも知れない。この時彼は三十九歳であつたから、理想家肌の人として、自己の理想と現実との乖離に敏

感の青年の情熱を失はなかつたといへるのかも知れない。しかし斯うした行き方を責めずにはゐられない僕の気持を肯定的と否定的との精神氣質の相違と片附けられるであらうか。そして斯うした行き方も許されていゝのではないかですまされうるものかどうか。

『太平記』の記事は彼に即して書かれてゐるが、しかし建武中興の本義からいへば藤房自身は却つてこれを自覚してゐなかつたのではないかといへるのである。即ち中興の革新的政治が旧勢力と相容れぬものであることは当然のことであるにかゝはらず、彼は兩者の衝突を苦にして、うまく事なからしめようと焦つてゐたらしい。かの大内裏造營、竜馬猷進反対もかうした妥協的不安感情から出た善政主義であつたやうである。彼の晦陰は結局自らのこの不安の情にたへずしてそれより逃れんとした結果であらうと思ふ。

この藤房の行動に対する当事の世評は、一人の出家は万人の救ひとなるといふ仏教的觀察にもとづき「智ある人は聞いて感歎せり」と至極好意的であるが、『太平記』の藤房是認的筆法からして建武中興失敗の因は朝廷の失政にありとの、世論の長い伝統がうゑつけられた。この蒙を啓くためには平泉澄博士の『建武中興の本義』が書かれてある。

藤房は中興政府の中心人物の一人であり後醍醐天皇の最も篤き御信頼を蒙つてゐた。

この彼の隠退が朝敵再起の口火となつたとの記事は意味深長である。彼一人の存在は武力的には何等の重要性をも持つものではないからである。北条高時の舎弟四郎左近大夫入道なる者は鎌倉合戦に生き残つて、当時京都に上り大納言西園寺公宗の許に身を寄せてゐたが、公宗は四郎左近大夫に天下の権を掌握せしめ、自身その執政たらんと謀叛の計略を心がけてゐた。

或夜政所の入道（文衡）大納言殿の前に来て申されけるは、国の興亡を見るには政の善悪を見るには如かず。政の善悪を見るには賢臣の用捨を見るに如かず。今の朝家は、藤房一人のみにて候つるが、未然に凶を鑑みて隠遁の身と成候事、朝廷の凶、当家の御運とこそ覚え候へ。急ぎ思召立たせ候はゞ前代の余類十方より馳参じて天下を覆さん事一日を出づべからず、とぞ勧め申しける。

この隠謀そのものは京都に於いては事なくして露顕してしまつたが、この時左近入道の甥即ち高時の子相模次郎時行をして関東の大將として軍勢をあつめさせてゐたのである。そして之を討たしめんとして足利尊氏の鎌倉下向となつたことを思へば藤房は実中興覆没の思想的責任者であつたと云はなければならぬ。

かくして前途に光明を失ひし吉野朝の人々を捉へたのは「隱遁」の志であつた。それは人間凡常の事柄であるだけに吾々の心を傷ましめるが、それを歎く心も激しくならざるを得ないのだ。

天下久しく乱に向ふ事は末法の風俗なれば暫言しばらくふに足らず、延喜天曆より以来、先帝程の聖主神武の君は未だおはしまさざりしかば、何と無くとも聖徳一たび開けて拜趨忠功の望を達せぬ事は非じと人皆憑みをなしけるが、君の崩御なりぬるを見まゐらせて今は御裳濯河みもすその流の末も絶えはて、筑波山の陰に寄る人も無くて天下皆魔魅まみの掌握に落つる世に成らんずらんとあぢきなく覚えければ多年附纏まひまゐらせし卿相雲客……思ひ々々に身の隱家をぞ求め給ひける。

この如き我が身の安泰を求めてくづをれようとする人々を回心せしめ、よく前後の処置につくしたのは吉野執行吉水法印宗信一人であつたといふ。生活とは根本に於いて精神生活に外ならないのであるからして、生活だけの生活として、どこかに「身の隱家」が実存してゐるかに思惟するのは単なる仮定にすぎないのである。藤房にもこれと相通ずる精神の方向が認められるが、なほ表面上多少相違してゐるかに見えるのは、所謂道みち

行はれざれば則ち蔵<sup>かく</sup>る、といったところがあるからである。併<sup>しか</sup>し、「道」とは何ぞやといふことに思ひ至れば、建武中興の本義を外にしてそれが実存してゐるかに思ふのも矢張<sup>はり</sup>い<sup>つ</sup>は<sup>り</sup>の空想である。「道」といふことが個体的概念となつたのは支那のやうな易世革命の歴史をとほして理解すべきものであつて、我が国に於いては「道」は国体と密着してゐることを知らなければならぬ。それには

奥山のおどろの下も踏みわけて道ある世ぞと人に知らせむ

との後鳥羽院の御製を拝誦すべきである。又『新葉集』に載せられてある 後村上天皇の御製

つかふべき人やのこるとやまふかみ松の戸ざしもなほぞたづねむ

とあるを拝誦すれば藤房等の精神の方向の全く許容すべからざることが実感せられよう。これをその時代の一般的思潮を今日の意識でもつて批判し去ることは大人<sup>おとな</sup>気<sup>げ</sup>ないなどいふ冷静さは僕は持ち合はしてゐない。僕の藤房観をあまりに政治的であつて、複雑な人間精神はさう統一的に片附けられるものではないとする意見もあるかと思ふ。これは近頃よく問題とされてゐる政治と文学との関係論などもこれと論点を同じくしてゐると思

ふが、どの場合にあつても事態を究極にまでつきつめて考へなくてはすまされぬ僕としては藤房の気持を生かす如何なるすべをも思ひ附かないのである。建武中興の失敗といふことは実に悲しむべきことであるが、しかし事実として現れたことである。これ程国民的感情にそぐはぬことはない。そこで逆説的であるが、この失敗を何とか正当づけて己れの心を納得させ諦めさせたいとの気持が起つてくるであらう。斯うした気持に丁度口実を与へるのが藤房のやうな人物である。朝敵となつたものも悪いにはちがひないが、しかし罪は朝廷にもある、それは人格者藤房卿の言動が正に示してくれてゐるではないか、といふ調子である。これはたゞかひを知らぬ、おめでたい精神である。そしてどうしても死にきれず、諦めきれぬ「七度人間に生れかはつて」との妄執のみがとほく明治維新を喚びおこし得たのである。

繰返して言ふが、生活とは根本的に於いて精神生活である。そこには色々の生き方といふことはありえない。そこには「世に処する道」といふ功利主義がちらついてゐる。実存する吾々の精神生活には「生か死か」があるのみである。生きんが為には死なんとすることもある。自分だけの生を生きながらへるとかそれを享受するとかは無意味であ

つて実際にさやうのことはありえない。卑しい言ひ分であるが、吾々のやうに自分の精神の立場を世にあらはにしてゐることは賢明の生き方ではないかもしれぬ。賢明であるがためには他に色々のすべがあらうと、思ひつかぬこともない。学術のための学術だけをやつてをればいかなる世にも御用はつとまるといふものだ。「隠遁者」といふものが『太平記』などにも傾城けいせいとか猿楽さるがくと共に江戸時代のホウカンのやうな存在として大名達の御機嫌をとつてゐるのが見られることもこゝに思ひ合はされることである。

(二二・一〇・二五)

## 青蓮院宮

自分は我国の武の精神の伝統について考へてゐる。武士道といふとき、徳川の、あるひは溯さかのぼつて鎌倉武士のそれをいふのが順序であるやうに云いはれてゐるが、しかしわが民族の記憶のはじめの日よりの、ものゝふのみちといふものを、その本筋として、あきらかに自分の心のうちに描きたいと思つてゐる。戦陣訓がさきごろ出されたときいてゐ

るが、之は別として、明治十五年の「軍人に賜りたる勅諭」は天皇親政の下における武士道の樹立であつたといはねばなるまい。封建の世のくづれたことを以て、武士道の日暮れつゝある、といつたのは新渡部稲造(にとべいなぞう) (一八六二—一九三三)であつたが、かういふ感じ方は本當のものではないかに思ふのである。むしろそれとは逆にその時こそ本筋の武士道が復古したといはなければならぬ。まことの文の精神、すなはち政治における親政の日にのみ、又眞の武の精神と形とがある、といふことはさう自分の意見としていふ必要はあるまいかと思ふ。かうしてみると、この伝統の上には建武中興や明治維新がその中興として、復古として矢張生命ある日といふことになる。さうして自分はそのために多少歴史を考へてみるといふと、天皇親政の下における宮將軍の系譜に會ひ、日本武尊、大塔宮、有栖川宮熾仁親王の御生涯をしのびまつたのであるが、幕末においては、熾仁親王よりも青蓮院宮、即ち後の久邇宮朝彦親王(くにおみやあさひこ) (一八二四—一八九二)がその頃の志士たちに、「大塔宮の後身」として仰がれてゐたことに気づいて、更にくはしく歴史のうごきを考へるやうになると、とても簡単に言ひきつてしまふにはあまりに奥深いもののあることを知つて、そのことを、即ち建武中興や幕末維新について、更にはその間をつなぐ時代の消息につ

いてなどを思ふといふと、それが今我々の生きてゐる時代、あるひは少しくそれに先立つ時代をよく知る上に何らか暗示するものがあることがわかつて来た。かういふことを思はせぶりと言ふことは困るけれども、そのことの次第はおひおひ述べてみたいと思つてゐる。ともかく、あまり人のいふことをそのまま受けとつて左に往き右に往くことに何か物足らぬものがあるけれども、さればと云つて人生の暗いところ、そこには裏には裏がある、といふやうなことはちがふのであつて、そのいろいろにうごく間のところには奥深い、本当のことがある、そしてそれをのみ自分らはもとめて、たとへそれがいかやうに人々に誤解されても、自分らの志がいれられなくても本望だといふ気がするのである。それを今日の出来事の上に言ひあらはすことは出来もしないが、昔の歴史の上にそれを考へて行つたならば、そのことが今日における自分らの心構への上に眞実を保たせるに役立つやうに思はれるのである。なほはつきり言ふならば自分らとしては、天皇の大御心をいたゞきまつることのみを念とすればよろしいといふのであつて、それが我国の歴史の上にとどのやうに仰がれるか、といふことをそこから学びとつて、自分らの道を行くことをあやまりなからしめたいと思ふ。さきごろも『僕の天路歷程』の著者

森本忠氏が官許の歴史をあまり信じない、といつて神風連志士の歌をあげながらその志を述べてゐられたのをみて、自分も同感するところがあつた。実際については意見のちがふところもあらうが、官許の歴史を信じない、といふことは自分もこのごろひとしほ一入その感を深めつゝある一人であることは確かである。しかしそれは自分らとはちがふ人々が昔から言つて来たことゝはまるでちがふのであつて、彼等は日本の歴史そのものを信じないで、別の史観を信じてさういふのである。しかし自分らは日本の歴史を信ずるが故に官許のそれを信じないのである。何ものをも信じないことが歴史についての普通の考へ方であるらしいが、自分らは本当に信ずるに足る、いや信ぜしめられる日本の歴史について思ひをひそめねばならないし、そのことがこのやうに何かさだめがたい動乱の日には自分らが生きることのためにどうしてもなくてはならないやうに感じて来た。

## ○

建武中興のことも明治維新のことも、天皇の大御心、又は天皇を直接お助けした宮様方の御精神をあまり考へなさすぎはしなかつたであらうか。さうすると、そこに信ずるものがなくなつてしまつて一つの結果論のやうなものにたよるほかなく、それに頼られ

ないときには又一つの反動の立場にしか立つことを知らないことゝなるであらう。維新の後、「勝てば官軍、敗くれば賊軍」といふことが合言葉のやうに言はれた。この言葉が自分らの年少の日に、この世をはかなむ、言ひ知れぬ不安の念をそゝつたことは同じ心の経験を味はつた人もあるであらう。「忠君愛国を口にしながら……」といふ支配者に対する不信の告白がどれほど普遍してゐたことであらうか。かうした不信のともがらが世にあふれて、あらぬ方に走り、奇矯の言動に及ぶこと多く、ために世のみだれをひきおこして、そのことが、明治天皇の大御心をいかほどなやましたてまつたか、特に御晩年の御製によつても拝察することが出来る。政治とは「をさめる」ことであり、直接には人の心ををさめることである。御歴代の天皇がいかに人の心をさめがたきを歎かせたまうたか。こゝに天皇親政のうごかすことの出来ぬ抛りどころがあり、我々は大御心にすべをさめらるゝことのみを念とすればよいと思ふ。思へば自分もかすかながらにこのことの奥深い意味をからうじて辿りつゝあるのであつて、とかく言ふべきことはあまりないのである。

自分が大塔宮の御ことどもをしのびまつりつゝ、それが日本の歴史の上につらぬくも

の、あることを気づいて、その御精神の伝統をもとめて幕末維新に及び、青蓮院宮の御生涯にふれることの出来たのは徳富蘇峯氏（一八六三—一九五七）の『維新回天史の一面』に於いてであつた。この書物は「久邇宮朝彦親王を中心としての考察」と別題されてあり、序文によると、久邇宮邦彦王殿下（皇后陛下の御父宮）の思召しによつて執筆されたとのことである。そしてこの序文の中に、朝彦親王（青蓮院宮）御生涯について「第一期は嘉永、安政の際、京都に於ける攘夷派の首領として、幕府方の最も注意する所となり、遂に井伊一派の為に相国寺に幽閉せられ給ふた事である」といひ、「次の幕は文久、元治、慶応の末に於ける、公武合体派の大立物として、最後には薩長及び岩倉等の倒幕派より注意人物視せられ、孝明天皇の崩御間もなく遂に無実の冤罪を蒙つて、広島に竄蛰せらるるに至つた事、而して第三幕はその御冤罪が解け晩年を京都に送り、専ら帝国の元気を維持し、帝国の精華を發揮すべく、日本思想の扶植宣伝の為に力を致し給ふたる事」と簡叙しまつり、之について氏はなほ「この三幕の中に於て最も歴史的興味多きは、第一幕と第二幕にて、第一幕には薩長その他の激烈なる志士の為に中心人物視せられ、幕府からは最危険人物視せられ給ふたに反し、第二幕に於いては幕府から最も穩健調和的の

人物視せられ、過激派から因循姑息、回天事業の邪魔者視せらるゝに至たらせ給ふたる事」「単に此の兩幕を対照すれば、如何にも矛盾甚しき、氷炭相容れざる、前後辻褃の合はざる御生涯に似たれども、詳かに之を考ふれば夫々理由もあり、事情もあり、道理もある。要するに親王は終始一貫、孝明天皇の御相談相手として、悉くその趨向は宸慮とその軌を一にしたる事がわかる。されば親王の御一代記は恰も維新回天史の目録と云つても妨げない程と思ふ」といつてゐる。この書物は御生涯のうち「第一幕」を叙述したるにすぎないものであるが、序文のこれだけの叙述によつてもそこには我々にとつて今更のごとく幕末維新史の研究の押へがたいものを要求するのであり、いまにおいても時に明治維新を参照して考へたり、言つたりすることを聞くし、「公武合体」といふことをあまりよからぬ意味合で使用することなど最も多いから、かういふことで我々は宮の御生涯について知ることが、維新史の急所の研究になるであらうし、その全体についてのいきさつが今日の我々が人生についてよく考へ、天皇に仕へまつることの上に決定的な意味があると思ふ。「公武合体」といつても公とは何か、武とは何か、それを今日何に對して夫々あてはめるといふのであらうか。とにかくあまり見えすいた考へ方はさ

けなくてはなるまい。我々がこのところを考へて行くについても途上いくたの困難があることが予想される。しかし今は概して外面的のことにとどめて、この最も大切な点は筆を改めて言ふことにしよう。

○

大塔宮(二三〇八)も天台座主てんだいざすであらせられ、青蓮院宮もさうであった。幕府政治のときには、宮様方は普通出家せられ、法体におなりになるので、天皇におかせられてもとかく法体になれがちであつた。法体になられる、といふことはこの世の俗事にはかゝはらぬことを示すことであつて、政治に関与せられぬ、といふことになるのであつた。それが主として前には大塔宮に於いて、後には青蓮院宮において、そのことがいさぎよく破られた。それは天皇親政には親政の下における宮將軍の正しい姿の回生でなければならなかつた。青蓮院宮においては武將のお姿は見られなかつたが、その御精神についてはさうであつた。大塔宮ははじめて吉野山中において、若き武將のお姿をもつてあらはれ給うたのである。

大塔宮今のがれぬ処おぼしめしなりと思召切つて、赤地の錦の鎧直垂ひたたれに、緋威の鎧ひおどしのまだ巳みの

刻なるを透間もなくめさせられ、竜頭の冑かぶとの緒をしめ、三尺五寸の小長刀を脇にさしはさみ、劣らぬつはもの二十余人前後左右に立ち、敵のむらがつて控へたる中に走りかゝり……

敵引けば、宮は蔵王堂ざおうどうの大庭に竝居なみりさせ給ひて、大幕打揚げて、最後の御酒宴あり。宮の御鎧よろいに立つところの矢七筋、御頬さき二の御うで二箇所つかれさせ給ひて、血の流るる事滝の如し。然れども立たる矢をも抜き給はず、流るゝ血をものごひ給はず、敷皮しまかひの上に立ながら、大盃を三度傾けさせ給へば……

壮烈なる若き英雄のお姿である。自分は特に増鏡のをはりのところに、宮が河内より還都せられしときのありさまについて

十三日、大塔の法親王都に入りたまふ。この日ごろ、御ぐしおふしてえもいはずきよらなる男になり給へり。かくの赤地の錦の御鎧直垂といふもの奉りて、御馬にてわたり給へば……

といつてゐる。この「御ぐしおふして、えもいはずきよらなる男になり給へり」とあるのは実によくほのぼのとして時代のあさあけを感じるのである。それは正成が最後のこ

とば「罪業深き悪念なれども我もかやうに思ふなり」といつたのとかよふ清新の世界である。正成は、これを「よに嬉しげなる気色にて」と云つたといふのである。こゝにまことの解脱がある。大塔宮は、しかし乍ら、再びもとの僧形に復されることを一般に期待された。それが宮の御本意でないことはいふまでもなく、この本意むなしくなつたとき、このひらかれた清新の世は再びこの地上から姿をけした。後代において、後光明天皇(一六三三—一六五四)が武事をこのませらるゝのを、所司代なにかしが諫止申上げ、責任上切腹せねばならないと言上したとき、朕ははまだ武人の切腹せるを見たことがない。よろしく朕の眼前にて腹を切れ、と言ひはなされたことは幼少の頃の記憶にあらう。青蓮院の宮も、南都興福寺別当の頃、こゝは昔より叡山と共に僧兵あつて、武を講ずる伝統があつて、御誦経のかたはら、法藏院流の槍術を学びたまひ、又経書や兵法等を講ぜさせたまうたといはれてゐる。このやうなことが幕府のこゝろよしとしなかつたことはいふまでもない。かういふことを少しく考へてみると、そこに日本のものゝふのみちの血統がほのぼのと心にうつつてくるのである。そして日本の文武の道、あるひは政治と軍事との二つながら、いかにあるべきかを考へることの上に大切な、歴史の事実と思ふ。それは

帝国憲法の条章において明示され、確立せられてゐるけれども、我々はそのよるところについて深く思ひ到らねばならない。

青蓮院宮の御ことどもについて、既に断つたが、ほとんど肝腎のことは何も云はず、大塔宮との見やすい似通ひについて幾分ふれるにすぎないことゝなつたが、かういふところから段々くわしく考へて行きたいと思つてゐる。(未完) (『新指導者』一六・七・一)

## 捨身固国

——山背大兄王の御生涯——

大化の改新とその思想的前提としての聖徳太子(五七四六二二)の御精神とは史家のつづさに論証するところであるがこの史的関聯の中に占める山背大兄王の御生涯については余りに看過されすぎてをりはしないであらうか、それは理由のないところではないであらう。例へばわが国の史観の中に山陽流のそれがオーソドックスのものとして認められ、国民的感情の裡(うち)に深く根を下してゐる。彼が極力楠公を表彰した等が与つて力があらうが、私にはまた通俗の域を余り脱してはゐないやうに思はれる。楠公(二二九四三三六)を讚美しながら後

醍醐天皇及び大塔宮に兎角の批評を加へ奉つてゐる如きは到底たへうるところではない。この点は嘗て「大塔宮の御最後」といふ小論の中にも触れておいたが彼の所論について、かもちまさずみ鹿持雅澄（一七九一—一八五八）の「日本外史評」といふものがあつて山陽（一七八〇—一八三〇）の臣道感覚の未熟さを指摘してゐるさうであるが、私はまだこれを見る機会をもたないが、確に要点を捉へてゐると思ふ。漢学者としての山陽と国学者としての雅澄とのわかれるところであらうし、わが国の歴史を考へる上に生命的な岐路がこの点にあることは疑ひのないところである。山陽は聖徳太子について政記の中に「我国、君臣の義は万国に卓越す、然るに西域の説此義を破り、あたか恰も土灰沙塵の如くす、仕方のなきものなり、而して其の端を附けるものはうまやどの厩戸皇子及そ鮮我馬子なり」といひつつ、大化の改新を論じては「敏達（第三十代天皇）用明（第三十一代天皇）二帝の頃より大権漸く下に移り奸臣国を専らにす、此時天智帝なかりせば王業殆んど熄むに近し、その制度を確立せられたるの功は武王の烈を以て周公の才を兼ねたるものなり、中宗の称、いっぴ溢美にあらず」云々とその支那流史観を国史に適用して憚らない。山陽の功績の評価せらるべきものあるは勿論であるが、今日に至つては改めて吟味することは徒らに彼を傷けることではあるまい。個人道德的

に楠公の忠誠を理解し、聖徳太子や山背大兄王(六四三)の御精神にかかはるところなく大化改新を論じ建武中興を評するならば、支那流の合理主義的効果論を免るることはできないであらう。

実をいへば、自分も大兄王が蘇我氏の兇刃の前に何等の反撃をも企てさせられず、遂に御一族と共に自決し給うたことについて一種の無抵抗主義のはがゆさが感ぜられ、それは、聖徳太子の王子として仏教の思想に捉はれすぎたためと思はれてならなかった。

正成が「罪業深き妄念なれども」といつたのが潔く我々の心に響いてくるために大兄王が他の者の挙兵をすすめるゝのに応へらるゝに御父太子の遺誠であるとして、「諸の悪を作す勿れ、衆の善を奉行せよ」との仏語をもつてせられてゐることが、いかにも型にはまつた仏教思想と思はれた。然し、実は自分こそ寧ろ仏語に捉はれて考へる浅はかさを冒してゐたのであつた。

大兄王が死をもつて守持せられたものがなんであつたか、それは正成におけるそれを考へあはせる時自分にもいくらかそれが心に信ぜられるやうに思はれる。正成は自分の戦略が容れられず、然かも一度勅命を蒙つた上からは「この上は異議を申すに及ばず、

さては討死せよとの勅諭御座んなれ」とて手兵を率ゐて兵庫へと下向したのであつた。果して湊川において戦破れて討死せねばならなかつたけれども、彼の死によつて反つて永久に滅びぬいのちが打ち樹てられたのである。尊氏とても常に天皇を擁し奉ることを忘れなかつたといふ議論があるけれども、それはわが国の臣道とは何等の関りもないことである。

大兄王が御自ら兵を挙げさせられて蘇我氏を誅し給はず、自らいのちを失はせられ、そこに守持せんとされたものはなんであつたか、詳しい事情は述べないが問題は皇位継承に關してであつた。推古天皇の皇太子であらせられた御父聖徳太子が薨去せられ、やがて、天皇が崩御せられたために急速に解決せられねばならぬ問題であつた。

蘇我蝦夷（六四五）は、天皇の御遺詔として田村皇子（舒明天皇）を推し奉り、大兄王は天皇の御臨終に親しく、天皇の御志の自分の上にあることを承つたと申され、かくして、群臣は二派にわかれて抗争するの情勢を招致した、かういふ事情の下に大兄王が御父太子の御寵愛をうけた境部摩理勢（この人は蝦夷の叔父であり馬子の弟である）のすすめに従つて彼等と争はれたならば、彼等を打倒して即位せられるか、或はにはかに勝

敗の決しない時には二つの中心ができて相對峙する結果となるであらう。このいづれに歸着しようとも、それは二つながら大兄王の扱はるべき道ではなかつた。このやうな極めて微妙な地位に居られたことは注意せられねばならない。大兄王は摩理勢を戒められて、「汝先王の恩を忘れずして、來ること甚だ愛し。然れども其れ汝一人に因りて、天下応に乱るべし。亦先王臨没諸子等に謂りて曰く諸の惡をば莫作そ、諸の善を奉行へと。余斯の言を承りて、以て永き戒と為す、是を以て私の情有りと雖も、忍びて以て怨むこと無し。復た我れ叔父に違ふこと能はず。願はくは今より以後、意を改むるに憚ること勿れ、群臣に従ひて退ること无れ」といはれたのであつた。ここで叔父といはれてゐるのは蝦夷のことであり、大兄王の御母は馬子の女であり蝦夷の妹である刀自古郎女であつたからである。悶々の情を抱いて摩理勢はかねてこの問題について周旋せられてゐた泊瀬王宮に身を寄せたとあるが、この泊瀬王とはいかなる方か、『書紀』では明瞭ではないが『法王帝説』に長谷王とある方であらう。つまり大兄王の異母の御同胞であり、かつこの王の姉宮春米王女、王女は大兄王の妃であられた。紀には「泊瀬王忽ちに病おこりて失せましぬ」とあり、やがて摩理勢もやがて蝦夷のために

亡された。そして田村皇子が即位された。舒明天皇(五九三六四二)と申し上げる。然し問題はこれで解決されることなくのちにもちこされたにすぎなかつた。

舒明天皇が崩御せられて皇后であらせられた皇極天皇が即位せられたが、蝦夷に代つた入鹿(いんか)は依然として大兄王を却(しりぞ)け奉つて次には古人大兄(ふるひとおほね)の即位を考へてゐた。然し大兄王の御態度は一貫して變るところがなかつた。この時にも三輪(み)文屋君が東国の御領地によつて挙兵せらるゝならば必勝疑なき旨を申し上げたが大兄王は前に摩理勢にいはれたことを繰りかへされただけであつた。即ち、「卿(いまい)が導(い)ふ所の如くば、其の勝たむこと必ず然らむ。但だ吾が情に冀(ねが)ふは、十年百姓を役(つか)はず、一身の故を以て、豈に万民(おほみたら)を煩はし勞らしめむや。又後世に於いて民の、吾が故に由りて、己が父母(かそ)を喪(はろ)せりと言はむこと愆(はり)せじ。豈に其れ戦勝ちての後に、方に丈夫(ますら)と言はむ哉、夫れ身を損(すて)て國を固(かた)くせむは、亦丈夫(ますら)ならざらむや。」かくして終に入鹿のために斑鳩寺(いかるが)に攻囲せられて、御一族をあげて自決せられたのであつた。紀には

「軍將等(いくさのきみたち) 即ち兵を以て寺を囲む。是に於て山背大兄王等三輪文屋君をして、軍將等に謂(かた)らはしめて曰く、吾れ兵を起して入鹿を伐たばその勝たむこと定(うた)之。然るに一身の

故に由りて、百姓を傷り残はむことを愆せじ。是を以て、吾が一身をば入鹿に賜ふ。終に子弟妃妾と一時に自經きて俱に死ましぬ。」とあり、『法王帝説』には「山代大兄及其昆弟等合せて十五王子を尽く滅せり」とある。時に皇極天皇の二年、十二月十四日のことであり（法王帝説）、聖德太子が、推古天皇の三十年二月二十二日（紀には二十九年二月五日とあるが法隆寺金堂釈迦像光背銘及法王帝説による）に薨去されてから丁度二十一年目にあたるわけである。

徳川の俗儒たちは聖德太子が、崇峻天皇を弑逆し奉つた馬子をその後に於て放置し、あまつさへ、彼と共に仏法興隆のことを計られたと論難して止まないが、恐らくそのことは大兄王の御生涯についてもいひうることであらう。然しながら太子の三十年の御事業と大兄王の二十年の忍苦の御生涯との精神はわが国体にとつての意味は彼等の理解の限界を超えて遠いものがある。

大兄王の御最後を聞いた蝦夷が痛心やる方なく既にわが身の運命を予感したことは仇の心をもなびかしむるまことのみちの現しきしるしであつた。中大兄王が中臣鎌子を補佐とされて蝦夷入鹿を誅滅せられたのは大兄王薨去の翌々年であつた。そして入鹿と蝦

夷の二人の元兇のみを誅せられて、その他これに従つて敢へて抵抗をこゝろみるものはなかつた。中大兄王が説かるゝに「天地開闢あめつちひらけしときより君臣きみやつちが始めて有ること」をもつてせられただけで賊党は自らにして解散逸走したといふことは聖徳太子及山背大兄王の引つづき五十年に互る御献身によつてすべてのものこゝろに今や事理が不可抗の威力をもつて刻銘せられたからであらう。この歴史的因果をぬきにして大化改新の事業を外的にとり上げ、形式論的にあげつらふ世の革新論者の極力戒められねばならぬところであらう。ますらをのかなしきいのちをつみかさねて守りきたつたのがわが大和島根であり、その根基の固めと尊き御身を捧げられたのが実に山背大兄王であらせられたのである。

（『新指導者』一七・四・二五）

## 一幕吏の人生記録

このごろ『民間省要』といふ書物を披見して、そこに自分の思ひつゞけてをるところをよくいひあらはしてくれた一人の先人を見出してよろこびにたへないのである。著者

は幕吏であつて、田中丘隅右衛門(一七六三)といふ、享保十四年になくなつてをり、荻生徂徠(一七六六)の門にあそんだことあり、といはるゝから、彼の生きた時代はあきらかであらう。一介の吏僚であるから、そののぶるところは極めて地味のものであり、吏僚としての実際の経験の記録であるが、したしく民情に接して真剣に事実を点検するところにおのづから真実の生命がにじみ出てをる、菊版にして五百頁位もある可なりの大著であり、日本経済叢書の第一巻にをさめられてあるから心ある人々の一読をのぞみたい。自分が之を紹介するのはたゞ学問的興味からではない。自分は今日の世論を前にして憂へてやまぬものがあり、たゞ世事にうとく、努力乏しくしてのべつくしがたいところから、自分の心情を吐露するすべをしらぬ焦燥が彼のことばのうへに幾分なりとも癒されることをよろこびとしてゐるものである。それをくわしくここに再録することは出来ないが、煩をいとはずその一部を引いて見よう。よく一般に問題とされる当時の永代田地売買禁止に関する部分である。

×

或人の曰、百姓永代田地売買御停止の事は、東照宮国を開き給ひし砌、国土の田地

草分けの百姓辛苦して功有しを直覧ちきらんの上御仁慈の深きより出たるよし、誠に難有御恵ありがたきとこそ聞えし。然れども世上の年光止る事なく、三十年を過れば天地の間目に見えずして段々と事改り、或は上に立つ人変り有りては撫民の政令時々に変じ、万物皆其物に非ずして、其人によるなれば、一国の中一部の間にて、其官吏其地頭守護人の仕方により善悪邪正一様ならず、一方は順にして喜び榮え、一方は逆にして悲しみ衰へ、隣に寛に隣は急に、其品々書中に所々述るがごとし、更に筆に、尽しがたし。況や御治世既に百有余年なれば諸国の郷村開国の砌、田地草分けの百姓の末々、いまに相続して有は稀なり。或は初富る者は後に衰へ、初の貧き者は後に榮へ、又は人に召仕はれし者他所より来りてわづかなりともあきなひごと纔成商事などして、小事より段々身帯しんたいを仕上げ、田地山林を買ふやして富家に成る、世に多し。それも又三代程過れば必しも富に身を忘れて父祖の功を売尽し、榮枯地をかへて環の端なきがごとし。諸国の田地と云物、かくかなたこなたへ離散合従して、何れの村の御水帳も皆百姓の名段々と変り、今は幾重の張紙に成て名寄帳と言も、悉く十年目くには村々の百姓打寄て相改、書替て年々の御年貢小割帳をば仕上る事と知るべし。世間如是なれば古しへの草分けの百姓の一度衰へて、

又其兇孫仕出し、父祖の田地を段々に買返す事も又世上に多し。彼是を考へくらべて、民間の事其身に成てこそかゝる事とも知られたり。

永代売買田地の事一得一失かくの如くなれば、一概に命令下るといへども、国家のさはりとなる故に、下々の智いつしかこれをくゞりて、一倍金の手形と言事を思ひ付、上の法を守りて自由に田地売買は成来りしに、近年又彼倍手形をも命令有て止られ、其上に又年季の定法なども御下知有しよし、御慈悲還て国家大悩みと成る。前にも述るがごとく、夫れ国土の田地山林と言物、自由売買有之を以てこそ百姓の宝とは成すなり。世界に常に変ることのあればこそ日月と共に尽る期なし。何事か常住なり。殊に田地自由に売買なくして、いづれの国、いづれの郡、御料私領ともに御年貢米金の無滞相濟事ありなんや。是上に立人、下々の意味をとくと弁へ知り給はざるの一失なりと言ふべし。

夫れ下賤民間の智慮は塵芥の如く、上に立つ職役の人の心には思召方もありなんといへど、それぐの事に対しては、遙に上みに立人の考へに優れる事も多し。時に上よりの命令にして国家に差聞る事あれば、それにはさはらずして、文言を能変じて其

用を弁じ、其序を乱さず、此上にも又下々よりいか成思案なるをしてか、命令の外に計策をか為さん知がたし。然ればかゝる事も詮議なくして事を一旦に極め、上に立人は皆下々の事不案内成物と云てかへり見る心なくして、幾度も下聞を納れざることは、天下の軽きに似たり、是何の言ひ事ぞや、此上証文の文言いかに可仕哉と下より官吏へ御伺を出しなればいづれの御答か有らん、覚束なし。明君の御心にはあらじと言人も多きぞ。もし上智ありといへ共一人なり、下愚おろかしといへど千万人なり。上の命令は理なり。下の行ふ処は事なり。事理一致にあらざして何ぞ事毎に的中する事あらん。

此事（売買禁止のこと）専ら御仁慈の御心より出ると雖も却かたて下々の百姓等差当り金銀の才覚すべき様なく、妻子器材器具それ〴〵相応の物を現金に売放つて後日の事をかへり見ず、果は田地山林を、或は本証文にして高利の金をかり用ひて売、又は前小作いなどして渡すに其品限りなし。争いかか筆紙を以て尽すべき。皆横着者の望次第になりて、貧しき者の助けと成す、露もなし、還かへて寇あだと成なこそ悲しけれ。

夫れ民間の内、十に八九は皆道を守て直成物すくななり。大切の人の金銀をかりて一切の用を弁じ、其恩を一概に打ちたくりて置は稀なり。世の法令にも不レ構、それ〴〵に

相濟す事なり。是は其身人の下に立て卑賤成るゆえに人ゆるさず、又は一度人をこらしては重ての用事不<sub>レ</sub>弁が故に、自分に直成者なり。只一時の用に五人三人宛<sub>づ</sub>常に身を不行跡に持なし、不孝不忠の輩<sub>ぞ</sub>ら公事工みを業とし、人の悪事の尻おしして人に用ひられ、かゝる命令を是として民間の害と成事多し。しかればかゝる命令の民間の不直を引出すの端にもなりなんか。忠臣心を付給ふべし。

×

公式主義の迂闊論をしりぞけて、よく人生の眞実にふれてをる。彼が事実の觀察から得てをるところの人生観には我々にしたいものがある。環<sub>みみがね</sub>の端<sub>はし</sub>なきがごとし、とか、民間の中、十に八九は道を守り直成物なり、とか、事理一致を説くあたりは聖徳太子の十七条憲法のあるところを想起せしむる。すなはち、相共に賢愚なること環<sub>みみがね</sub>の端<sub>はし</sub>なきがごとし（第十条）とも、上和ぎ下睦びて事を論ふに諧<sub>かな</sub>ひぬるときには事理自ら通ふ、何事か成らざらむ（第一条）とも、人尤だ悪しきもの鮮し、よく教ふれば之に従ふ（第二条）とも太子は仰せられてをる。丘隅も吏僚として、太子の憲章はつねに心としてをつたものと推察してよいであらう。「世界につねに変わることをあれば」といつてをるとこ

ろは、今日の世論としていはれる公式的革新が、実際においては現状維持論に結果すること考へ併あはさしめて明快である。殊にいま引いておいた最後のところなどはあまりに今昔一致するところがあつて、むしろおどろきをさへ感ずるのである。實際の名目ともあれ、「公事工みを業とし」てをる今日民間の一部のもの公益優先的あるひは滅私奉公的利己主義には洞察を加へる必要があらう。そしてそのもとづくところ、為政のものゝ戒心すべき責任にあることはもとよりであらうけれども更にそのことは互に他を責めあつてをるときではなくして、時代を根柢に支配してをるところの公式主義的思惟の方法そのものゝ轉換を果さねばならぬこと眞実の統制最も急を要する。

「争か筆紙を以てつくしうべき」とは彼が文中しばしば述懐するところである。筆紙をもつてつくしがたきものが人生であり、その事実である。それを「一概に」あるひは「一旦に」極めて片づけようとするのを彼はしりぞけるのである。一概に、あるひは一旦に取りきめたものに人生の事実を概括して強制するものは心中何らの責任を負ふ必要はなく、真剣なくなるしみを味ふ必要はない。すべてはその「取り極め」そのものゝ上に依存しさへすればよいからである、その取り極めはいくら細かく手をつくしてあつても、

それが公式として人生にのぞむときには、すなはち事理が一致しないときには何事も的中することなきは彼のいふとほりである。

依存すべきものなくして、人生の事実に直接しつゝ事に処してあやまりなからしめむ、とするときにはじめていのちを削る苦心と、すべてが自らの上にかゝはる責任の桎梏しづくとがある。聖徳太子が生き且つ教へたまうた道とはそのやうのものであつた。大士は苦をしのびて衆生を度す。とのみことばの、いかに切実に今の我々にひびくことであらうか。

著者がいふところの、民間の内、十に八九は道を守りて直成物なり、云々の人間観は素朴ではあつても叡智の洞察である。まことの政治、あるひは統制といふものはこの信頼の上に置かれねばいはゆる角つうを矯めて牛を殺すのたぐひであらう。人間は社会的動物といふ方が正しく、人は生れながらにして自由平等なり、といふのはあやまりである。統制か、しからずんば自由放任か、といふのは命題として成立しない。自由か統制か、ではなく、むしろ統制は人生そのものゝうちに内在して道徳として作用してをるのである。それ故に、何人も胸に手をあてゝ見るとき、悪いと思ふことを、正さしむるのが最

も大切である。人尤はなはだ悪しきもの鮮すくなし、能く教ふれば之にしたがふのである。この逆に、十に八九が曲なるもの、といふやうなときには、そして能く教へてしかも之にしたがはぬもの多きときには反省すべきものは却つて教へるものゝ側にあらう。たとへばスリやカッパラヒが存在しうるのは、むしろこのおのづからなる統制によつて、即ち人間相互がもともとは信頼関係によつてむすばれてゐるからである。それを、スリやカッパラヒがゐるからといつて人を見たら泥棒と思ふやうに、一般の人間関係そのものがなつたとしたらどうであらうか。由来道德が姦淫するなかれ、偷盜するなかれ、といふやうに消極的の言ひあらわし方をとつてゐることはよく注意する必要がある。それは根本において人生に内存する自然の法則を信じてはじめて成立するからであり、わがはからひによつてその秩序を構成しようとして積極的の形としてはあらはれないからである。このことを我々は宣長からもをしへられることが出来る。すなはち彼はいつてゐる、「すべて世中の事は何事もよきもあしきも時世の勢によるものにて、いかほど悪きを除かんとすれども、極意のところは人力には及びがたきものなればしひて急にこれを行はんとすべからず、たゞつねく善事はそのかたのくづれぬやうにはからひ、悪き事は少しづゝも消

ゆるやうに長ぜぬやうにと心がけ云々。」こゝにも先人のふかい智慧を見出すことが出来る。我々はつい先頃まで我々国民について、戦場にあるものと国内にあるものとを區別して、国内にあるものの自分の思ふやうにならぬ点をとらへて「ユダヤ的」とまでのしつたもの、たとへば（谷口吉彦氏）を決して忘れることはないであらう。さういふものこそまことの日本人としてのすべてを失つてゐるのに、あゝ残酷なる公式主義者！彼のこの著作は仔細にしらべて行つたならば多くの示唆を我々に与へてくれるであらうが、実は自分は之を見る前に、いろ／＼と時代の参考とすべきものを求めて先人のかきのこしたものを触目するまゝに繙読して多く心みたされなかつた、そのときたま／＼泣く子と地頭といはれた時代の一個の「人間」に出会つた感銘は、之を性急につたへたかつたのである。世多くはおほしほちゆうさい大塩中斎（一八三七—一八五七）の義拳をいふが、自分としては同じ幕府の吏僚としてこの著者の、筆紙につくしがたい人生省察のこまやかさがなつかしく思はれる。中斎の義拳においては理が事をやぶつてあらはるゝ過激性が魅力としてあるが、人生に革命なし、革命なからしむるための、事理一致の不断改革といふのが我々のかはらぬ信条である。このことは聖徳太子のみをしへとしてつとに与へられたのであるが、世のう

つりかはりゆくありさまを、そのうちに没して経験しつつ、いよいよわが心のうちにふかく根ざして行くのをおぼゆるのである。

（『新指導者』一七・四・一）

昭和四十九年五月十九日(日)は本書の著者桑原(暁一)さんの一周忌で、東京の荏原の覚証寺という真宗寺院で、法要がいとなまれた。御遺族・御親戚・友人たちが多勢集まったが、とりわけうれしかったのは桑原さんの教え子の千歳高校の卒業生たちが多勢集まってくれたことである。しかも、その人たちの手によって『故桑原先生一周忌追悼文集』が作られていたことであった。

桑原さんはいつだったか、ぼくは日本一の高校教師(国語)になるんだと言っていた時期があった。そして授業に全力を注がれたのである。そのいのちが生きていることをまざまざと知らせてくれたのがその『追悼文集』であった、それは私たち友人の知らなかった桑原さんの授業の風景をこんなように伝えてくれた。——

桑原先生の現国(現代国語)も古典と同じく一方的な授業でした。つまり生徒に何かをやらせるなどということはめったになくて、たいいてい先生が一人でしゃべっているのです。といっても、生徒から分離して勝手にやっている、といったことではないのです。先生は生徒との一体感をとても大切にしていました。またそれを生徒の方にも要求していました。……ある時には、きう作った句だといつて、

老残の書齋明るむバラ五輪

と黒板に書きました。たいいていそんなことをしながら生徒と一体になっていくのでした。そしてほんとうに一体になった時には、目を細めて、つぶやくような話し方で、しみじみとした話をし

てくれました。僕はこういつた時の先生が一番好きでした。昔、小さかった二人の息子さんをおんぶした時に、背中に伝わってくる子どもとの感觸のよかったこと、監獄に入れられた時（編者注・昭和十八年反戦反軍平和運動の嫌疑により東京憲兵隊に逮捕され拘留された精神科学研究所事件）たまに吸うタバコのおいしかったこと。靴みがきをしていた朝鮮の青年のこと。その青年が書いては持つてくる小説のこと。酔っ払っては外にねて、たまにはドロロンコの中でねていたという話。山谷のこと。親鸞のこととか、こういつた時にする話の題材そのものは、さびしいもの、かなしいもの、うれしいものと、色々でした。けれども先生の口や表情から表現されてくると、そういった感情からは離れた一つのものになって、不思議なつかしさやはるかさを僕達に感じさせるのでした。そして、僕の内にはそれが数多くの苦しみや絶望を味わってきた人が、「それでも、やっぱり、生きるということは尊いのだよ」と、つぶやいているかの様に映っていたのです。（庄司涉氏「千歳時代の桑原先生の思い出と印象」から引用）

こういう文章を読むと桑原さんが授業にいのちをかけたことがわかる。授業は桑原さんの芸でもあり劇でもあり文章でもあったのだ。だから桑原さんは文章にも授業と同じようにいのちをかけたのである。

桑原さんは「初めての著書」の『日本精神史鈔』（昭和四十一年十一月）の巻末の「著者略歴」に、  
一高・東大卒の学歴をも記さないで、ただ、——

昭和五年旧制第一高等学校昭信会に加われる機縁によって今日まで聖徳太子・親鸞の信を相続す。高校国語教育に携わるかたわら、日本精神史の追求に従事す。

と書かれた。

高校国語教育と日本精神史の追求とは桑原さんの事業——つまり人生の二本の柱だったのである。そしてそれは一つのものであった、桑原さんが一つのものにしたのである。

本書に収めた桑原さんの文章は「日本精神史の追求」と言われた系列にはいるものである。第一篇第二篇とも、『国民同胞』（国民文化研究会発行月刊誌）に発表したもので、昭和三十七年三月号所載の「無信の信」から入院直前に書かれた昭和四十八年四月号所載の「壬生記」にわたるものである。——これを聖徳太子鑽仰の文章と楠氏敬慕の文章との二篇に分類した。その意味については「はしがき」の副島羊吉郎氏の文章について見られたい。

なお、青年時代、主として第一高等学校の昭信会の機関誌『伊都いづ之男建おとたけ』に発表した論文を附録として加えた。昭和八年東大国文科在学中から昭和十八年憲兵隊に逮捕されて執筆を禁止されるに至る期間のもので、そのなかから、第一篇第二篇に関連のあるものを選んだのである。青年時代の研究論文が後の研究のもとになっていることを見ることができるとは、時の動きに左右されない一貫した桑原さんの志というものを行間から学びとることができるからである。私には桑原さんはその時代にすでに文体を確立していたように思われる。

その意味では本書は、さきに桑原さんが著わされた『日本精神史鈔——親鸞と実朝』（昭和四十一年十一月・国文研叢書No.2）『続日本精神史鈔——花山院とその系譜』（昭和四十五年十二月・国文研叢書No.12）と並びくもので、「続々日本精神史鈔」と言ってもよいかも知れない。

しかし、もちろん遺著として用意されたものではなく、友人が相談して編集したものであるから、

前二著とは性質を異にするものである。ただ楠氏についてのものとをまとめる意志は話に出しておられたので、編集の細目は別として、この本を出すことについてはよろこんでくださるにちがいない。

表題の「国史の地熱」は、桑原さんの好んだ言葉で、講演の題としても何回か使われたし、最近も昭和四十五年八月国民文化研究会主催の全国青年学生合宿教室の講義（『日本への回帰』第六集）にこの題が使われた。また、本書所載の未発表遺稿にも同じ題の文章があるので、取って本書の総題としたのである。

なお、桑原さんの日本精神史研究は、近代及び現代篇とでもいうべき論文が残っているので、他日、それを刊行して、この方面の論文を集大成したい。

また、はじめに述べたように、桑原さんの「国語教室」とでもいうべき国語の授業を中心にするものをまとめて、われわれ教育にたずさわる者の指針とするとともに後世につたえたいと思う。大方の御支援を仰ぎたい。





著者遺影

著者略歴

明治四十四年八月十六日山梨県谷村に生る  
昭和五年四月、第一高等学校に入学、一高  
昭信会の会員となる。  
昭和十一年三月、東京大学国文学科を卒業  
昭和二十八年、東京都立千歳高等学校教諭、  
日本経済短大講師。  
昭和四十八年三月、千歳高等学校退職。  
昭和四十八年五月十九日、逝去。

著書

『日本精神史鈔——親鸞と実朝の系譜』(国  
文研叢書 No. 3) 『続日本精神史鈔——花山  
院とその系譜』(国文研叢書 No. 11) ▲編著  
『ヨーロッパにおけるマルクス主義批判論  
集』(国文研叢書 No. 14) ▲編集協力執筆  
『欧米名著邦訳 (明治) 集』(国文研叢書  
No. 10) 『新編・日本思想の系譜(上・下)』  
(時事通信社)

国史の地熱—聖徳太子と楠氏の精神—

国文研叢書 No. 16

昭和四十九年十月二十五日 二、〇〇〇部印刷

資料Ⅱ非売品

著者 桑原 暁 一

発行所 社団法人 国民文化研究会

理事長 小田村寅二郎

東京都中央区銀座七一〇—一八

(柳瀬ビル)

電話 (五七二) 一五二六—七  
振替 東京六〇五〇七番

印刷所 奥村印刷株式会社

東京都千代田区西神田一—一四

落丁乱丁のものはお取り替えます





